
Tales of Life

黒羽拓夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales of Life

【Nコード】

N2188V

【作者名】

黒羽拓夢

【あらすじ】

主人公とそれを取り巻く様々な個性を持ったキャラクターたちによる涙あり、笑いありの長い長い三年間の学園生活の物語。この作品はフィクションです。実在する人物、企業、団体、事件とは一切関係ありません。【次話：12/31投稿しました】【校正：12/24EP1迄完了（詳しくは活動報告）】

【謝辞：閲覧有り難う御座います】

Scene 1 ハジマリ（前書き）

始まりはそう偶然で

終わりはそう必然で

恋は人を盲目にさせるから

見えてるものを見落とした

Scene 1 ハジマリ

自分の記憶を探って思い出して欲しい。

よくこんなシチュエーションを見たりしないだろうか？

小説やアニメの冒頭で走っている主人公を

俺は結構見る。

何故って言われれば、その答えは非常に簡単だ。

小説やアニメが好きだら。それ以外の答えは知らないね。

ついでに言えば、ゲームも大好きだ。RPGとか泣きゲー、グロゲーとか。

さて、話を戻そう。

何故俺がそんな事を考えているかと言えば、今俺は走っているからだ。

今までなら「また走っているよw」くらいで見ていた俺を殴りた
いね。だって当の本人は、こんなにも焦っているのだから。

正に当事者になって初めて分かるって奴だ。

でだ。何故、走っているのか？

理由は簡単だ。焦っているからだ。

何故、焦っているか？

理由は簡単だ。遅刻しそうだからだ。

よくある設定だろ？

だが、ここは現実の世界。二次元とは違う。作り物のバーチャルな世界じゃない。

呪文を唱えても、死んだ人間が生き返るはずもないし、エルフとか言う耳の長い人種も、白い羽を背中に生やした天使も、この現実世界には存在するわけがない。もちろん黒い羽を背中に生やした悪魔も。

だから、パンを加えた少女にぶつかったりなどしない。

それに、詳しくは知らないが、俺がやったゲームだけで言うのなら、二次元で少女にぶつかったりするのは入学の時たる大体？

そして、同じクラスになって再会。……そんな感じだろ？

だが、今日は三月十二日。

東京なら桜が見れる頃だろうか？ 流石にまだ見れないか（笑）でも俺には関係ない。

何故ならここは北海道。まだ桜は開花しないし、雪も残っている。まあ、桜など見たくもないのだが。

察しのいい奴は三月の時点で分かったと思うが、今日は入学試験の結果発表なのである。入学試験の結果発表なのである。

大事な事なので二回言いました。

え？ 三月とか普通に考えれば遅いから分からない？

……あ、急がないと！

数分後。

なんとか学園の門の前まで辿り着いた俺を、ムスツとして立っていた涼葉が俺に近付いて話しかけてきた。

「アンタ、何分アタシを待たせる気？」

「ゴメン。いや、ホントにゴメン。……ちょっと用事があってさ」

俺は手を合わせて謝る。用事があったとはいえ、遅れて来たのは悪い事だから。

涼葉の方も、俺の用事が何か察したのか、それ以上追及してはこなかった。

「まあ、いいわ」

そう言つと涼葉は学園の方へ身体を向けた。同時に涼葉の黒髪のパニーテールが綺麗に空を舞う。

「さ、早く見に行きましょう」

「合格してるかな？」

俺の不安げな言葉に涼葉は自信満々に答える。

「アタシが合格してるのは当然の事よ。落ちるなんてありえないわ」

「凄い自信だな。俺は不安だよ」

「当然ね。寧ろ、問題はアンタよ。アンタが落ちてたりしたら意味ないんだからね！」

怒られてしまった。

確かにもし落ちてたりすれば、今までの勉強が水の泡だ。

申し訳ないが、こればかりは恨みつこなしの実力勝負。俺のためには何処かの生徒さんには桜を散らしてもらおう。

俺が入学するために。

涼葉が入学するために。

「待つてよ、涼葉」

俺は涼葉の後を追って学園の門を潜る。

すでに、数え切れない程の受験生が自分の番号を確認している。

手をあげて喜んでいる奴、友達と抱き合っている奴、膝を折り泣いている奴、まるで生気を吸い取られたかのように茫然としている奴もいた。

「七六五……七六五……」

俺は自分の番号を必死に探す、身長が百七十程度しかない俺では、人混みが邪魔をして下の方に書いてある番号が読めない。

「五七三……五七三……。見えないわね」

そりゃあ、俺でさえ見えないのに、百六十弱の身長しかない涼葉に見えるわけがない。

「突撃するわよ！」

「ええ！？」

そう言つと、俺の制止も聞かず、涼葉は人混みを掻き分け、どんどん前へと進んでいく。

「マジかよ……」

昔はこんな性格じゃなかったのに……。

まあ、単に猫被ってただけかもしれないが、仕方ないのかな……。あれ、じゃね……。

「すいません……」

俺も周りの受験生に平謝りしながら、涼葉に付いていく。

「五七三……あつたわ!」

涼葉が自分の番号を見付けて万歳して喜んでいる。

やはり内心は不安だったのだろう。

「さて、七六五は……」

七五一……七五三……七五九……。

ヤバい。冷や汗が止まらない。

ドキドキする……。

「……」

七六二……七六四……。

雫が滴り落ちるのが分かる。

「……」

七六五……七六五!

「……あつた」

俺は無意識に言葉が発していた。

「え!? ホント!」

涼葉が俺に聞いてくるので、俺は自信を持って返してやる。

「ああ、あつたよ」

「やったあ! ……当然よね!」

涼葉も自分のように喜んでくれているようだ。

正直、凄く嬉しい。

何故なら、俺の彼女である涼葉と同じ学園に通えるのだから。

ずっと二人で頑張って、目指してきた……。

色々な困難を乗り越えて、今俺たちは幸せの切符を手にしたんだ。

合格と言う名の数字が入った切符を。
偏差値七十七の名門私立校の

この葉鍵学園に！

S c e n e 1 ハジマリ（後書き）

目が醒めた時には

全てを失っていた

あの日祈った願いも

あの日交わした誓いも

Chapter 1 再会（前書き）

命の砂時計が落ちるよ

止まらずに 戻らずに

夢でありたいと願った

夢物語を呟いた

Chapter 1 再会

四月七日。

今日俺は葉鍵学園の門を潜った。

何故かって？ それは愚問な質問だ。

俺がここに居る理由……。それは至極簡単なものだ。

俺はこの学園に受かったのだ。

ここで三年間を過ごし、そして夢を叶える。

その為に葉鍵学園に入ったのだから。

今、体育館です。立たされてます。正直辛いです。

現実でも画面の中でも、校長の話は長い。とにかく長い。これでもかと言っほど長い。

俺は絶対、話は短い校長の方が人気だと思うね。

こんな感じで「校長です。じゃ、解散」的な方が良くね？……流

石に短すぎるか？

周りを見ると、新入生二百十人の殆どは明らかに「早く終われ」って思っている顔をしている。もちろん、俺もな。

まあ、名門私立校なだけあって、座つたり談笑してる奴はいないみたいだが。そもそも、そんな奴はこの学園を受けようとも思わないだろうがな。

「えゝ。そうですね。では、諺を一つ……」

「はあ……」

俺はため息をついた。

俺は別に太っている訳ではないが、流石に同じ体勢で一時間以上立たされるのは辛い。

上級生は座ってるのに。これは最良だ！ イジメだ！

白髪爺が与えてくる拷問は、まだまだ続きそうだ。

俺、思っただけど、いつその事、これを罰にしたら不良生徒は絶対減るって！

昔と違って体罰とかダメだからね。非常に素晴らしい体罰になると思うよ、うん。

時間の無駄遣いベスト三の中には必ず入るであろう校長先生の長話は、まだまだまだ続く。

俺が苦行を終え、漸く椅子に座ることが出来たのは、さらに一時間後の事だった。

「一年A組の担任を務めることになった“佐倉智夜”だ」

担任の智夜先生は、俺と同じでブラウン色の髪の毛だった。

まあ、分かりやすく言うのなら、茶色？ でもブラウンって書いてあったから少しは違うのかな？

ブラウン＝茶色だから単にかっこよく書いてあるだけか？ 英語にするとかっこよく感じるし。

ぶっちゃけ、髪を染めてはいるけど、詳しくは知らなかったりするんだよね。

それにしても、担任の智夜先生は若く見える。二十半ばって感じだ。

男の俺から見てもイケメンに入る身体と顔をしている。

身長は百八十位か？ ぶっちゃけ、羨ましい。俺もそのくらい欲しいものだけ。

「実は今年から先生となったんだ。つまり、君たちは初めての生徒と言っただけだ。初めてで分からないことも沢山あるけど頑張っ行ってきたいと思う」

先生になって一年目で担任になれるの？ と俺は少し考えたが、確かに年寄りが担任よりはいいのかもしれない。話も合うだろうしね。

会ってすぐだから分からないが、見た目だけで判断するなら、優

しそうだし。

それに、ここは葉鍵学園。東京大学の偏差値が約七十弱位なのに、ココの偏差値は七十七。

簡単に言えば、東京大学より頭のいい奴が通っている。

まあ、東京大学は文字通り大学で、葉鍵学園は高校なので一概には言えないが。

でも、この学園の生徒が東京大学へ受験した場合、九割九分九厘以上は合格するから強ち間違いではないけど。

そんな所で担任を持たされたのだから、担任の智夜先生はきっと凄い人なのだろう。大学院主席で卒業とか？

「一年A組、四十二名。責任を持って全員卒業させて見せる。三年間、宜しくな！」

校長先生とは違い、話は数分で終わった。

そして、教室を出て学園の敷地内にある寮の案内が行われた。

どうやら、ギャルゲーと同じで寮は男女別々のようだ。……当たり前前？

一階が食堂で、二階が一年生、三階が二年生、四階が三年生となっている。

因みに一人部屋の上にエレベーター付きだ。どうやら、年を重ねる事に階段の上り下りの苦は受けないですみそうだ。

でも、普通寮の部屋って、卒業までずっと同じ場所なんじゃないだろうか。別にいいけどね。

決して、移動が面倒とかじゃないんだからな。勘違いするなよ。

そうそう、後、ギャルゲーでは行けるが、現実などでは中々行けない屋上への出入りは自由だ。

と、言うことで、早速屋上に居ます。

あ、分かっていると思うけど寮の屋上にね。

学園の屋上も出入り自由みたいだが、今行く必要はない。って言うか、わざわざメンドイ。

「いい空気だ……」

俺は空気を吸う。

朝から体育館に教室に、人口密度の高い場所だらけだったので、息が詰まってしまった。

それに、知り合いが一人も居ないのはやっぱり心細い……。

「……」

俺はそんな気持ちを払拭させる為、屋上からの景色を眺める。

学園は街から少し高台にあるので、屋上からは街を一望できる。

太陽が沈もうとして醸し出すオレンジ色の夕日が、街を鮮やかに包む。

「綺麗……」

不意に声が聞こえた。

左からだった。俺は左へ顔を向ける。

寮は対になっているので、声の正体は女子寮の屋上に居る彼女から発せられた声だった。

その彼女は、俺と同じようにオレンジ色に染まる街を眺めている。遠目にしか分からないが、とても可愛いという事が分かる。

俺は詳しくないから分からないが、どっかの雑誌の表紙を飾っているアイドルと言われてもまず疑わないね。

その時、彼女がこちらに気付いたのか、驚いている。

対になっているとはいえ、やはり少なからず離れているので詳しい事は分からないが、同じクラスに居た彼女に面影が似ていたので同級生だと思う。

なぜ驚いているかは分からないが、同じクラスならば仲良くしての方がいいと思い、俺は話しかける事にした。

「よっ！ お前って確かA組の奴だよな？」

俺が話しかけても彼女は驚きの顔を隠さない。

「……………」

しばらく無言が続いた後、彼女が漸く重い口を開いてくれた。

「……………恭ちゃん……………だよね？」

彼女が俺の名前を呼んだ。

確かに俺の名前は“緑川恭介”だ。

だが、おかしい。

俺は名前を彼女に名前を名乗ったか？

否！ 決して名乗ってなどいない。

ならば何故彼女は俺の名前を知っているのか？

下駄箱は男女で場所が違うから違う。

体育館で俺の名前を知る事など出来るはずもない。

教室の机には名前が書いてはあったが、四十二人も居るのに俺の名前など覚えているとは思えない。

当然、寮でも知る事など出来る訳がない。

だとしたら考えられるのは、昔会った事があるということだけだ。

「恭ちゃん……………だよね……………」

彼女が自信なさげな声で俺の名前を呼ぶ。良くは見えないが、不安そうな顔をしている。

「そうだけど……………」

「やっぱり！」

さっきまでとは一変。彼女は嬉しそうな顔をする。声も明らかにトーンが上がっている。

「ゴメン。昔、どこかで会ったけ？」

俺は素直に覚えてない事を告白し、聞く事にした。嘘で知っているフリをするより、いいと思ったからだ。

「そう……………仕方ないね。うん、恭ちゃんは悪くないよ。悪いのは私だから」

すると、彼女は一瞬暗い顔をしたがすぐに笑顔を浮かべて俺は悪くないと庇ってくれる。

悪いって、何の事だろう？　きつと、ただ単に覚えていない事を庇ってくれているだけかな。

「私だよ。“植田桜花”だよ。小学校の時、一緒に遊んだでしょ？」

そう言われて、俺は小学校の頃の記憶を漁る。すると、小学校低学年の時、桜花と遊んだ記憶が出てくる。でも、小学校の高学年の時には桜花はもう居なかった。どうしてだっけ？

「途中で転校しちゃから、覚えてなくても仕方ないね」

そうか、転校したから高学年の時は遊んだ記憶がないのか。

桜花の言葉で理由が分かった俺は覚えている事を告げてやる事にした。

「覚えているよ。ちゃんと」

「ホント!？」

桜花が再び、明るいトーンに変わる。

「ああ。さっきまでは忘れてたけどな」

「いいの。思い出してくれただけでも嬉しい……」

桜花は仄かに顔を赤くしてるように見えた。

「……」

恥ずかしいのか、顔を下に向けてしまった。

「桜花。でも、嬉しいよ。知り合いが居なくて心細かったんだ。これからよろしくな!」

俺は素直に心の内を桜花にぶつける。

「……うん。こちらこそよろしくね、恭ちゃん!」

俺の問いかけに、桜花は俺が知る中で今日一番の笑顔を見せてくれた。

Chapter 1 再会（後書き）

僕の小説の脚本 シナリオは

HAPPY ENDの皮を被った

BAD ENDしかなくて

でも それでもいいんだ

Chapter 2 将棋は導く（前書き）

手に入れた一冊の本を

適当に捲らないで

だって 再び読むことは

ないのだから

Chapter 2 将棋は導く

俺は今、寮と校舎を繋ぐ渡り廊下で桜花を待っている。

「……早かったかな」

昨日、屋上で出会った後、明日一緒に朝食を食べようと約束していたのだ。

だが、その約束の時間まではまだ十五分近くもある。

「……まあ、待たせるよりはマシだよな……」

俺は携帯を開き、桜花が来るまで待つ事にした。

「ごめんね……待った？」

桜花が来たのは五分後の事だった。

良かった……定刻通りに来ていたら、十分も待たせる所だったぜ。

「いや、全然。だから、気にしないでいいよ」

「恭ちゃん……やっぱり優しいね」

桜花が笑う。ぶっちゃけ、かなり可愛い。

昨日はあんまり詳しくわからなかったが、今日は目の前に居るのでその可愛さがより一層分かる。

身長は百五十五よりやや高いって感じで、紫色の髪に赤いリボンをつけている。

服装は……もちろん制服だが、とても似合っていて、二次元の世界から飛び出したみたいだ。

「これが日本の技術！ スリーディかぁ！」

セーラーワンピース+ケープの制服で、全体的に薄い黄色が基調で、それぞれの淵には濃い赤色になっていて、さらにその中に黄色い線が付いている。

取り外し可能なケープはピンク色で、暑い時は着なくても良いらしい。

その上に濃い赤色のリボンが可愛さをアピールしている。普通に服として着てもオシャレだろう。

まあ、桜花は可愛いので何でも似合うだろうけど。

最近はりボンよりネクタイの方がアイドル人気で大ヒットしているらしいけど、俺は断然りボン派だぜ。

胸はBという所だろう。少ししか膨らんでない所が良い。ドストライクだ。歌でBは中途半端って言われたけど、無い方がいいけど少しは有った方が……それがいい。

なんて、少し馬鹿な事を考えていると桜花が心配した顔で話しかけてきた。

「大丈夫？　どうかしたの？」

「いや、大丈夫だよ。あまりに桜花が可愛いので見とれてたのさ」
嘘ではない。本当の事だ。

R　十八の所を見ていましたが。

「はう……」

桜花は急に顔を赤らめてしまう。

「さて、そろそろ食堂に行こうか？」

俺はケータイを閉じ、女性ものと違い黒が基調の制服に付いている内ポケットにケータイを仕舞うと、桜花を促す。

「う、うん。そうだね、行こ」

桜花はそう返事をし、俺と一緒に食堂へと向かう。

朝知ったんだが、寮にある食堂は自分で作れて所なので、基本的には小腹を空いたから夜食でもって人が利用するらしい。部屋にはキッチンがないからね。

だから、本来は学園側の食堂で朝昼夜の飯を食べることになる。

まあ、そのお陰で桜花と一緒に朝食を食べれるんだから良しとするか。

「混んでるね……」

食堂に入るなり、桜花がそう呟く。

「そうだな……。全校生徒が一辺に集まるからな」

食堂の広さは寮の食堂の何倍も広い。同じ大きさなら入りきらないだろうから当然だろうけど。

俺と桜花人ごみの中に入り、俺たちは券売機の前へとやって来る。混雑しているが、少し遅い為か、案外あっさりと辿り着く。

「なにになに……」

俺はどんなメニューがあるのか、じっくりと見る。

「色々あるな……。んゝ迷うぜ」

「一通りは揃ってるみたいだね。朝だし、軽く普通にサンドイッチでいいんじゃない？」

「焼きおにぎりとお悩んだけど、じゃあ、桜花の案を採用かな」

俺はそう言っ、サンドイッチの券を二つ購入した。

「あ！俺と同じタマゴサンドにしちゃったけどいい？」

俺は勝手に同じタマゴサンドを選んでしまった事を詫びる。

つい、いつもの癖が出てしまった。

「いいよ……。その、恭ちゃんが選んでくれたものなら何でも……」

桜花はモジモジとして顔を下に向けてしまう。

「じゃあ、受け取ってくるから席を確保しといってくれる？」

「うん。任せて」

そう桜花に告げた後、俺は券を持ってタマゴサンドを貰いに、桜花は席を確保する為に空いている席を探す。

因みに、ここの食堂は券になっているものは全部無料だ。つまり、ただで食べることができる。

「お願いします」

俺はタマゴサンドの券を二枚、白いエプロンを着ているおばさんに渡す。

「はい。ちょっと待ってね」

そう言っ、おばさんは棚から既に完成してるタマゴサンドの載っている皿を、二つ俺に渡す。

「はい。どうぞ」

「ありがとうございます」

俺は礼を言つて、桜花のもとへ向かう。

「さて、何処にいるかな？」

そう呟き、桜花を探す。

「あ、恭ちゃん。こつちだよ」

桜花が手を上にあげて手招きをしてくれる。

ちゃんと、席を確保出来たみたいだな。俺は桜花が確保してくれた席に座る。

「はい。タマゴサンド」

俺はテーブルを挟んで目の前にいる桜花にタマゴサンドを渡す。

「ありがとう。恭ちゃん」

桜花は笑顔で喜んでくれる。こんな事で喜んでくれるなら毎日だつてしてやるぞ。

「今日から勉強だな。一緒に頑張ろうな」

「恭ちゃんなら大丈夫だよ。頭良いし」

「そんなことないよ。だってこの生徒はみんな天才なんだから」

「……確かに。みんな天才だね。でも恭ちゃんなら乗り越えられるよ」

俺より上の奴を乗り越えるか……あ！

「さ、早くしないと時間になるし食べちゃおうぜ」

「うん」

俺たちはようやく朝食を始めた。

「そうなんだー」

「そうなんだよー」

タマゴサンドだけでは、食事は直ぐに終わり、俺と桜花は話して盛り上がった。

その時、隣の席から声が聞こえた。

「くっ……。王手飛車取りだと……。流石、最高峰のコンピュータ……」

隣の席の男子生徒は、すでに食事を終えてケータイをガン見している。

王手、飛車……この二つから導かれる結論。どうやら、ケータイのアプリで将棋をしているようだ。

「将棋？」

俺は隣にいた生徒に話しかけた。

何故なら、俺は将棋が大好きだからだ。

「え！？ ああ、そうだ」

隣にいた生徒は、俺に携帯の画面を見せてくれる。

盤を見る限り、既に終局間近まできている。

「これはナムコナのアプリだね」

「ナムコナの将棋アプリが一番強いし使えるからね。しかも無料だし」

ナムコナとは大手の大企業で、テレビゲームや携帯ゲームなんかも手がけている。

この将棋アプリもその一つだ。

最近では携帯電話でも、業務用パソコンには劣るけど、家庭用パソコン程度の力はあるからな。

ホント、日本の技術力には完敗だぜ！

……でも、俺は日本人だから完勝だ！

「これは、もう無理じゃね？」

「そうなんだよねー。飛車取られたら、もう無理なんだよー」

「何かいい手はないものか……」

「うーん……」

二人して考え込む。

桜花は、将棋が分からないのでポツンとしている。
が、仕方ない。今回は許して貰おう。

だって、将棋に勝てるボードゲームはないから！

結局、いい手は無いという結論が出て、ちょうどチャイムもなったので切り上げる事となった。

そして、三人で教室に向かうのだが……。

「え？ 君たちもAクラスなのか？」

「ああ。偶然だな」

なんと、同じA組だった。なんと言う偶然か。

「あ、いい忘れてたな。俺は“大野光輝”。よろしくな！」

光輝が、親指を上げてdの形で突き出してくる。

「俺は恭介。緑川恭介だ。これからよろしくな」

俺も光輝と同じ親指を上げてdの形にして突き出してやる。

「私は、桜花です。植田桜花。恭ちゃんとは幼馴染みです」

桜花は流石に親指を上げて突き出したりはしなかったが、笑顔で名前を告げる。

「恭介に桜花ちゃんだね。こちらこそよろしくな！」

「ああ。これから仲良くしようぜ！」

「もちろん！」

廊下で話していたら、先生が来たので、俺たちは教室に入り席に着いた。

「さて、今日から授業を開始する訳ですね。俺は“松本雅治”です。担当教科は一時間目の授業、国語総合になる」

雅治先生は、担任の智夜先生に比べると、年はくつてると思うが、それでも三十はいつてないと思う。

ネクタイをピシッと閉め、髪は黒色なので凄く真面目そうに見える。……と言っても、ほとんど坊主だけど。

何だ？ この学園は若い先生が多いのか？

そう言えば、昨日の体育館に居た先生たちは確かに若そうな人が多かった気がする。

「さて、では早速授業を始めましょうか。皆さん教科書の十二ペー

ジを開いてください」

言われた通り、俺は教科書の十二ページを開く。

タイトルには「屋上の選択」と書かれている。

「今日からこの屋上の選択をやっていくよ。では、テキトーに……。じゃ、優希ちゃん読んでくれる？」

「は、はい、ですっ」

まさか自分が選ばれるとは思ってなかったようで、声が上ずっている。

席を立った優希ちゃんは薄い黄色のロング髪で左側に小さな花飾りを二つつけていた。

身長は桜花より少し低いくらいに見えるから、百五十五くらいだと思う。

桜花とは違うが、また違う可愛らしさを持っている。

「屋上の選択。それは偶然だった。余りにも偶然だった。ただ、特に理由もなかった。でも、何故か僕は屋上へやってきた」

放課後。

教科書を詰めていた所に光輝がやって来た。

「なあ、恭介って将棋強いのか？」

そう聞いてきたので「特に段とかは持ってないよ。ただの趣味の一つみたいなものだから。だから、強いかどうかは分からないな」と、素直に返す。

別に偽る必要もないしね。正直、中の上くらいはあると思っているが。

「へえーじゃあさ、これから勝負しない？ 俺の部屋に将棋盤あるし」

「いいね。やろうぜ」

特に断る理由もないので光輝と将棋をする事にした。

「一緒にどっか行こ？」

そこに、桜花が話しかけてきた。

「悪い。今日は光輝と一緒に将棋することにしたから、また今度ね」
俺の言葉に桜花は一瞬、瞳の光が消えたが、直ぐに笑顔で「……
そっか。恭ちゃんにも用事はあるもんね。なら、仕方ないよね。う
ん。別に女の子と遊ぶわけでもないし……」後半は何言ってるか聞
き取れなかったが、分かってくれたようだ。

「じゃあ、また夕飯の時にね」

そう言つて、桜花は教室を出ていった。

「じゃ、俺たちも行くか」

「ああ、負けないぜ」

俺の勝利宣言に光輝は「言っじゃん！ でも、勝つのは俺だぜ。
お前を俺の将棋テクニクで、敗北へ導いてやるよ」と、逆に挑発
してきた。

「敗北へ導かれるのは光輝、お前だ」

俺たちは光輝の部屋へと向かう。

……確かに、将棋は導いてくれた。
俺と光輝を導いてくれた。

友達へとな。

Chapter 2 将棋は導く（後書き）

刻まれる時間は

誰にでも平等だけど

錯綜と飽食の世界は

量が同じでも 質は違うんだ

Chapter 3 夢願う屋上（前書き）

夜の校舎に二人

校則違反の屋上から

寒い身体を温めながら

一瞬の煌めきを待っている

Chapter 3 夢願う屋上

『べ、別にあんたのために作ってきたんじゃないんだからね！ 勘違いしないでくれる！？』

そう言っ て来たのは、俺の彼女。

正方形の箱を可愛い風呂敷に包んで持っている。

それは、もしかしくなくても、もしかすると……。

「そんなこと言っ て」

カチッ

『で、でもあんたが可哀想だから仕方なくよ！ 仕方なくなんだからね！？』

「でへへ」

つい、声が出てしまう。

でも、仕方ないさ。俺の彼女が弁当を作っ て来てくれたのだから。嬉しすぎて、今すぐにでも電波ソングでも歌いそうだぜ。

カチッ

『お弁当……早く受け取りなさいよ！ 手が疲れるじゃない！？』

「ぐへへ」

コンコン

ん？……気のせいかな？

ゴンゴン

明らかに、パソコンのマウスのクリック音とは違う音がする。

「恭ちゃん……どうしたの？」

桜花！？

何故？ ここは男子寮だぞ！

「どうしたの？ ねえ恭ちゃん！」

「いや、大丈夫だ！ 何でもない！」

俺はとりあえず、扉の向こうに居るであろう桜花に向かって話しかける。

「よかった……恭ちゃん、時間になっても出てこないから……」
桜花の言葉に、俺は時計を見る。

七時三十七分。

しまった！ 完全にギャルゲーに時間を奪われていた！

その時、オート機能が作動して『ねえ、恭介！ 聞いているの！？』
音声が再生されてしまった！

「……恭ちゃん。誰かいるの？」

ヤバイ！

理由は分からないけど桜花の声色が怖い！

「中に誰もいませんよ！」

俺は桜花に叫ぶと同時に、素早くギャルゲーをセーブしてパソコンの電源を落とす。

そして、目の前にある長方形の箱を焦ってポケットに終い、扉を開ける。

そこには、桜花が立っていた。笑顔だが、目は笑っていない。

「……恭ちゃん。本当に誰も居ないの？」

「も、もちろんだよ！ さあ、朝食たべにいこうぜ！」

桜花は、まだ疑っているようだったが、男子寮に女の子が居るのはヤバイと捲し立て、食堂へと連れていく。ってか、本当に誰も居ないのに、俺は何焦ってるんだろ？

食堂へ辿り着くと、光輝が居たので一緒に食べる事となった。

「昨日はお前のせいで一日中、将棋の事が頭から離れなかったぜ」

「俺は爆睡したけどな」

「勝者の睡眠か！」

「意味わかんねえよ」

そう、昨日俺と光輝は将棋をした。

かなり、互角ではあったが最後の最後で俺が勝ったのだ。

やはり、あそこでの飛車捨てが勝利の要因と言えるだろう。

「……将棋、好きだね」

桜花はまだ不機嫌なのか、単に話についてこれないからか、話のトーンが低い。

「ああ、大好きさ！ やっぱり、運の要素がないのがいいね」

俺の言葉に光輝が「お、分かってるね！ まあ、たまには麻雀とか運要素があるのもいいけど、やっぱりボードゲームは将棋だな」と、相槌を打ってきた。

「だよな」

俺も光輝の話に相槌を打つ。
もちろん、賛成の相槌をな。

「一時間目の授業を始める。だが、その前に自己紹介しておく」
そう言つと、先生は自分の名前を黒板に書き始めた。

「浜田だ。“浜田哲志”。担当は保健体育だ」

先生は国語総合担当の雅治先生と同じくらいの年齢に見える。が、こちらは茶髪でネクタイもピシツとしていない。

ぶつちやけ、サングラスでも掛けたら、めっちゃ怖そう。ヤクザや暴力団に間違われても仕方なさそうだ。

唯一、身長はそんなに高くない。雅治先生より高いくらいに見えるから百七十五前後だと思う。

「では、保健の教科書を開け」

食堂で俺たち三人は昼食を食べている。

「牛丼は旨い！」

俺は牛丼を食べ、叫ぶ。

玉葱抜きのな。

当たり前だが、汁だくではない。汁だくは嫌いだ。玉葱も嫌いだ。
「いやいや、豚丼の方が旨いでしょ」

光輝が、朝とは違い反対と立場となつて反論してきた。

「牛が一番だろ！」

「豚こそ肉の頂点だ！」

俺と光輝は、牛と豚のどちらの肉がいいか激しい激論を繰り返す。

「よく考えてみる！ どちらが高い？ 牛だろ！」

「高いからつて美味しいとは限らないぜ！」

「それはひがみだ！」

「お前は常識に囚われている！ 高いから美味しいと言う非科学的な根拠を並べているに過ぎない！」

「なんだと！」

「なんだよ！」

俺は退かない。

だが、光輝も退かない。

熱い激論の隣では桜花が、親子丼を食べていた。

「なら、桜花に決めて貰うつてのはどうだ？」

「望むところだ！」

急に矢面に立たされた桜花は困惑している。

「牛だろ？」

「豚だよね？」

「ええと……」

すでに朝のような不機嫌さはない。ただただ、困惑している。

そして、桜花が口を開く。

「牛も豚も……」

桜花が結論を出す。

「……………」

固唾を飲んで答えを待つ、俺と光輝。

「牛も豚も好きだけど、脂は嫌い……」

桜花の言葉に俺と光輝は「そのとおり！」と、相槌を打って激しい肉の擦り合いは終結した。

昼食が終わり、五時間目が始まった。

「情報処理の授業を始める。机にノートパソコンを出してくれ」

そう先生に言われ、俺は机の物入れに入れていたノートパソコンを机の上へと出す。

「出したら、立ち上げてくれ」

そう言われたので、素直に電源を入れる。

まさか、この学園でノートパソコンを持って席を立つ奴など居ないだろう。

「……」

……居た。

男子生徒が、ノートパソコンを持って席を立った。クラスの注目が立ち上がった男子生徒に集まり出す。

「どうしました？」

先生が男子生徒に言葉をかける。

「あれ？……？」

男子生徒の頭にクエションマークが浮かんでいるが見えた。

「悠斗君。パソコンを立ち上げるとは、パソコンを持って立つことではなくて、パソコンの電源を入れることですよ」

先生の言葉に、立ち上がった男子生徒は恥ずかしそうに席に座った。周りから、クスクスと笑い声が聞こえる。

驚いたぜ。知らない奴が居るとはな。

「えーと、エクセルを開いてくれ」

エクセルを開く。

すると、そこに誰かのプロフィールが表示された。

「それは、先生のプロフィールだ」

画面に表示されたプロフィールの名前欄には“三浦敏彦”と書かれている。

身長は百七十八と書かれていて、血液型など基本的なプロフィールが書かれている。

画面ではなく見た目からわかるのは、雅治先生と同じ黒髪で、ネクタイをピシッとしている事。こっちはちゃんと髪があるけど。

「今回は、そのプロフィールを参考に自分のプロフィールを書いてくれ」

プロフィールか。

俺は、項目は消さず、敏彦先生のデータをデリートして、代わりに俺のデータを打ち込む。

「名前は、緑川恭介。身長は、百七十。体重は、六十。血液型は、A。誕生日は、二月七日。家族構成は」

自分のプロフィールを打つだけの、授業とも言えない授業は数分で完成した。

「出来たら、印刷して持ってきてくれ。それで今回の授業は終わりだ」

俺は、印刷ボタンを押してA四用紙に印刷された俺の簡易的なプロフィールを先生に届ける。他の生徒も次々と印刷した用紙を三浦先生に渡す。

「はい。みんな出したね。じゃ、今回の授業はここまで。残りの時間は自由に使ってくれて構わない」

と、許可が出たので、俺はいつもは携帯電話で作っているが、久しぶりにパソコンで自分のブログを開き、文字を打ち始める。

ブログと言っても、誰にも教えてないし、日記も書いてはいない。ただ単に、置き場として使っているに過ぎない。

文字列を打っては消して、打っては消してを繰り返している間に時間は刻々と進んでいった。

「時間だね。次回からはプログラムについて、勉強するからね」
五時間目が終わる。

六時間目が始まった。

この授業が終われば、放課後だ。

「社会を教える“鈴木和大”だ。和大とは、親がみんなと仲良く、そして大きく育つようにって、付けてくれたんだ」

和大先生は、年齢は敏彦先生や智夜と同じ二十五くらいに見える。哲志先生と同じく茶髪で、ネクタイもピシッとしてはいいないが、哲志先生とは違い、怖くはない。

名の通り、仲良くなれそうな先生だ。そして、横にでかい。

別に、凄く太っている訳ではないが、他の先生がみんな痩せていたので、余計に感じるのだろう。

「では、まずは教科書の六ページに載っている復習から始めるとするか」

俺は六ページを開く。

「では、読むから聞くように」

授業が終わり、放課後となる。

俺の席に、桜花と光輝が来て、楽しく談笑してた。

「そう言えば、二人のメールアドレス知らなかったな。教えてくれよ」

俺は、二人のメールアドレスを知らない事に気付き、教えて貰うことにした。

「確かに教えてなかったな。いいぜ」

「私ももちろんOKだよ」

光輝と桜花は、ポケットから携帯電話を取り出す。

俺もポケットから携帯電話を取り出して、赤外線で電話番号とメールアドレスを交換する。

「これで……いつでも恭ちゃんと一緒だね」

桜花が、笑顔で俺のメールアドレスを見つめている。

そんな変わったメールアドレスじゃないんだけど……。最後の数字は、好きな漫画キャラの誕生日だけだ。

「そう言えば、五時間目の十分休憩の時にクラスメイトが言ってたんだけど、明日喫茶店がオープンするらしいよ。明日、行ってみな

い？」

「いいね。桜花は？」

「恭ちゃんが行くなら、もちろん行くよ」

桜花も行くつもりのようなのだ。

明日の予定は決まったな。

その時、急に光輝が時計を見て慌て出した。

「あ、ゴメン！ 今日ちょっと用事あるから先に行くね」

「ああ、じゃあ、夜に」

「おう！」

光輝が教室を出ていく。

「あ、私も先生に呼ばれていたんだ」

「どうして？」

「プリント、出すの忘れてちゃって。てへ」

「天然だな」

「あはは。出してくるよ。じゃ、あた後でね」

桜花も教室を出ていく。

特にコレといった理由はなかった。

ただ、そう言えばまだ学園の屋上には行ってなかったので行ってみよう。そんな軽い気持ちだった。

屋上の扉を開けた俺に映ったのは、一人の少女だった。

「あつ……」

その少女は、昨日雅治先生に当てられて朗読をしていた同じクラスの子、優希ちゃんだったと思う。

長いロングの髪の片方に小さな二つの花飾りをしていてとても可愛い。

そして、か弱そう。虫でさえ殺した事ありません的な無垢な少女だった。

「……」

「……………」

だが、その少女の手に持っている物は、そんな少女の見た目とは相容れぬ物だった。

少女の手の中でまだ煙を出し続けているそれは、煙草に見えた。高校生での喫煙は犯罪だ。だが、高校生で喫煙している奴は意外と多い。

前にテレビを見た時に、ある高校ではクラスの半数が喫煙者だったというニュースをやっていた事を思い出した。

「い、言わないで下さいですっ」

煙草を吸っていた。

いや、実際に吸っていた所を見た訳ではないが、手に煙草があるのだから、吸っていたのだろう。

しかも、少女、優希ちゃんの反応を見ると、やっぱり吸っていたみたいだ。

「一つ聞くけど……………」

「は、はいっ」

「ソレ、煙草だよね？」

一様確認する事にした。

もしかしたら、煙草に見えるだけで、本当は煙草風チョコとか、そんな言葉を期待して……………」

「え、あ、あう……………」

だが、優希ちゃんは言葉に詰まる。

やっぱり、煙草なんだ。

そう、俺は結論付ける。

「……………そうです。これは煙草です……………」

本人の言葉により、それが煙草である事が証明された。

「お願いしますっ言わないで下さいですっ」

優希ちゃんは、縋るように俺に頭を下げる。

「……………」

俺は反応に困った。

いやあ、マジで困った。

どうしたら良いんだ？

「顔上げて、優希ちゃん」

取り敢えず、顔を上げさせる。

俺は無意味にポケットを漁る。

すると、長方形の四角い物があることに気付いた。……煙草じゃないからな。

それを取り出すとトランプだった。

「……？」

優希ちゃんが、不思議そうにこっちを見ている。

トランプの箱には、天使と銃を持った少女が描かれている。

そう、これは大人気アニメ「Angel Beats」のキャラクタートランプなのだ。

そう言えば、朝に桜花の奇襲があつて、焦つて置いてくるのを忘れていた。

何故かポケットにしまっていたみたい。別に普通の物なんだけどね。

「トランプしようぜ！」

俺はそう言つと、箱からトランプを取り出し、シャッフルを始める。

「え……？」

優希ちゃんが、意味が分からないといった顔を窺わせる。

「ポーカー出来るか？」

俺は、優希ちゃんに聞く。

「はい……一様……」

それを聞いた俺は「もし、俺に勝つたら言わないであげるよ」そう、優希ちゃんに告げた。

「ほ、本当ですかっ」

優希ちゃんが、疑うように、そして期待するように聞いてくる。

「男に二言はねえよ！ 北海道民は面積と同じで、心が広いのさ」

「は、はいっ」

それを聞いた優希ちゃんが、笑顔で返事してくる。

「いい？ 勝負は一回。交換は三回までだからね」

「はいっ」

俺は屋上に座り、優希ちゃんはやがんで、今ポーカーが始まる。

俺は、優希ちゃんに五枚、自分に五枚、カードを配る。

そして、残りのカードを真ん中に置く。

「どう、優希ちゃん。手はいい？」

俺は自分の手札を見ながら、優希に聞いた。

「ひ、秘密なのですっ」

当たり前だが、教えてはくれなかった。

俺の手は、A、四、六、七、十。

初手はブタだ。決して良い手ではない。

「そうそう。俺は恭介。緑川恭介」

俺は、優希ちゃんにまだ名前を言っていない事に気付き、名を名乗った。

「恭介さん、ですね……」

「さんは要らないよ。じゃあ、俺から交換な」

俺は三枚を捨て、三枚を引く。

二、三、六、七、Jとなった。

このままではノーペア。つまりブタだ。運の無い。

「ゆ、優希の番ですね……」

優希ちゃんは、俺と同じで三枚を捨て三枚を引いた。

三枚と言う事は、ワンペアは完成してるのか？

「ど、どうぞ、ですっ」

「あ、ああ……」

俺は、再び三枚を捨て、三枚を引く。

五、六、六、七、K。

漸くワンペアとなった。少なくとも、ブタでは無くなった。

「ゆ、優希ですね……」

優希ちゃんは、今度は二枚を捨て、二枚を引いた。と言うことは、スリーカードが出来ているのか？

「最後だな。俺は三枚捨てるよ」

そして、三枚を引く。

「……」

「ゆ、優希は……二枚捨てます……」

そして、二枚引く優希ちゃん。

これで、後は手を相手に見せるだけで勝負が決まる。

言わば、手は攻撃力！ どちらの攻撃が、相手を喰らうか！

「……いきますっ」

優希ちゃんは手札をオープン。

Q、Q、Q、一、二。

スリーカードだ。

「……」

「……どう、ですか？」

優希ちゃんが、俺に聞いてくる。

俺は、自分の手札を開く。

六、六、六、K、K。

フルハウスだ。

「そ、そんな……」

俺の攻撃は、優希ちゃんを喰らった。

「俺の勝ちだ」

俺はがっくりと頂垂れる優希ちゃんの目の前で、カードを集めてトランプを箱に仕舞う。

そして、ポケットに入れると立ち上がり、屋上の入り口へ歩き出す。

「い、言わないで……」

優希ちゃんが後ろから、俺に話しかけてくる。
だが、その声は今までよりも遥かにか弱い。

「優希はまだ……」

「何のことだ？」

俺は立ち止まりそう言った。

「え？」

優希ちゃんがきょとんとしている。

「俺は何も知らないぞ。じゃ、また明日、教室でな」
そう言っつて、俺は再び歩き出す。

「あ……」

階段を降りる途中、俺の背中の方から「ありがとうございます」という
声が聞こえた。

Chapter 3 夢願う屋上（後書き）

僕の願いが叶いますように

夜空に輝く跡地に祈った

誰かが諦めた夢に

手を伸ばした

Chapter 4 同士の相違（前書き）

桜が咲いて出会ったのは

確かに君だった

桜が咲いて訪れたのは

忘れた記憶

Chapter 4 同士の相違

現在、六時間目の授業が始まろうとしている。

六時間目の科目は数学。担任の智夜先生の担当する科目だ。

「では授業を始める。本来なら復習から入るんだが、まあそんなものは飛ばしても問題ないな。では、十六ページの相対性理論から

」

チャイムがなり授業が終わる。

「おつと時間か。キリが良く終わったな。では、また明日な」

終わりのLHRがこの学園にはないので、担任の智夜先生はそれだけ言っと、教室を出ていく。

「おわったー」

それはつまり、今日の授業が全部終わって、放課後になった事を意味する。

俺は腕を上への伸ばし、伸びをする。顔文字にするなら、＼(^ ^)0
^ ^ / オワタのポーズだな。

今日は昨日約束した通り、桜花と光輝と喫茶店に行く事となっている。

「恭ちゃん。疲れたねー」

桜花が俺の席へと来て、そう話し掛けてきたので「ああ、そうだな」と、軽く相槌を打っておく。

桜花とちよつと話していると、光輝も俺の席へとやってきた。

「お、集まってるな。じゃあ、喫茶店に行こうか？」

光輝は行く気満々のようだ。自分から誘っておきながら、逆に不満だらだらなら困るけどな。

「ああ。桜花は準備いい？」

俺は光輝に返事をして、桜花に確認する。

「あ、ゴメン。ちょっと、お手洗行ってからでいい？」

と、桜花が言ってきたので「じゃあ、玄関で待ってるよ」と、桜花に返事をする。

俺の言葉に「うん。わかった。ゴメンね。ちょっと、待っててね」そう言つて、桜花は教室を駆け足で出ていく。

「光輝はトイレ大丈夫か？」

「大丈夫さ。いざとなったら、お前の穿いているオムツを借りるから平気さ」

そうか、なら平気だな。

うん……平気

「つて、穿いてねえよ！」

思いつき突っ込んだね。

もう少して、頷く所だったよ、まったく。

「わりいわりい」

光輝は笑いながら、手を合わせる。

「まったく、もう」

「でも、良かったよ。否定しないから、マジって引いてしまったんだよ」

そりゃあ、気付かなかったからだよ。

俺は確かに熟女派か、幼女派かと聞かれれば、迷わず幼女派と言う自信がある。

だが、子供プレイは別に好きじゃねえよ！

ロリっ娘が斬られたりする言わゆるグロは好きだがな。

だが、あくまでもそれは二次元の話。三次元の幼女に手は出さないぜ。ロリコンは、タッチはしないのさ。

見つめるだけ。紳士なんだよ。

「まあ、いいか。早く行こうぜ」

「よくないからな」

俺は光輝に突っ込んで、そして席を立って、光輝と玄関へ向かう。

「……」

その途中、廊下で俺は優希ちゃんと出くわした。

優希ちゃんとは同じクラスだが、優希ちゃんと話をしたのは、昨日の屋上の時だけだ。

俺は無視するのもおかしいと感じたので、話しかける事にした。

「よう！ 優希ちゃん！」

俺は優希ちゃんに話しかけた。

「は、はいっこんにちは、ですっ」

優希ちゃんは焦ったしゃべり方で返事をしてきた。

昨日と違い、特に疚しい事もないはずなのに、このしゃべり方なのは、単に人と話すのが苦手なのだろうか？

まあ、俺も苦手だけどね。画面の中の女の子とは、気兼ねなく話せるんだがな。

「何だ？ お前たち仲いいのか？」

光輝が、多少辛かったように俺に聞いてくる。

会って一日で告白するなんてしねえよ！ 元サッカー選手じゃあるまいし！ 靴下だって履いてるし！

「そんなんじゃないよ！ ただ、昨日ちょっと話ただけだ。な？」

俺は優希ちゃんにそう問う。

すると、優希ちゃんはさっき以上に焦ったしゃべり方をする。

「は、はいっ昨日、ちょ、ちよつと話ただけなんですっ」

恐らく優希ちゃんは昨日の事を思いだし、焦っているのだろう。

だとしたら、悪い事をしたな。そう思った俺は話を変える事にした。

「優希ちゃんはこれからどうするの？」

まあ、この問いの答えが「屋上」なら意味ないが。

でも、本当に「屋上」でもそうは言わないだろう。

「ゆ、優希ちゃんは特に用事はありませんですっ」

「なら、一緒に喫茶店行かないか？」

特に誘った理由はないが、せつかくまた話せたのだからまた話したいと思ったのは事実だ。

可愛いしね。いい娘そうだし。萌えるし。

「え？」

優希ちゃんは意味が分からないという顔をしている。

「俺たちこれから新しく出来た喫茶店に行くんだ。優希ちゃんも一緒にどう？」

俺は、光輝と桜花の三人でこれから新しく出来た喫茶店に行く事を伝えた。

「……いいんですか？」

優希ちゃんが不安そうに、そう返してくる。

「いいよな？」

俺は光輝にそう聞く。

「もちろん。ラブラブな二人を引き離すなんて俺にはできねえよ」

「だから、そんなじゃねえって！」

光輝はふざけた言い方をしたが、一緒に行く事を反対ではないようだ。

「ってことだ。な、一緒に行こうぜ？」

「は、はいっお願いします」

そう言って、優希ちゃんは頭を下げる。

「いやいや、顔上げてくれよ。あ、そうそう。コイツは大野光輝な」

俺は光輝の名前を優希ちゃんに教える。

「光輝さん……ですね。優希の名前は優希です」

そう言って、またぺこつと頭を下げる。

ヤベエ、可愛い。抱き締めたい……。

おっと、あぶねえ。危うく、ロリコンから、ペドフィリアになってしまっ所だったぜ。

まあ、優希ちゃんをロリと見るかは、意見が分かれそうだが。高校生だしね。

「光輝でいいよ。優希ちゃん。これからよろしくね」

「はいっ」

光輝と優希ちゃんの自己紹介が終わったそのすぐ後「恭ちゃん。ゴメンね。待った？」と、言いながら駆け足でこちらに向かってくる桜花が見えた。

「お、やつと来たな」

「ゴメンね恭ちゃん。……恭ちゃん、彼女は？」

桜花は優希ちゃんを見て、俺にそう聞いてきた。

そう言えば、当たり前だが桜花は優希ちゃんの事を知らないのか。でも、クラスメイトなんだが。

まあ、四十二人全員を覚えるのはまだ無理かな？

俺だって、全員は把握してないしね。

「同じクラスの優希ちゃんだよ」

俺は桜花に優希ちゃんを紹介する。

「そうだったの……。ごめんなさい。知らなかったわ」

「い、いえっ当たり前ですっ」

桜花は知らなかった事を詫びて、それを俺の時みたいに優希ちゃんがあたふたしながら話す。

「で、優希ちゃんも一緒に喫茶店に行く事になったから」

「よ、よろしくですっ」

優希ちゃんが桜花に頭を下げた。

「えっ……いや、頭上げて。ね？ 一緒に行こ」

桜花は、一瞬暗い顔をしたが、優希ちゃんが頭を下げたため、桜花も慌ててしまつて、一緒に行こうと誘っている。

何故、暗い顔をしたのだろうか？ 優希ちゃんを本当は誘いたくなかったのだろうか？ 嫌いなのかな？

でも、優希ちゃんを知らなかったのに嫌いも何もないはず。

「俺の気のせいか……」

「何が？」

「え、いや、何でもない」

光輝の言葉に、俺は心の声を口に出していた事に気付कि慌てて繕

う。

「さ、喫茶店に案内してくれ」

「OK!」

「おかえりなさいませご主人様、お嬢様」

「……」

「……なあ、お前の言っただ喫茶店でここだよな……?」
俺は戸惑いながら、光輝にそう問う。

「……ああ」

「もしかして、こういうのが趣味なのか?」

「ち、違う! 勘違いするな! 知らなかったんだ!」

光輝が強く反対する。本当かなあ?

「あの……席へ……」

メイドさんが困っている。

「あ、お願いします」

俺たちはメイドさんに案内され席に着く。

「まさか、メイド喫茶だったなんて」

光輝が溜め息をついている。

どうやら、本当に知らなかったようだ。

「メイド喫茶なんて……リアルで見たのは初めてですっ」

優希ちゃん結構楽しんでいるようだ。

俺だって、アニメとかでは結構見たりするが、リアルでは初めてだ。

メイド喫茶のメイドは、文字通りメイド服を来て、カチューシャをつけている……と言うのは思い込みで、実際は色々なコスプレをしている。

俺たちを案内してくれた人は、‘涼宮ハルヒ’のコスプレをしていた。

店内もピンクを基調に可愛らしく装飾されていて、メイドさんの

歳も成人を迎えている奴はいなそうだし、メイドさんたちはみんな童顔で、お姉さん系が好きな人は嫌かも知れないが、ロリ好きな俺としてはここはパラダイスだ！

「……」

「イタッ！」

「……」

桜花に足を踏まれた。目が笑っていない。

そんなに顔に出てたのだろうか？

「大丈夫だ、俺は二次元にしか興味はない」

「そ、それはそれで困るんだけど……」

桜花は本当に困っている顔をしている。

「まあ、せつかくきたんだから何か頼もうぜ」

光輝がそう言つて、メニューに開く。確かに、せつかく来たのに何も頼まないなんて労働のムダ遣いだ。俺もメニューに目を落とす。

……。

「いもうとのあいじょうこねこねオニギリ」千円。

「おいしくなれ」すぱいすいりオムライス」千五百円。

「ツンツンこうしんりょーカレーライス」千五百円。

「おにいちちゃんはわたしだけのものチョコ」二百円。

「……たけえ。」

メイド喫茶つてリアルでも高いんだな……。

俺たちは目を合わせて「なあ、どれ頼むんだ？」俺の問いに答えない三人。

その時「ご主人様、お嬢様」メイドさんがやってきた。

「なんすか？」つて言つても「メニューは決まりましたか」つて事だろう。

残念だが、まだ決まってないんだよな。

だから、そう言おうとした時、メイドさんが喋ったのは想像して

いたのとは違う言葉だった。

「呼ばれたい呼び方はありますか？」

へ？

呼ばれたい呼び方？

俺は基本名前で呼ばれるからな！。

あ、桜花には恭ちゃんって渾名で呼ばれてるけど。

「ど、どんな呼び方があるですか？」

俺が考えていると、代わりに光輝が返してくれた。

「そうですね」では、一つずつ言っていきますので、好きなのを決めてください」

そう言つと、メイドさんは呼び方を一つずつ言い始めた。

「ご主人様」

まあ、さっきまでのだな。

これがスタンダード。

これがなければ、メイド喫茶は存在さえしなかったのだろう。
だとしたら、考えた奴は神だな。もしくは紳士だな。変態という
名のな。

「旦那様」

……ないな。

俺はまだ未成年だし。

「すいませんが、名前をうかがつても宜しいですか？」

そうメイドさんが聞いて来たので「恭介です」と、素直に名前を
教えた。

「恭介くん」

……。

可愛い子から恭介くんなんて言われたよ！

はい、俺死んだ！ 萌え死んだよ！

「……」

「ッ！」

桜花にまた足を踏まれたよ！ 二度目は一度目よりイテェんだよ！

だが、桜花にそんな事は言えなかった。何故かは分からないが、桜花の事が怖い……。

「恭介ちゃん」

ぐはっ！

「……」

おっと危ない！

これ以上顔に出たら、また踏まれてしまう！

出しているつもりはないんだけどね。

分かりやすいのかな……。

「おにいちゃん」

ぐふっ！

俺死んだ！

ダメ、これは萌え死んだよ！

もう踏まれてもいい。ニヤケ顔が抑えられない！

「お兄様」

……。

ナムナム。

あー。俺は、天国へ旅だった。いや、二次元へと旅だったよ。

「と、各種取りそろえております」

メイド喫茶スゲエ！

この俺を、殺すとはな。恐ろしい。

「で、どう呼んだらよろしいですかあ？」

「おにいちゃん」

即答だね！

絶対メイドさん、俺より歳上だと思うけど、もう関係ないね。

「はあい、おにいちゃん」

ああ、もう極楽の極み。これ以上の幸せなんて果たしてあるのだろうか？

「ところで、おにいちゃん 食べるものは決まったあ？」

「なんでもいいよ、めいのオススメを」

「わかったよ、おにいちゃん」
そう言って、メイドさんは奥へと入っていく。

「何デレデレしてるの？ てか、めいって何？ 妹の名前？」
光輝に突っ込まれてしまった。

「ふと、思いついた。メイドだからめいちゃん」
俺はキメ顔で光輝に返す。

いや、呆れないでよ！ 賢いって誉めてよ！
「そんなに……おにいちゃんって呼ばれたいの……」
桜花が質問してくる。

なんか、黒いオーラが見えるんですけど。
そんなに俺、デレデレしちゃダメっすか！

「……楽しいですね」

優希ちゃんは、俺たちを見てそう呟いてくれた。

「なら、これかも仲良くしようぜ」

「え？」

「ね？」

「は、はいっよろしく願いますっ」

優希ちゃんは座っているのに、頭を下げテーブルに頭をぶつけて
しまう。

「だ、大丈夫？」

「は、はいです……」

「おにいちゃんおまたせ、いもうとお手製ハンバーグ、だよ」
メイドさんはそう言って、俺たち四人にそのいもうとお手製ハン
バーグを置いていく。

まあ、どうせレンジでチン商品なんでしょうけど。

「おにいちゃん五百円であぐんしてあげるよ」

「金取るんかい！」

俺は何故か昔流行ったエセ貴族芸人のような語尾になっていた。

「所詮ビジネスですよ、おにいちゃん」

「ぶっちゃけるね」

「これが真実ですよ」

それだけ言うと、メイドさんは他の席へと行ってしまった。

「うん……」

味は普通だった。

まあ、普通ここにくる人はメイドさん目当てなんだろうけど。実際に周りはキモオタっぽい奴ばかりかし。

『そんなあゝゆあ、困っちゃうよあゝ』

「何だ？」

「テレビからみたいだな」

テレビ？

俺はテレビへと顔を向ける。確かに、その声はテレビからだった。めっちゃロリ系の可愛い女の子がテレビに映っていた。見た限りではドラマのようだ。

「誰だ？ 知ってる？」

俺はみんなに聞く。

「CMとかで見たことあるけど、それ以外は知らないね」

「売れてないのかな？」

俺のこの言葉に対して罵声が飛んできた。

「ふざけるな！ ゆあゆあはめっちゃ大人気なんだよ！ 僕の……」

大好きな子なんだよ！」

急に、隣にいた奴が突っかかってきた。

まあ、そのテレビに出てる子のファンなんだろう。

「そうなんだ」

「そうなんだよ！ ゆあゆあはめっちゃ可愛いんだ！」

……アレ？ コイツ知ってるぞ？ 誰だっけ？

黒髪で、身長は俺より下だから百六十五くらいな、弟子分みたい

な感じの奴。

……あ、昨日、パソコンを立ち上げた奴だ。

「お前、確かパソコン立って持ち上げた奴だろ」

「なっ！　なんでそれを！」

「なんでって、クラスメイトだからな」

俺の言葉に、桜花たちも思い出したようだ。

「う……とにかく、ゆあゆあは可愛いだろ？」

「まあ、そうだな」

俺の言葉に「だろ？　一目見た瞬間からファンだよ」と、めっちら喜ぶ……確か、悠斗。

「でも、俺は二次元にしか興味はないから」

俺の言葉に「は？　二次元？　ワロスw」と、バカにしてきた。

「アニメとかゲームって現実にないんだよ？　まさか、それさえも分かってない？　それぐらい痛い子？　乙！」

「ふ……アニメやゲームの素晴らしさが分からないなんて悲しいね！」

「なら、どちらがいいか、勝負するか？」

「望む所だ！」

「金髪ツンデレお嬢様を召喚！」

「ふ、リバースカード！」

はい、俺ゾンビです。魔装少女やってます……じゃなくて、今俺は店に置いてあったカードゲームをやってます。

使用料五百円です。

甘い内装とは裏腹に、現実辛いです。

KONAMIの出しているカードゲームとは一切関係よ？　ブシロードでもないからね！　本当だよ！

「喰らえ！　バーストストリーム！」

……本当に関係ないんだからねっ！

「ぐっああっ！」

「常闇の世界が見えるか？」

「厨二病乙」

「あの……」

急に、優希ちゃんが間に入ってきた。

「なに？ 優希ちゃん」

もしかして間に入って仲裁しよう？

ふ……もはや、優希ちゃんの可愛さを持っても、二次元を愚弄した奴を殺す事でしか俺の拳は治まらないぜ！

「どっちが攻めで、どっちが受けですか？」

「「えっ？」」

飛び出した予想もしない言葉に、俺と悠斗……ああ、戦う前に確認したが、悠斗であっていた。

そう、二次元を愚弄した奴の名は“笠原悠斗”。

そいつと一緒に優希ちゃんの予想外の言葉に、あっけらかんとしてしまった。

「え……優希ちゃん、何かおかしいことを言ってしまいましたか？」

優希ちゃんの言葉に、俺は怒りの熱が冷めてしまった。

あ、今はどっちが攻撃しているかって意味かな？

「……受けは奴だ」

「ええ！？」

悠斗が驚き、そしてあっけらかんとしている。

「……まあ、悪かった。二次元をバカにされてイラッとしてしまった」

「いや、俺も、人にはそれぞれ趣味があるもんな。同士どうしこれからは仲良くしようぜ」

「もちろん」

優希ちゃんのおかげで熱が冷めて、冷静な判断が出来ようになったぜ。

確かに二次元はまだまだサブカルチャー、批判の的なんだよな…

…。非常に残念ながら。

興味の無い人には理解出来ない領域。

向こうもそれを悟ったのだろう。

俺たちは握手する。

こうして、出会った。

まあ、正確にはクラスメイトだからもっと前に出会ってはいるが……。

悠斗と友達になる初めての日だった。

因みに、後日友達になった印に悠斗に某泣きゲーを貸してやったんだが、サッカー部に苛ついてディスクを割ってしまったとか言われた。

……。まあ、友達関係が割れなかったからヨシとするか。

それに、苛ついたと言うとは、感情移入したって事だしね。

俺も、初めてやった時は思わず叫んじゃったね。

「芽衣をいじめるなー」ってな。

Chapter 4 同士の相違（後書き）

君と出会って

歯車が狂い出したなら

出会わなければ

よかった

Chapter 5 声優を探して（前書き）

幾千の欠片の中で

特別に選ばれた

だから幾億の夢を

諦めないといけない

Chapter 5 声優を探して

土曜日。

昔なら午前だけだが、授業があつた曜日だが、今は休みである。今でもゲームの世界じゃ、授業があつたりするけど。

まあ、ここはゲームの世界じゃないから休み。

そう、俺は二次元と三次元をごっちゃになってたりしない！

だから、可愛いと思っても間違つても結婚したいとは思わない。

昔、秋葉原で二次元のキャラクターと結婚できるよう著名活動した奴がいると聞いたが、それは流石に引いてしまった。

うん、そういうのが、オタクの偏見に繋がっているのではないか？

俺はそう思う。全員が同じだとは限らないのだ。

俺のように二次元が好きな人も居れば、悠斗のように三次元……つまりアイドルが好きな人も居るように。

寧ろ、俺は働かないニートを差別するべきだと思うね。

……もしかして、オタクとニートは一緒だと思つてない？

それは間違いだ！ 四 + 四 = 八じゃなく、パーと答えるくらい間違いだ。

分かりやすく言えば、西から太陽が昇って、東に沈むって思っているくらい間違っている。

……まあ、小学生の時、あの歌のせいで間違つて覚えてテストでミスってしまったが……。

まあ、それはともかく！ オタクとニートは違うのだ！

どう違ふかつて？ 知りたいか？ なら画期的は解決案を一つ伝授してやる。聞いて驚くなよ？

ググれ。

分かりやすい解決策だろう？

さて、話を戻すが今日は土曜日。つまり、休みである。

まあ、寮生活の為、学園に居る事に変わりはないが。

てな訳で、俺は寮の自分の部屋でゲームしてまーす。楽しいよー！
でも、今俺はツンデレに会っているんだ。べ、別に勘違いしないでよねっ！

の方ではなく、詰んだ出れないの方な。

鷹文がなかなか過去を話してくれないんだ。

名前を偽るのがダメなのかな。

アニメ化したら、声優は勿論、グリーンリバーライト……緑川光に。

でも、つい選んじやうって！

後、河南子は可愛い。

はるちゃんや佳奈多と同じ事はすぐ分かったけど、鷹文と中の人と同じって事はビックリしたぜ！

午前十二時。

正確には午後零時？

まあ、いいや。ゲームがツンデレしてしまった俺は、ちょうど昼時って事もあって食堂に来ている。

「はい、しょうが焼き定食お待たせー」

「どうも」

俺は食堂のおばちゃんから昼飯を貰い、空いている席へと着く。

「いただきます」

どう？

偉いだろう？ ちゃんと「いただきます」って言ったぞ？

……まあ、桜花たちが居ないから誰も返事をくれないけどな。

「あ……」

「あ……」

目が会う。どうやら、悠斗も昼飯を食べに来たようだ。

「どうだ？ 良かったら一緒に食べようぜ？」

俺は悠斗にそう提案する。

べ、別に恥ずかしくなんかないけどっ！

そ、そう！ 一人じゃ悠斗も恥ずかしいだろうからね！

ぼっちって思われたくないだろうし！

お、俺は恥ずかしくなんかないけどねっ！

勘違いするなよ！

「なら、お願いされようかな」

やったー！

……うん。今、悠斗は「やったー！」と心で叫んでいるに違いな
い。

間違っても俺は叫んでなどいないからな！

「恭介はしょうが焼き定食かー」

悠斗が、向かいの席に座りながらそう聞いてくる。

「ああ、そういう悠斗はハンバーグ定食なんだね」

「僕の好物なんだ」

そう、悠斗が満面の笑顔で言ってきたので「舌が子供だねー」つ
て、からかってやった。

「そんなことないよー！ そんなこと言ったら、浜田先生も子供舌
になっちゃうよ？」

そう言って、悠斗が指を指すので指された方を見ると、浜田先生
がハンバーグ定食を食べていた。

「ケチャップ……口についてるね」

「そうだね…… やっぱ子供舌なのかな……？」

冗談で言ったつもりなんだが、本気にした？

なら、ここでもなんか気のきく一言をビシッと行ってやろっ。

「バカ舌よりはいいよ」

「……そうだね」

アレ？ 反応薄！？

めっちゃ、気のきいた一言じゃね！？

……おかしいな……。

「そう言えば、恭介って部活入る？」

「なんだ突然？」

料理を食べ終えた頃、悠斗が突然部活に入るかって聞いてくる。

「いやあ、入るのかなーって思ってたさ」

部活か……。

確かに、入りたい奴は五月迄に書類を書かないといけないんだよな。だから、四月は体験って事でどの部活も勧誘を行っている。

「別に入る気はねえなー。入っちゃうとゲームする時間とかも減るしねー」

まあ、これが本音。入る気など無い！ 断じて無い！

大切な事なので二回言いました。

「そうなんだ。まあ、僕も部活とか入ったら、ゆあゆあが主役のドラマ見れないから入らないけどね」

「ホント、ゆあゆあ好きだねー」

「うん！ ココに転校して来ないかなー」

悠斗、それは無理だろうよ。

小説や、アニメならフラグなんだろうが、現実では無理に等しいぜ。

人気アイドルがわざわざ北海道に転校して来る理由なんてないんだから。

「来たらいいね」

「うん！」

まあ、悠斗も来るはずないって本当は分かっているんだろうから、否定はしなかった。

「僕、アニメやゲームなどの二次元とか全然興味ないんだけど、面白いの？」

悠斗。それは、愚問だよ。

「ああ、素晴らしい世界だね！ もし猫型ロボットがいるのなら二次元に連れて行って欲しいね！」

「へえ……」

「まあ、興味がない人には下らない領域なんだろうけどさ……」
そう……興味がない人には下らない領域なんだ。

「なら、やってみたら？ 泣きゲーでも貸してあげるよ？」

「泣きゲー？」

悠斗とは泣きゲーを知らないのか？

ビックリだぜ！

顔がw(。o。)wみたいになっちまったじゃねえか。

「泣きゲーってのは、その名の通り泣けるゲームのことさ」

「ゲームで泣くの？ バカじゃね？」

「昔の友達も同じこと言ったよ。でも、この泣きゲーは凄いや？
泣きゲーと言われててもなかなか泣けない俺でも泣いたからな」

俺は熱弁した。このゲームの素晴らしさを。

「マジか」

「ああ、初めてやった泣きゲーで、初めてやったルートがそのルートなんだが、結婚式のシーンは自然と涙が出た」

「そんなにスゲエの！」

悠斗が興味を持ってくれているようだ。嬉しい限りだぜ！

「後はやってみたものにしかわからないだろうな」

「じゃあ、貸してくれ」

「オk」

悠斗に泣きゲーを貸す約束をした。

泣いてくれたら嬉しいな！。

「あ！ そう言えば知ってる？」

突然、悠斗が話を変えてきた。

知ってるとか言われても、内容を聞かされてないのに知ってるも知らないもあつたもんじゃない。

「何が？」

「うちのクラスに声優が居るって話」

「……マジ？」

「マジ」

なにー！？ 声優がうちのクラスに！？

そ、そんな！？ 知らないぜ！ そんな事！ 誰だ？ 誰なんだー！？

「だ、誰が！？」

俺は身を乗り出して、悠斗に問い質す。

「そ、そこまでは分からないよ。お、落착いて……」

知らない間に、かなり早口になっていた。

俺は悠斗に謝り、席に座る。

「よし！ 声優を見つけにいく！？」

俺の言葉に「ええ！？ どうやって？」と返してくる悠斗。

「まずは情報戦術だ。グローバル世界の今、情報はかなり有効な手段だ」

俺はそう悠斗に言うと、ケータイを取り出し、電話をかける。

プルルル

『は、はいっ』

電話をかけた相手は優希ちゃんだ。

何故、優希ちゃんを選んだか？

それは消去法だ。桜花は何故か他の女の子の話になると機嫌を悪くするし、光輝は全くそういうのに興味なさそうだから。

優希ちゃんは、メイド喫茶を楽しんでるようだったし多少は知っていそうという理由からだ。

「優希ちゃん。今、大丈夫？」

『はいっ大丈夫ですっ』

ケータイでも、そのしゃべり方なんだな。

そこまで、会話とか苦手なんだ……。

「ちよつと聞きたいんだけど、うちのクラスに声優が居るっていう話、聞いたことない？」

『せ、声優がうちのクラスにですかっ』

「うん」

「……知りませんです………」

どうやら、優希ちゃんも知らないらしい。

「すいませんです………」

優希ちゃんが謝ってきたので「いいよ。こっちこそ悪かった。じやあ」と言って電話を切った。

「……俺の情報戦術は失敗した」

「繋がり薄！」

悠斗がなにか言っているが無視！

「じゃ、次は刑事は足だ戦術だな」

「僕たちは刑事じゃないよ」

悠斗がなにか言っているが無視！

「聴き込みだ！」

「えゝメンドイよ」

悠斗がなにか言っているが無視！

「さあ行くぜ！」

俺は悠斗を連れて、声優探しの旅へと旅立った。

カラオケルームの前に俺と悠斗はやってきた。

「声優は声が命！そして声優と言えばキャラソン！恐らく歌の練習をしているに違いない！」

うん、この推理力は小学生探偵をも越えたな。

「ホントかな………」

悠斗がなにかブツブツ呟いているが無視！

「まあ、見てろ！」

俺はカラオケールの扉を開ける。

「………」

「………」

そこには誰も居なくてただ、‘LIVEDAM’のデモスクが充電切れを起こしていた。

「くっ……」

そんなバカな！ 俺の推理のどこに穴が！

「誰も居ないけど……」

あ……！

「待て」

「何？」

「くくく……気付いてしまった。そう、声優は隣の部屋だ！」

「それはどんな根拠で？」

俺はなにも分かかってない悠斗のため、俺の素晴らしい推理を披露してやる。

「忘れていたよ。声優の本業は演技することだ。歌うことじゃない。つまり、アフレコ機能がある‘CROSSO’に声優がいる！」

どうだ！ じっちゃんも完敗する程の推理は！

「ホントかな……？」

「見てろ」

俺は扉を勢いよく開ける。

「……」

「……」

そこには過剰ビブでカンストを出しているダミ声の生徒が居た。俺はそつと扉を閉める。

「……あんな奴が声優な訳ないし……」

一体何処！ 何処で推理をミスってしまったのだろうか！？ まったく分からないよ。

「もう、まったくわけの分からない推理は止めたら？」

悠斗がなにかふざけた事を言っているが無視！

「もう、諦めたら？」

悠斗がなにかふざけた事を言っているが無視！

「そうだ！ 職員室に乗り込み、個人情報を奪えば……」

名案だ！ 右京さんの新しい相棒になれるね！

「それは犯罪だよ！」

「犯罪？ 犯罪だと言うなら罪名を言ってみれよ！」

「諸々だよ！ 退学になってもいいの！？」

退学……それはマズイ。

どうやら、冷静さを失っていたようだ。

「さてよ。よく考えたら、声優が男性か女性か知らないんだけど」

「聞かれても知らないよ」

クソッ！

どうしたらいいんだ！ どこに声優が！？

「……あ！ 写真部！」

「写真部？」

「そうだ。最近の声優は声だけじゃない。見た目も重要なんだ。だから写真部で安心の角度を探しているに違いない！」

そうだ！ そくに決まっている！

と、言う訳で写真部にやって来た……が。

「……廃部」

「……まあ、人気なさそうだしね」

「まだだ！ きつと陸上部だ！ ライブとかのために体力を上げているに違いない！」

「……休みかよ！」

陸上部は本日休みと言う看板が掲げられている。

「もう、諦めた方がよくない？ 無理だって」

悠斗がなにかイミフな事を言っているが無視！

「そうだ！ 美術部に違いない！ きつと画伯って呼ばれないために頑張っているに違いない！」

「……存在しない？」

「それには僕もビックリだけどね」

なんと、美術部は存在しなかった。

後から聞いた話だと、浜田先生が画伯と言われて怒って廃部にしちゃったらしい。

「猫のようにすばしっこく逃げやがって」

「いや、元々来てないだけだっけ」

悠斗がなにかほざいているけど無視！

「んー。演劇部だ！　そこで演技力に高めているに違いない！」

「ホントかなあ……。僕にはなんだか、君が三十三分探偵な気がしてきたよ」

「私には貴方しか居ないの！　お願い！　行かないで！」

演劇部では、少女が演技をしていた。

「……」

「……」

「いやあ、香菜ちゃん凄いなー」

演劇部の部長らしき人が、同じ一年生らしき少女をベタ褒めしてる。

「ありがとうございます」

「……なあ、正解っぽくないか？」

俺は小声で悠斗に呟く。

「……いや、でも……そうと決まったわけでは……」

悠斗は驚きを隠せていない。ふふ、俺の推理力に驚いているんだろっ。

身長は百六十くらいで、金髪をツーサイドアップにして、制服ではなく赤色を基調した服に着て、下は白いニーソだ。

うん、可愛い。

「まあ、見てろ」

俺は悠斗の肩に手を置き、そう呟くと前に出る。

「ねえ、香菜ちゃん……いいのかな？」

俺は、さっき部長に香菜ちゃんと呼ばれていた少女に話しかける。

「……何？」

うん、冷たい態度だけど、訂正しないって事は合っているって事でいいよね。JK。

「俺は恭介。緑川恭介。あいつは同じAクラスの笠原悠斗」

とりあえず名を名乗ってみた。

俺は好きなRPGシリーズの主人公の一人が「名前を聞くならまず自分が名乗れ」的な事を言っていたので。

「……“竹達香菜”」

名前を覚えてくれたー！

……ん？ 何か聞いた事ある名前のような……。

「……あー！」

「何よ、いきなり。五月蠅いわね」

「俺のやってるエロゲーの、俺の妹がそんなに可愛いわけがない、のツンデレのヒロインの声優でしょー！？」

タイトルは人気ラノベにパクリ文化の中国もビックリなほど似ているが、「こんな」じゃなくて「そんな」だから大丈夫らしい。

「なあ！？ ちょっと来なさい！！」

「イデデ……」

俺は香菜ちゃんに腕を捕まれ、拐われていくよー。

連れて来られたのは屋上だった。

「アンタ！ バカじゃないの？ 人前でエロゲーとか言わないでくれる！？ 変な噂が立ったら困るじゃない！！」

「はい……」

現在俺は、屋上で正座させられています。

決してMではないよ？ 寧ろSなんだよ？

だから、白いニーソを見て踏みたいなんて思わないんだよ？
本当なんだからねっ！

「ちよつと聞ってるの！」

「……はい」

「いい！ 二度と人前であたしが声優をやっているとかなわないで
よね！ 分かった！」

「……はい」

「フン……分かればいいのよ」

そう言つと、香菜ちゃんは階段の方へ向かう。

だが、急に足を止めて「で、どうだったの？」と、聞いてきた。

「何が？」

正座させられ恐縮している今の頭ではなんの事が分からない。

「だから……その……演技よ、演技！ エロゲーやったんでしょ！

？」

「あ、ああ。とっても良かったよ」

嘘なんかではない。心から出た本心だ。

「……そう」

それだけ言つと、香菜ちゃんは階段を降りていった。

俺の妄想かもしれないが、階段を降りて行く時の顔は微笑んでた
ように見えた。

Chapter 5 声優を探して（後書き）

君の道は険しくて

その上 道は脆くて

簡単に崩れて

底へ落ちていく

Chapter 6 オタクと腐女子の本探し（前書き）

自分の世界

仲間が居ればいいけど

仲間が居なければ

他人には興味のない領域

Chapter 6 オタクと腐女子の本探し

日曜日。

昨日と同じく休みである。やはり、週二日制はいいね。

これに慣れたら、土曜日学校行ってたのが、馬鹿らしく感じるよ。頭は賢くなるけどね。

ププツ。

自分のギャグに笑ってしまったぜ！

え？ ツマラナイだって？

有り得ない……。

嘘……嘘だよ？ 嘘、嘘嘘嘘！

ねえ！？ ねえってば！！

……何か、ヤンデレ見たいになっちゃったぜ。

Nice boatを見てしまったからだな。

まあ、グロ好きの俺にしてみれば、まだまだ物足りないね。やつ

ぱ、内臓は見えないと、興奮しないぜ。

あ！ もちろん、二次元の話だぜ？ リアルにしたりなんかしね

えよ？

感化とかされてないからな！

「恭介さん！ お願いがあるのですっ！」

そう言つて、優希ちゃんがやって来たのは、昼食の時だった。

「ふ？ もふしあ？」

何言ってるんだと思うかもしれないが、カーレライスを口に含みながら喋ったのだから仕方ない。無論、玉葱は抜いてなる。

「ん？ どうした？」と言うつもりだったのだが、結果的には「ふ？ もふしあ？」となっちゃった。

優希ちゃんは頭の上にクエッションマークが見えないから、意思

は通じたと思う。

もちろん、実際に頭の上にクエッションマークなんか浮かぶ訳ない。あんなのは、二次元だけの話だ。ただの比喩表現に過ぎない。

「大切な本をなくしてしまいましたですっ」

「大切な本？」

「はいです。お願いしますです。一緒に見付けて下さいですっ」

優希ちゃんが自ら頼ってくれるとは……感激っ！

「オk」

もちろん、即オkと頭が考えるより先に出たね。

「ありがとうございますっ」

優希ちゃんがペコリと頭を下げた。

ヤベエよ！ 麦酒が犯罪的美味さなら、優希ちゃんは犯罪的可愛さだよ！

「で、本って漫画？ ラノベ？」

本と言っても様々な種類がある。

ジャンプやサンデー等の月刊誌、単庫本。

ラノベと呼ばれるライトノベルや、‘人間失格’や‘吾輩は猫である’等の有名小説。

‘匣の中の失楽’等のミステリー小説も人気だな。

でも、優希ちゃんみたいな可愛い今時な女の子は、やっぱり、雑誌かな？ ファッション雑誌とか？

俺は雑誌とかは見ないから分からないけど、一度だけ芸能人等のスキヤンダルなスクープを特集してる雑誌は見た事があるな。

「それは……」

優希ちゃんは何にか、言いづらそうにしている。

言いにくい本なのか？

日記とか……？ 日記って本に含まれるのかな？

まあ、含まれるだろうけど、日記なら日記って言っただろうし、違うか？

確かに、日記は恥ずかしいな。

もし、誰かに見られたら……アレ？ 正解か？

「もしかして日記？」

「いえ、日記ではないです……」

不正解だった。

うん。じゃあ、何だろうか？

他に言いづらい本ってあるだろうか？

少女漫画？ でも、別に普通だし、恥ずかしい要因はないな。

……十八禁？ 男子なら別に普通だから考えもしなかったけど、

優希ちゃんのような性格なら、確かに言いづらいだろう。

「……十八禁？」

「違いますですっ！」

強い口調で否定された。

うん、強い口調で言われたのは、優希ちゃんが俺に心を許してる証拠として受け止めよう。

ポジティブ！

「……ゴメン。分かんないや。何の本？」

もう、何の本か考えも考えも思い付かなかったたので、俺は言いづらそうにしているけど、優希ちゃんに聞く事にした。

だって、聞かなきゃ、探しようもないしね。

「それは……」

やっぱり、言いづらそうにしている。余程、知られくない本なんだろうか？

逆に興味が湧いてきちゃう。人間ってやっぱり、他人の秘密とか知りたくなる人間だとしみじみ感じる。

俺は、今猛烈に知りたい衝動にかられている。優希ちゃんが秘密にしたい……まあ、頼ってくる時点で言いづらいけど、知られてはいけない本でもないんだろうけど。

「大丈夫。他言はしないよ」

と言いつつも、俺だけは聞くぞと言う気持ちが込められているのは事実だ。

あー、俺、卑しいな。

「実は……」

優希ちゃんが重い口を開き、喉に突っ掛かっている言葉を吐き出す。

「……自作の……本……です……」

「へ……？」

自作……？

自分の作品……。

自分で作った品。

……。

あー、確かにそりゃあ、恥ずかしい。

万が一、見られたりしたら、一生立ち上がれない気がするぜ。不登校になっちまうよ。

だが

「自作出来るなんて凄いじゃないか！」

そう思った。

俺も趣味で自作とかしてるけど、片方しか出来ないから、結局は真の意味で完成してないんだよね。

まあ、近い内に、挑戦するつもりだけどね。出来るかどうかは分からないが、確実に諭吉は羽根生やして飛んでいっちまうがな。

「あの……探して……」

優希ちゃんが、俺の顔を覗き込んでくる。

そのおかげで、意識が自分の自作の事になっていた事に気付いた。「ゴメンゴメン」

俺は優希ちゃんに軽く謝り「じゃあ、探そうか？」と笑顔で、そう優希ちゃんに言った。

「ありがとうございます」

優希ちゃんも、そう返事して本探し……優希ちゃんの自作の本探しが始まった。

あ、もちろん、カレーライスは全て食べたよ。

飽食の時代だからって、食べ物粗末にしてないさ。

もし、テレビ番組なら、「このあと、スタッフが美味しく頂きました」と言う、テロップが流れるな。あれって、本当に食べているのだろうか。一度、調べてみたいものだ。

「で、優希ちゃん。本はどこら辺に落としたの？」

食堂を出た俺は、隣に居る優希ちゃんに聞く。

本がどんな本か分かってても、この広い学園全部から探すのは流石に骨が折れるからな。

「それが分からないのです。朝、食堂に朝食を食べに来たときは確かに持っていましたです」

「え？ 持ち歩いてるの？」

「はい。創造力、つまり妄想はいつ生まれるか分からないのです。だから、すぐ描けるように持ち歩いているのです」

「なるほど……」

「でも、寮に帰ってきて、ないことに気付いたんです。食堂に忘れたのかと来たのですが、あったのは恭介さんでした」

今、俺、物扱いされなかった？

うん、きつと、言葉のアヤだよな。

日本人には分からないが、世界的に日本語は難しいみたいだから俺にしたら、英語の方が難しいけどね。

なんで、日本語が世界の共通語にならなかったかなー。そうすれば、英語の授業なんてなかっただろうに！

「で、迷ったんですが、恭介さんは信用できるので話しかけましたです」

「信用されてるんだ」

「はい。期待していますです」

優希ちゃんが俺の前に立って笑顔を向けてくる。

ヤベエ！ 犯罪的可愛さだよ！

この笑顔だけで、ペリカでの生活を送れる自信があるね！

「任せとけ」

俺は指をbにして優希ちゃんに向ける。

「嬉しいです。恭介さんなら必ず見付けてくれると信じてますです」
優希ちゃんの期待が伝わってくる。

「今、廊下なう」

優希ちゃんがネット用語を使いながら、廊下を歩く。

俺なら見付けてくれると信じてくれてるんだろう。

だから、内心は焦っているんだろうが、笑顔でいられるんだと思う。

なら、期待に答えないと。……っつか、優希ちゃんってネット用語を知ってるんだな。まあ、インドア派っぽいしね。

優希ちゃんなら、ニコニコ動画を見ても全く違和感はないな。もちろん、まったくもって存在自体も知らないかもしれないけど。

「……」

俺は優希ちゃんが、どのくらいネット用語を知っているのか、力マをかけてみることにした。

特に深い意味はないが、まあ一種の暇潰しみたいなものだ。

「優希ちゃんってさ、‘ようつべ’とかよく見る？」

‘ようつべ’とは‘YouTube’のローマ字読みだ。

アップルのスペルさえ分からなかった時は、YouTubeのスペルも書けなかったが、ようつべとローマ字読みで読める事を教えてもらって、YouTubeのスペルを書けるようになったものだ。

「優希はあんまり見ないですね」

「そうなんだ……」

通じている……と、捉えていいよな？

よし、次だ！

「優希ちゃんって、アニメ見たりする？俺は結構好きで、原作を持つてる奴がアニメ化したときのwktkは凄いものだぜ！」

「優希も分かりますです。でも、同時に不安にもなりますです。原作のイメージを壊す、所謂、なかったことにされる黒歴史になる可能性もありますから」

分かる分かる。

好きな漫画やラノベが、駄作にされた時のガッカリ感は異常。特に最近は内容のない声優だけで持つてるアニメも多いしね。……アレ？ 結構、優希ちゃんとはマニアックな話が出来るかも？

「優希ちゃんは、某スレとか見る？」

NHKの事だと思ってた、あの時の自分が懐かしい。

あの頃は健全だった。いろんな意味で。

なのに、今はネットと言う名の深い海に沈まされてしまった。

「それも優希はあんまり見ないです。でも、流れるコメと一緒に見ることはありますです」

あー、俺と同じ仲間だな。ニコニコ動画で、コメに笑いながら見るのが好きなんだよなあ。面白いのだけupされているから、一々探さなくてもいいしね。優希ちゃん、ニコニコ動画を見ている事確定！

まあ、別に不思議な事でもないけど。

将棋界の羽生義治も見た事あるみたいだし、福山雅治に至っては、ニコニコ動画が出来た初期から見ているらしいしね。しかも、プレミアム会員。

「へー、じゃあ、ボーカロイドとか結構聞くの？」

「聞きますです。アーティストの楽曲よりいい楽曲も一杯ありますです」

うんうん。

いい曲、一杯あるよなー。

「優希も作りたいとか思ったりしましたです」

「マジで？ 聞かせてよ」

優希ちゃんが作った楽曲。どんな楽曲なんだろう？ めっちゃ、聞きたい。

優希ちゃんのイメージだと、ロックや演歌でもないから、バラードとか……うーん。可愛いから、アイドルの歌とかが、似合いそう。まあ、歌うのはボーカロイドだけだ。

「残念ですが、作ってはないのです」

そうだよな。高いんだよなー、ボーカロイド。諭吉が羽根を生やして飛んでいく。

「俺が初めて聞いたボーカロイドは、悪ノ娘」だったんだけど、優希ちゃんは何だったの？」

そう、あれは偶々だった。

あの頃は規制も甘く、普通にアニメの本編が投稿されていた。

俺は、それぐらいしか見てなかったが、なんの気紛れか偶々、歌ってみたを聞いたんだよな。

それが「悪ノ娘」だった。

あの時は、ボーカロイドなんて知らないから、その人が作ったと思っていたけど、その人の原曲様と言うリンクをクリックしたら、なんとリンちゃんが歌っているじゃありませんか。

まあ、あの時は鏡音リンなんて名前は知らなかったけど。

でも、やっぱり、ボーカロイドにはまるきつかけとなった楽曲は、歌に形はないけれど」だ。

アレに会わなければ、俺はニコニコ動画を今も見えてはいなかったかも知れない。……そう考えると、俺はバラードが好きなんだと気付かされるな。

ロックも好きだけどね。カラオケじゃ、演歌だって歌うし。

「優希が初めて聞いたボーカロイドの楽曲は、みつくみつくにしてあげる」です」

最初から知ってるんだなー、優希ちゃんは。

よく考えれば「やんよ」って時系列的には、この楽曲の方が先に使わさっているんだな。

「結婚してやんよ」ってこの楽曲から思い付いたのかな？……まあ、そんなわけねえか。

「恭介さん。本はどうなっただんですか？」

……。

……。

……。

「もしかして、忘れていたんじゃないですね？」

「……」

「そうなんですか！ 優希はガツカリしましたです」

「違うんだ！」

「何が違うんですかつ！」

正論だった。

「ごめんなさい……」

「急いで探して下さいですっ！ 誰かに見付かったらまた……！」

「また？」

「いえ、何でもないです」

「？」

また……なんだったのだろうか？

「で、この道以外は使ってないんだな」

俺は目の前の廊下を指差し、優希ちゃんに問う。

「はいです。使ってませんです」

「でも、となると、全ての廊下を探したことになる。外も探したし

……女子寮に落ちてたりはしない？」

探してない場所。それはもう、女子寮しか残っていないかった。

「それはないと思いますです。なくしたときに真っ先に探しましたです」

「だとしたら、もう誰かに拾われたんじゃない？」

「そんな……」

薄々はそうかもと思ってはいただろうが、俺の言葉に優希ちゃんが震え出す。

同情するよ。俺も優希ちゃんの立場なら、震えて歩けないかもしれない。

「優希ちゃ

俺が優希ちゃんに声をかけた瞬間だった。

目の前からよく知っている金髪の奴がやって来た。

「よ！ 二人で何してるんだ？」

光輝の言葉に、言葉に詰まる。

光輝なら話しても大丈夫だとは思うが、優希ちゃんに誰にも言わないと言っているんで、俺は本の事は言わない事にした。

「光輝はどうして？」

だから、無難に質問に質問で返した。本当は良くないらしいけど、光輝は気にする様子もなく、質問に答えてくれる。

「まあ……時間潰しかな。待ってるのって、結構苦痛なんだ。歩いていけば、運動にもなるし、時間潰しにもある。まさに、一石二鳥」
「何待ってるの？」

まあ、Amazonからのゲームとか、漫画だろう。

光輝が、ゲームや漫画に興味なるかは知らないけど。

「手紙」

意表を突いた言葉に一瞬、思考が止まる。

「そりゃ、また随分古風だね」

だって、今ならメールと言うものがある。

だから、手紙と言うのは、ぶっちゃけ、お正月くらいしか見ない。しかも、最近はメールで済ましちゃうから、年々減ってきてるし。なので、「手紙」と言う返答な本当に予想外な返答だった。

「まあ、相手が機械音痴でな。携帯さえまともに使えないんだよ」
「どんな年寄りだよ！ いや、年寄りだって使える時代だぞ、今は」
「手紙の方が相手の字が見れるしね。相手にも俺の字が伝わるから、俺は好きだけどね」

へー、そんな事、考えた事もなかったぜ。

「おっと、そろそろだな。じゃあな」

そう言って、光輝は去っていった。

「……」

優希ちゃんは、俺が光輝と話しているうちに、震えは少し収まったようだ。

嫌な汗は滲んでいるのが見えるし、表情も暗いけど。

「大丈夫。この学園にいる奴は自作の本を見てもバカにしねえよ。きつと」

「そうでしょうか……」

「ああ」

「……」

「とりあえず、もう少し探して見ようよ。もしかしたら、誰かが落とし物として違う場所に移動させちゃったかもしれないし」

俺の言葉に優希ちゃんは、ただただ頷くのだった。

「……ないですか」

俺たちは、職員室、警備室に行き、落とし物がないかを聞いた。もちろん、落とし物はあった。が、優希ちゃんの本はなかった。

で、今は屋上に来ている。優希ちゃんが来たいって言ったからだ。優希ちゃんは、暮れ始めた景色を見ている。

言葉では言わないが、誰かが拾った。もちろん、中を見たかは分からないが、そう考えているんだろう。

俺も、さっき優希ちゃんに言ったが、同じ考えだ。こんなに、探していないならきつともう誰かの手に渡っている。

この学園の生徒が優希ちゃん自作の本を見て、どう思つかは分からないが、悪用はされないだろう。

「優希ちゃ」

「」

俺が、優希ちゃんの名前を呼ぼうとした時、屋上の扉が開いて、そこから悠斗が姿を現した事に気付く。

悠斗も俺たちに気付いたようで、俺たちの方へ向かってくる。手

にはキャンバスが握られていた。

優希ちゃんも流石に、景色から悠斗の方へ視線を移す。

「何か描くのか？」

「うん。暮れ始めた空を描こうと思ってね」

そう言つて、悠斗はキャンバスを一旦置いて、脚立でいいのか…

…それは組み立て始める。

キャンバスの上には絵の具とパレット……そして本？

「悠斗、コレ何の本？」

「ああ、それね。廊下に落ちてたんだ。漫画みたいなんだけど……」

え……漫画？ それって……。

「それ……優希の本ですっ！」

優希が本を拾い上げる。

「そうなの？ 手書きみたいだけど、君が描いたの？」

「……」

その言葉はつまり、中を、絵を、見たって事で……。

「見たんですか……」

優希ちゃんが、やっと口にしたのはそんな言葉。

分かっているけど、信じたくない。

否定して欲しい本心から出た言葉。

だが

「うん、見たよ」

悠斗の口から出たのは、期待を真っ向から打ち砕く肯定の言葉。

「……」

そりゃ、俺だつて見ちゃうだろうよ。

だから、悠斗を責めるわけにはいかない。

元々は落とした優希ちゃんが悪いんだから。

「絵、上手いね」

「……え？」

優希ちゃんが、悠斗の言葉にきょとんとしている。

何だ、上手いのか？ なら、そこまで嫌がる必要はないんじゃないかね？

まあ、死ぬ程恥ずかしいのは分かるけどな。

「……あの、……内容……」

優希ちゃんが、途切れ途切れに言葉を発する。
内容がどうかしたのか？

「……ゴメンね。僕には理解は出来なかった」

「……」

難しい内容なのか？

「優希ちゃん？ 見てもいいかな？」

「え……あ……」

優希ちゃんは、俺の言葉に迷っているみたいだったが、最終的には本を見せてくれた。

「ありがとう」

優希ちゃんに礼を言っ、本を開く。

タイトルは、甘い体温。

……うん。内容は性描写こそないけど、二人がイチャイチャしてる話だった。

でもそれだけなら、普通に同人誌とかである本だ。

ただ、そのイチャイチャしている二人が……そう、問題なんだ。

「……」

イチャイチャしている二人は二人とも……男性で。

そう、優希ちゃんが描いた本は、ホモ漫画だった。

「……可笑的ですか？」

優希ちゃんが聞いてきた。

だから、俺は返してやる。

俺の気持ち。

「ぶっちゃけ、俺にはよくわからない」

「……」

「でも、差別なんかはしねえよ」

「え……」

「だって、好きなものは個人の自由だからな。誰にも咎める権利な

んてねえよ。好きなら好き。それで、いいじゃねえか」

「恭介さん……」

「なあ？」

俺は悠斗に話を振る。

「うん。もちろん。僕だって、ゆあゆあをバカにされたら嫌だし、気持ちには分かるよ」

「悠斗さん……」

「好きなものを否定される気持ちは、俺だってよく分かるよ。オタクってだけで批判する人は沢山居るからな。冷たい視線を送ってきたりな」

「恭介さん……！」

優希ちゃんの双眸から雫が溢れた。

「ちょ！止めてくれよ！」

「はい……ありがとうございますです……」

優希ちゃんが頭をペコリと下げる。

「普通のことを言っただけだって」

優希ちゃんは、手で雫を拭いて「……はいですっ！」と、強く笑顔で返事をした。

Chapter 6 オタクと腐女子の本探し（後書き）

馬鹿にされない為に

批判を受けない為に

差別が苦しい為に

自分の世界に殻をつくる

Chapter 7 作詞と作曲（前書き）

僕は止めてという

でもお前は止めない

この程度は 痛くも辛くも

ないだろうと笑いながら

Chapter 7 作詞と作曲

どこか。

コンクリート剥き出しの部屋に三人の姿があった。

二人は高校生くらいの男女で、もう一人は中学生くらいの少女だ。
「お、お願い！ 罰ならもう受けたでしょ！？」

高校生くらいの少女が、片目を手で抑えながら少年に悲願している。

少女は全身ボロボロで、綺麗な黒髪もボサボサで、服も所々破けている。そして、至る所から血が滲んでいる。

一方、少年の服装には乱れ一つない。髪も少女と同じ黒髪だが、こちらは綺麗に整えられている。

「バカが！ その程度で罪が償われたと思っているのか？ それはただの罰だ。そして、罪としてお前の妹は貰う」

少年は冷酷な声で、無慈悲に少女に言う。

「そ、そんな……」「くくつ、所詮世の中は金なんだよ。智力あってもダメ。腕力があってもダメ。最後に勝つのは金力だ」

「……」

「だって、この通り僕は捕まらない。金さえ払えば国は政府は警察は動かないんだよ」

「……」

「だから、お前のやってることは無駄無駄無駄ッ！」

「……ッ」

少年が少女に罵声を浴びせる。

「これに懲りて、二度と変な気は起こすな。お前の力など金の前にはネコにも劣る。血統書付きのネコは高いからねえ」

「分かりました！ 分かりましたから彩奈を連れて行かないで！」
少女が土下座して懇願する。

だが、少年は口を愉悦を感じたように歪ませるだけで聞く耳を持

たない。

「ダメだ。ほら行くぞ！」

少年は、彩奈の腕を掴んで無理矢理連れて行こうとする。

「いやぁ！ おねえちゃん！」

中学生くらいの少女、彩奈はお姉ちゃんに助けを求めようと、ボロボロな少女へと叫ぶ。

「お願いします！ お願いしますっ！」

同じ高校生でも少女では少年に歯向かっていったって勝てる見込みなどない。ボロボロな少女もそれを分かっているから、ひたすら少年に頭を下げ続ける。土下座し続ける。

涙を溜めた瞳が許しを乞うが、無情にも少年の足は止まらず彩奈と共に消えていく。

静寂の中で、少女の泣き声だけがコンクリートの部屋に反響した。

彩奈はお姉ちゃんと同じく黒髪だが、少女と違いショートカットでサイドテールだ。

身長は百四十くらいと小柄である。

彩奈を見たら、百人中百人が可愛いと答えるだろう。そのくらい可愛いのだ。

だが、そんな少女は今、赤色の首輪を付けられ、赤色の手枷と足枷を付けられ、どこかの部屋に拘束されている。

「くくっ彩奈ちゃん可愛いね」

少年が、彩奈の身体を遊ぶかの触りながら、そう囁く。

「た、助けて……」

彩奈は恐怖で声が震えている。

「怖がらなくていいよ。くくっ」

少年はそう言うと、ヒラヒラの付いた可愛い服を破き始めた。

「いやぁ！ やめてええええ！」

「うう……なあ……にやああああ……うう……」

彩奈が涙声混じりに猫の泣き真似をする。
それを聞いて楽しそうに嘲笑う少年。

「はははっそう、お前は俺のペットだ。だから主人の命令は絶対だ。
わかったか？」

少年が彩奈の背中に座りながら言う。

「ほら、返事は？」

「ひつく……にやああああ……」

彩奈の鳴き声が部屋中に響く。

「うつぐ……おえっ……ごふっ……ごふううっ！」

彩奈の口に大量の水が注がれる。しかも、水とともに長い鎖が亜
美の喉に流し込まれていた。

飲み込む度に苦しみが増す彩奈を見て、笑みを絶やさない少年。

彩奈には耐えられない苦痛が、いや、大人でも耐えられないであ
ろう苦痛を中学生の彩奈の体内を犯していく。

「漸く端か……頑張ったな。偉いぞ」

少年はそう言い、彩奈の頭を撫でる。

「うう……」

恐怖で固まってしまう彩奈。だが、それすらも越える苦痛が彩奈
の身体を揺さぶる。

端は呑み込むことのできない程、大きなリングになっていて、少
年は彩奈の口に嵌め込む。

それでも、なお呑み込もうとする整理機能が、彩奈自身を苦しめ
続けるのだった。

やがて……。

「お、出てきた出てきた」

彩奈のアナルから鎖が出てきた。

少年がそれを引っ張ると彩奈は痙攣して白目になり、失神してし

まう。

「おっと、やり過ぎたな……。死んでしまつては困る。俺は嫌がる子に嫌がる事をさせるのが、楽しいのだから」

次の日の朝。

彩奈は激痛で目を覚ます。

口に嵌め込まれた鎖はなくなっていたが、それ以上の激痛が彩奈を襲う。

「……ああ」

「お、起きたね。麻酔したんだけど、それでも痛むのかな？ だとしたら、日本の科学力もまだまだだね」

そう言いながら笑う少年の手には、包丁の姿があった。

何かを切っている。

「……ああ」

そう、彩奈の手足だ。すでに止血をしたのか、切られた断面から血はもう余り出てはいなかった。

「今日はご褒美として、豪勢な食事をあげるね。今まで食べたことないと思うよ」

そう言つて愉悦の笑みを浮かべる少年は、彩奈の中指を彩奈の口に近付ける。

「……！」

血の臭いが鼻につく。

「お残しは許さないからね。ちゃんと全部食べようね」

少年は彩奈の口の中へ中指を入れるが、彩奈はすぐに吐いてしまった。

「くくつ全部食べ終わるまで終わらないからね！」

再び口に中指を近づけるが、彩奈は口を閉ざし開かない。

「開けないと食べれないよ」

わざわざしく少年が言う。

「全く……面倒をかけさせるね」

そう言つと、少年は彩奈にフェイスクスラッチマスクを装着した。

フェイスクスラッチマスクとは口を筒のようなもので永久に開けさせ、さらに蓋をする事もできる代物で、だから排水溝ならぬ排水口とも言われている。

「んんっ」

彩奈はもがくが、装着された排水口を取る手段など、手足のない彩奈にはありはしない。

「はい」

少年は、彩奈の口の中に中指を入れてあげる。

そして、蓋をする。これで、呑み込むまで中指は口の中から消えない。

「んっんんっ」

「よく噛んで食べてね。噛まないで食べるのは身体に悪いからね。くくっ」

口一杯に広がる血の味を身体は拒絶に吐き出そうとするが、それが出来ない。

呑み込む事もできず、肉片の冷たい感触から何度も嘔吐する。が、蓋をされている為、口から出ていかず、余計気持ち悪くなってまた繰り返す。

そんな姿を冷酷な笑みで見続ける少年。

この食事は、彩奈が全て食べるまで続けられた。

この日、彩奈が目覚めるとそこはいつもの場所ではなかった。

その部屋は生活感で溢れていて、もしかしたら夢だったのかもつて思える程だったが、切断された手足はそのままだった。

「……」

「おはよう。彩奈ちゃん」

「……」

「もう、喋らなくていいんだ。動かなくてもいいんだよ。彩奈ちゃんは今から僕の抱き枕だからね」

支度をしていた少年は、彩奈が目覚めた事に気付いて彩奈へそれだけ言っと、「また夜にね」と言って、部屋を出ていってしまう。

彩奈の口は糸みたいなもの縫われていて、口を開けることが出来ない。

唯一良くなつたのは服を着ていた事。彩奈が自分で選んだ破られた服とは違うが、ピンク色の服でフサフサが付いて可愛いらしい服だが、手足がない用に作られていて、しかもピッタリなので彩奈のためだけに作られた服だと分かる。

よく見ると、下半身の一部に穴が空いている。そして、その穴から猫の尻尾が出ていた。

猫耳だけではなく、猫の尻尾までも知らない間に付けられていたのである。

「……」

逃げ出したくても、手足がないため動けず、助けを呼びたくても声が出せない。

もう、死んだ方がマシと舌を嚙もうとするが、嚙めなかった。歯が全部抜かれていた。

「……」

彩奈は抵抗するのを止め、ただ時間が刻まれていく時計をただじっと眺めた。

一筋の光が瞳から流れた事も分からずに。

漸く六時間目の授業も終わろうとしている。

今日は買い物があるから、早く授業が終わってほしい。

だが、そう思えば思うほど、時計の針は、ゆっくりとゆっくりと時を刻んでいく。いつもと変わらないはずなのに、とてもゆっくり

に感じる。人間の時間感覚はホント、テキトーだなーと思う。

「では、最後に今日の復習を……そうだな、拓夢くんに答えてもらうかな」

雅治先生がそう言うと、一人の生徒が席を立つ。

まあ、あいつが拓夢なのだろう。

身長は俺より低くて、悠斗よりは高く見えるので、百六十七くらいだろう。

髪は黒色で、同じ黒色の眼鏡をしている。

でも、俺には関係ねえ！

……なんか、一発屋のギャグみたくなってしまった。だいじょぶだいじょぶ。

みんな、すぐに時が流れ忘れていく。もちろん、俺も。

席を立った生徒、拓夢が朗読を始める。

早く終われー。

「なぜだろう？ なぜ飛び降りたいのだろうか？ だが、死にたくなるほどの理由などストレス社会の現代では多様にある。そして

」

キンコーンカンコーン

やった！

やっとチャイムがなったよ！

「では、ここまでだな」

そう言って、雅治は教室を出ていった。

他の学校なら、掃除とかあるんだろうけど、葉鍵学園にはない。

天才の特権という奴かな？

まあ、そんな事はどうでもいい。

俺は買い物に行くのだ！

鞆に教科書を詰めていると、桜花と優希ちゃんがやってきた。

「恭ちゃん。一緒に帰ろ？」

「あの……。よかつたら、一緒に帰りませんか？」

二人で誘って来るなんて、仲良くなったのかな？

それはいい事だ。いや、俺がやっぱ勘違いしてただけだな。

……可愛い二人からの誘いは非常に嬉しい。喜びすぎて鼻血が出そうなくらいだ。

だが、残念だ……。

「悪い。今日は買いたい物があって、書店に行くから一緒には帰れない」

非常に残念だ！

「そうなんだ……なら一緒に行く」

「えっ？」

桜花と一緒に来ると行つたので驚いてしまった。

「だ、だめですか？」

優希ちゃんも！？

別に大歓迎だけど、わざわざどうして？

あ！ そうか。たまたま書店に買いたい物があるんだな。

「分かった。じゃあ、一緒に行くか」

俺は鞆を持って席を立った。

書店へと俺たちはやってきた。

学園から徒歩十五分くらいの所で、入る前に気付いたが前に光輝に誘われて入った喫茶店……メイド喫茶の真向かいだった。

「目的のものあればいいが……」

俺が周りを見渡す。

「あいつは……」

俺は目の前に拓夢がいることに気付いた。

「あ、今日朗読してた人ですね。何の本を見ているのでしょうか？」

優希ちゃんがそう疑問を呟く。

まあ、確かに同じクラスの奴が何を読んでいるか興味ないと言ったら嘘になるな。

「マンガコーナーみたいだね」

桜花が、上に吊り下げられている看板を見てそう呟く。

「…………ふふ」

「わ、笑ったです！ マンガ見て笑いましたです！ 怖いのです！」

た、確かに…………。

俺も漫画見て、笑っちゃう事があつたりしちゃったりするが、実際笑っている人を見ると怖い。気を付けないと。

「…………タイトルは、…………ハヤテのごとく！」と書いてあるわね」その言葉を聞いて、俺は思い出した。

「あ！ そう言えば、新刊出たんだった。買わないと！ 今回の限定版はイラスト集だしね」

桜花が、なら「持ってきてあげる」と拓夢のもとへ行くこうとする。その漫画を手に入れるために。

だが「待つて。今行ったら、バレる」と、俺は桜花を止める。

「バレたらダメなの？」

桜花がそう聞いてくるのはもつともなのだ、俺は言ってやった。

「何買うか興味ある。尾行しよう」

俺の言葉に無言で頷く二人。

桜花は分からないが、優希ちゃんは楽しんでる感じだ。

「テンションあがってきたー！」

「大声出したら、バレるよ、恭ちゃん」

俺たちは尾行を開始した。

「ここはラノベコーナーね。あそこは、電撃文庫ね」

桜花が看板を見て、そう報告する。

「あつた……」

ターゲットが何か手に取った。

あれは……。

「あれは、俺の妹がこんなに可愛いわけがない、だな」

俺が自慢の視力で二人に報告。

まあ、分からないだろうけど。知らないだろうからね、タイト
ル言われても。

優希ちゃんなら、知っているかもしれないけど。

「あ、列がずれたわ。そこは、ファンタジア文庫ね」

桜花が再び、俺たちに報告する。

「くくっ……」

「また笑ったのですっ！」

優希ちゃんが怖がっている。

まあ、本気で怖がっているわけではなさそうなのでいいだろう。

寧ろ、かなり楽しんでいる感じだしな。

「あれは、生徒会の一存」と、これはゾンビですか？、だな。くう

ー！ 奴とはいい酒が飲めそうだ！」

「未成年でしょ」

桜花が突っ込みをくれたので返しておく。

「例え話だよ」

「あ、移動しますですっ」

「あ、あつた！ ココ気に入った！」

ターゲットが何か喜んでるように見えるが、理由は分からない。

「何があつたんでしょう？ ここは、スニーカー文庫ですが」

「ハルヒじゃない？」

桜花の口からハルヒという言葉が出てきて驚いた。

「知ってるの？」

つい、聞いてしまったね。

「え……べ、勉強したの。……恭ちゃんを知るために」

俺を知るために？ 意味不明だが、二次元に興味を持ってくれる

事が嬉しくてしょうがないぜ！

悠斗に貸した泣きゲーで、悠斗も二次元に填まればいいな……。

「あ！ 何か手に取ったですっ」

優希ちゃんの言葉に、俺は拓夢の手元へと意識を集中させる。

「あれは‘ムシウタ’！ やべえ、奴と踊りてえ！！」

「迷惑になるから、止めなよ、恭ちゃん」

桜花がまた突っ込みをくれたぜ。

「あ、移動しますです」

ん？ ラノベコーナーを出ていったな。

「おお！ 見付けた。これで……ふふっ……はは……」
なっ！ あれはっ！

「ちょ！ 恭ちゃん！」

俺は無意識に駆け出してたね。

だって、仕方ないじゃん！

奴の手に取ったブツは、俺の目的のブツはなのだから！

「それ、買うの？」

俺はターゲット、拓夢にそう聞いた。

「誰？」

まあ、当然の反応だろう。知らない奴からいきなり話しかけられ
たら、誰でもそんな態度になるだろうぜ。

だから俺は、眼鏡をかけてないのにロイドという名の大好きな有
名RPGシリーズの主人公のように、まずは自分から名を名乗るぜ！

「俺は恭介。緑川恭介。お前と同じA組だよ」

どう？ 完璧な自己紹介じゃね？

「そうか。俺は“黒羽拓夢”だ。で、何のようだ？」

「それ、買うのかって話。それは俺が狙っていたブツなんだ」

俺は譲ってくれと拓夢に頼む。

だが……！

「これは俺にとっても、最大の目的だ。最後の一個を渡すことなんてできないね」

くっ……！

た、確かに、俺でも渡さないだろうぜ。

だが、そのブツが欲しい！

白い快樂みたいに、そのブツを俺は求めてるんだ！

「そいつを持つ権利が、お前にあるのか？」

お願いがダメならと、俺は挑発してみた。

「なん……だと……」

「そのブツも、より素晴らしい才能を持っている奴に使われたいと思っっているはずさ。だから、勝負で買った方がそれを手に入れる。

それでどうだ！」

勝負を振ってみた。

「た、確かに……一理ある」

「あるんだ……」

「あるんですかつ！」

後ろで二人がなにか言っていたが無視！

道理など関係ない！

倫理も論理も！

ただ、本能が欲する！

それをツ！！

「で、勝負とは何をするんだ？」

拓夢が聞いてくる。

何にしようか？ うむ……困った。

行き当たりばったりで行動してしまったから、何も考えてねえ！

「やはり、そのブツを使うには創造力だと思う。だから、実践して人気の方の勝ちつてのはどうだ？」

我ながら素晴らしい名案だ！

はぐれ刑事の下でも殉職しない才能を感じるね！

「でも、根本のブツはコレ一つただけだぞ」

あ……！

「あの……いいですか？」

俺がロンドンの探偵クラスのミスをしてしまった時、優希ちゃんが話に入ってきた。

なんだろう？ まさか、また攻め受けの話じゃないよね？

「どうしたの？ 優希ちゃん」

「それなら優希も持っているので、よかったら貸しましょうか？」

え……。

「マジで？」

「はいです」

解決だー！

「ってなわけでそれはやるよ」

「ああ、じゃ、ありがたく使わせてもらっよ」

拓夢が安堵した顔を見せる。

それだけ、拓夢もそれに依存していたのだろう。

「ライバルになるわけだな。……だが、互いに頑張ろうぜ！」

「おう！」

俺たちは熱い握手を交わす。

「絶対完成させてやるよ」

「俺だって」

俺たちは完成を誓う。

「「鏡音を」」

数日後。

俺は拓夢の部屋にお邪魔していた。

理由は、二人でボーカロイドを製作しているため。

あの握手はどうなったーという突っ込みに答えると、俺は作詞が

趣味でよくケータイで作詞してたりするが、逆に作曲はまったくしてなくて、なんとかあるさと思ってた時期が俺にもありました。……が、出来なかった。

逆に、拓夢は作曲は出来るけど作詞が出来なかった。

なので俺たちは力を合わせて、漸く楽曲を完成させたのである。

「よくやくできたな」

拓夢が安堵の表情でいう。

「そうだな。できればPVも付けたかったが……」

「あれじゃあね……」

そう、俺たちはPVも作ろうとした。

だが、絵に互いに覚えがないため光輝に頼んだ。すぐOKしてくれたが、完成したのは画伯のようなある意味芸術的な絵だった。

まあ、そんなのは使えないので、代わりに悠斗に頼んだところ、貴方は神的な絵を描いてくれた。

よくよく考えれば、優希ちゃんの自作の漫画を探している時に、屋上で悠斗は夕日をキャンバスに描こうとしていた。あの後、俺はすぐ自室に戻ったから知らなかったけど、上手かったんだな。知っていたらすぐ頼んだのに。

結局、時間が間に合わず一枚絵になってしまった。残念な事に時間は戻らないからね。

最初から頼んでおけば！

投稿日を伸ばせばいいんだが、今日を逃すとメンテナンスとかで一ヶ月投稿が出来なくなる。

「でも、悠斗だったけ？ ホント絵上手いね。アニメだったら絶対、神作画のタグがつくよ」

そう俺に言う拓夢。俺もそう思う。お世辞とかなしで。あれはもう趣味レベルじゃなく商売レベルに達してるね。

「そうだな。……人気出るかな？」

俺は少し不安だった。

作詞なんて所詮自己満足だと思っていたので、誰にも見せた事が

なかったから。

「大丈夫さ。最高の歌詞と、最高の曲なんだ。ミリオンも夢じゃない」

そう言つて、不安など見せない拓夢。

「……そうだね」

「ああ、それに最初は話題になることが重要だからってネタ曲にしたのも、間違つてなんかいない。自分の頭脳と才能を信じようぜ」

「……だな」

俺は拓夢の言葉に吹っ切れた。

そうだ、そうだよ。俺の歌詞は神歌詞だ。だから、大丈夫！

「じゃあ、投稿するよ」

拓夢がマウスを操作し、ポインターが投稿ボタンに乗っかる。

「……いくよ」

ポチッ

拓夢が左クリックする。

すると数秒読み込んだ後、画面には投稿を受け付けましたの文字が表示された。

「……俺たちならいけるよな」

拓夢が初めて「いけるな」ではなく「いけるよな」と言つて弱音を吐く。

やっぱり、拓夢も不安だったのだろう。

だから俺は言つてやった。

「大丈夫だ、問題ない」

Chapter 7 作詞と作曲（後書き）

脱オタなんてmjsk

ホントならマジDQN

わかってるの？

三次元がいい香具師は

自重だよ自重！

私の心の隙間

真の寂しさは

誰にも埋められない

なんとゆう中二病

これってwww

ヤンデレがノートを拾ったら

名前を書きまくって

新世界の神降臨^{かぁーみいー}

BL（男と男） ktkr

リアルキタ（。°。）！！

届けよ 弾幕のA・RA・SI

作者男性だったのに

ビックリ（ ; ）米の数々

過疎スレ知らず

だけど それもいつかは

オワタ＼（^O^）／

リア充なんか？

こんな楽しい世界
病んでない？

二次元へ逝くパスは
心の中に在る

オタクの批判の傷は
奥に突き刺さり

政府も規制するの？
逝き過ぎた差別化は
これって死亡フラグ

フルーツ（笑）の意味が分からない
2ちゃんですれまくって

ネットかい
電脳界の神（VIPPER）参上
なん…だと…

中目黒 w k t k

リアルキタ（°。°）！！

行きたい 憧れのA・K I・B A
趣味で同人誌書いたらね

（°。°）アヒヤー 金が儲かる
コスプレいいなあ

はげど 似合わなければ
m 9（^ ^）プギヤー

ニコニコは厨房だらけ
ワロスと米って落ちる
ネットかい かぁーみいー
電脳界の神なんです

腐女子で 廃人

s n e g（それなんてエロゲ？）

みんなの ネットのSE・KA・I
池沼が溢れまくったら
タミフル 大量出現
(((; 。 。))) ガクガクブルブル
なにが？ 今北産業
ググレ

大好き ネットのSU・KI・RU
趣味でRPG創ゲームったら
十異世界 回復体質
ボーイズラブ
なんで 受け入れられない
ggrrks

あqwsedrftgyふじこーp

S c e n e 2 出 会 い (前 書 き)

もしも あのと き

僕が居なければ

君が居なければ

齒車は違つ時を刻んでいたね

Scene 2 出会い

空から女の子が降ってきたりすと思うか？

そんな事は有り得ないとか言うアニメやラノベの主人公を見たりしないだろうか？

分かっていると思うが、それはフラグである。

絶対落ちてくる。

最近だと、そうだな……。

‘緋弾のアリア’などがそうであろう。

内容はそうだな……。

‘灼眼のシャナ’のシャナが刀の代わりに銃も持った……。

全然違う？

なら、完璧な回答をしてやろう。

ググレ。

だって、俺はアニメを見て似てるって思ったんだもん。

別にアニメやゲームとかは好きだが、その程度だ。

好きなキャラのスリーサイズとか聞かれて、答えるはずもない。

答えるのはオタクくらいだろうよ。

だから、ラノベとか見た事もない。

で、何故、そんな事を聞くなって？

フラグだからだ。

だが、ここはアニメでもラノベの世界ではない。

勿論、ゲームの世界でもない。

正真正銘、現実の世界だ。

現実で空から女の子が落ちてくる。

それは死を意味する。

だが、安心してほしい。

今現在、少なくとも俺の目の届く所に死体などない。

自分をアニメの主人公かなんかと勘違いして、「俺、空飛べる」なんて言う痛い奴はいない。

だけど、俺の目の前にフェンスを越え立っている女の子が見えた。

「……あ」

と、驚いたように小さく声をあげ、こつちを見た。

もし、飛び降りたなら死は確実だろう。

アニメやゲームのように、三階建ての屋上から飛び降りてきた女の子を手で受け止めるなんて現実では不可能だから。

まあ、今日は部活もないし遅いから今、下に人が居る確率もかなり低いが。

何故、こんな状況になったのか。

単純に言えば、先生から出されていた宿題をやっていなかった。

なので、放課後に補習させられていた。

それだけの話。

で、疲れたので帰る前に屋上でちょっと休憩でもしようと思った。

日も暮れ始めていたので、夕日を見ようと言う、ちょっとした考えもあったが、まあたまたま寄ろうと思ったと言うのが、一番適任だろう。

そして、屋上の扉を開けると女の子がいた。

「……あ」

と、驚いたように小さく声をあげ、こつちを見た。

フェンスを越えた先で。

ちよつと悪ぶつてフェンスを越えただけと言つ事ならそれでいい。

だが、もしも……飛び降りようとしているなら。

有り得るのだ。

今、目の前に居る女の子なら。

女の子は雪がちらつく二月の北海道の寒さなんかさえも、感じてな
いような死んだ目をしている。

「……フェンスを越えると何か違う世界が見えるのか？」

俺は何故そんな質問をしたのだろうか？

自分でも分からない。

ただ、自然と出た第一声だった。

「……楽園が見えるわ」

女の子が俺の質問に答えをくれた。

「楽園？　そこはどんな世界なんだ？」

楽園…… 比喩表現だろうか？

「幸せな世界よ。痛みも苦しみもない。ただ、幸せな世界」

そう言うと、女の子は再び幸せな世界の方を向いてしまった。

恐らくは、いやほぼ百%の確率で、幸せの世界が何所を指しているか見当はつく。

だけど、敢えて聞いてみた。

「そうか……。なら、お前の幸せな世界ってどんな世界なんだ？
涼葉」

女の子、涼葉が驚いたようにこっちを見る。

「……どうして……いえ、そうね。知ってるわよね……この生徒なら……」

そう自分を納得させている涼葉。

まあ、強ち間違いでもないけどさ。

「確かにそうだね。でも俺はお前と同じクラス二年二組の生徒だからな。例えお前が知られてなくても、名前くらいは知ってたさ」

俺はそう言い、涼葉の下へ足を踏み出す。

「……」

涼葉は黙っている。

涼葉。

“ 水橋涼葉”。

この学校の生徒なら知らない者は居ないだろう。

何故ならイジメられているから。

理由はオタクだから。

涼葉も、最初は隠していたみたいだ。

だから、一年生の時も一緒にクラスだけど、一年生の時はクラスメイトと仲良くしていたのを覚えている。

何故バレたのかは知らないけど、最初はオタクを批判され距離をとられるくらいだったらしい。

その後、クラスメイトによる一部の主に女子からのイジメが始まり、徐々にクラス全体に広まり、いつしか学校全体からイジメの対象となっていた。

学校側もイジメがある事は知っていたが、進学校であるため、名を汚れるのを嫌がったのか黙認している。

と、まあ友達から聞いた事だから多少の間違いや語弊はあるだろうが、大体はそんな感じだ。

「……………」

「……」

フェンスを挟んで、俺と涼葉は向かい合っている。

「……止める気？」

涼葉が小さく呟く。

「止めないよ」

「……そう」

涼葉がまた小さく呟く。

「……なんで？」

今度は小さい声で質問してきた。

意外だったのだろう。

いや、もしかしたら否定される事で、踏ん切りを着けるつもりなのだろうか。

俺は答える。

きっと、俺は考えは異質だ。

歪んでいるのかも知れない。

涼葉に踏ん切りを着けさせてしまつかもしれない。

でも、紡ぐこの言葉が俺の嘘偽りのない考えだから。

「幸せな世界に行くのは人生の選択肢の1つだ。だから、俺は止めない」

そう、選択肢。

人生は選択の連続。

ただ、大きいか小さいかの違いしかない。

進学するか就職するかも、朝食をご飯にするかパンにするかだって同じ。

やはり、選択なのだ。

そして、その選択はその人自身が決めた道。

だから、誰にも止める権利ないと俺は思う。

「……そう。分かった」

涼葉は、決意したのか幸せな世界の方を再び見る。

でも分かる。

気持ちはまだ迷っている事が。

だからずっと、ただ幸せな世界を見ていたのだろう。

でも、それを振り切るかのように、足を踏み出す。

「だけど、考える。その選択肢はでかい。本当にその選択でいいのか？」

俺の言葉に、涼葉の浮いた足が再び屋上に留まる。

だが、こっちは見ない。

幸せな世界を見つめている。

「俺に止める権利はない。だって、この辛い世界に生きるのは義務じゃないから」

「……」

「でもやっぱり嫌なんだ！ もう俺の目の前から誰かが居なくなるなんてッ！」

分かってる。

さっきとは言っている事と反対の事だって。

相容れないって。

俺の我儘だって。

でも！

やっぱり、この言葉も俺の本当の気持ちなんだ！

自由、権利だって分かってる。

止める権利などないと分かってる。

だけど！

「……………」

涼葉が黙っている。

綺麗な黒髪を降り積もる雪が白く染める。

「言ってることがメチャクチャなのは分かってる！でも、行つて欲しくないんだ！！」

そして、俺はフェンスを登る。

「……………」

フェンスを登る音に、流石に涼葉もこっちを見る。

だが、俺は涼葉の方へは行かず、フェンスの上で手を伸ばす。

「もし、辛い世界に留まるといふのならこの手を掴め！引き上げてやる！」

「……………」

涼葉がこつちを見上げるがその顔は無表情だ。

ポーカーとか絶対向いてるぜお前。

「不満か？　なら‘辛い’中に一つだけでいいから楽しいことを見付ける！　もしくは認めさせる！」

「……無理だよ……国が、世界が……否定する……」

涼葉は顔を竦める。

まあ、そうだろうな。

差別じゃなくても、オタクをよく思っていない奴は多いからな。

「確かに、難しいと思う。だが、俺が手伝ってやる！」

俺一人が抗ったって無理だって分かる。

俺はいつも、長いものには巻かれて生きてきた。

でも誓う。

偽善ではない！

「……君が？」

涼葉が再びこつちを見てくれた。

「ああ、確かに無理かもしれない。でも、やって見なくちゃ分からない！」

「……」

「そうすれば、ほら、一つ手に入れて、‘幸せ’の世界になった」

「……ふっ面白いわねアンタ」

涼葉が笑う。

アレ？

笑わせるような事、言ったかな？

まあ、いいや。

俺も、釣られて笑ってしまったから。

「……誰かに頼るなんて、考えたこともなかった……」

涼葉が何か呟いたように聞こえたが、俺には何を言っているか分からなかった。

「……俺を信じろ。決して落とさない。だから、掴んだら離すなよ」

俺の言葉の後、涼葉は暫く沈黙し、

「……」

そして、

「……約束、守りなさいよ」

手を伸ばしてきた。

だから俺は、

「もちろん。こんな可愛い子を落とすなんてどうかしてるぜ！」

と言って引つ張りあげた。

「やっぱり、放していいよ」

と涼葉は言うが、放したりはしない。

顔は笑っていたから。

俺は狭間から、涼葉は幸せの世界の入り口から、辛い世界へと舞い戻った。

「……で、何してくれるの？」

と言うので、

「……さあ？ ワカンね」

と言ってやった。

だって、何も考えてなかったもん！

「あゝあ、騙されたわ」

と言って、再び笑う涼葉。

仕方ないじゃん！

あの時は必死だったんだからさ！

いいじゃん！

これから考えるから！

でも、この言葉だけはすぐ浮かんできたんだ。

「……おかえり」

俺は涼葉にそう言ってやった。

すると、涼葉は笑って返してくれた。

「……ただいま」

S c e n e 2 出 会 い (後 書 き)

あっちとこっちの世界で

伸ばした手と手が

二つだった影を

一つに繋げた

Chapter 1 夢語る屋上（前書き）

永遠にこの関係が

ずっと続いて行くと

そう 信じていた

なのに お前は簡単に裏切った

Chapter 1 夢語る屋上

「えゝ二学期が始まります。えゝこれからもいままで以上に精進し

」

どうも、緑川恭介です。

今、俺がどんな状況か、きつと大体の人は分かっていると思うけど、
一様言つとくと、始業式と同じだよ。

はい、終わり。

……早い？

まあ、そりゃ同じ体勢で一時間以上も立たされてたら早く次に行き
たいじゃん。

分かってるさ。

そんな事考えたって、時間が早く進んだりなんかしないってさ。

時間は誰にでも同じ量を刻む事なんて。

「えゝみなさんには三つの袋を大切にしてほしいと思います」

結婚式じゃねえんだからさ！

白髪のおやジ……校長はボケているんじゃない？

っーか、名前は忘れた。

確か、始業式の人に名乗ってた気はするけどな。

覚える気もねえから。

覚えるなんて、勉強と二次元だけで十分だぜ！

「二つ目は……」

そう言えば、なんだっけ？

三つの袋ってヤツ。

昔、テレビで言ってたのを聞いた気がしなくもないが、意識してないものは人間、聞き流してるからな！。

全く覚えてないぜ！

威張る事でもないけど。

エチケツト袋か？

まあ、考えればそんな気もしてきたな。

じゃ、二つ目は何だ。

……ポチ袋？

……。

流石にコレは違うか。

……お年玉袋？

な、訳ないか。

まあ、いいか。

どうせ、今から分かる事だしね。

あー、金欲しいなー。

降ってこないかなー。

「一つ目は……金玉袋」

まさかの下ネタ！

校長下ネタかよ！

「「「……」」」

空気重いよ！

場所考えろよ校長！

ここは偏差値七十七の天才校だぞ！

そんなの分かりきった事じゃねえか！

「え……金玉袋」

もう一度言っただけ！

大事な事だから二回言いましたってか！

「「「……………」」」

余計重くなってるよ！

最早、葬式レベルだよー！！

「え……二つ目は……………」

流した！

だが、それでいい。

さっさと終わるのが一番の得策だろうから。

「金玉袋」

まさかのまた金玉袋！

まさかのまた金玉袋！

俺が二回言っちゃったじゃねえかよ！

「「「……………」」」

最早、空気が苦勞してやつとラスボス倒したのに、フリーズした時の寂寥を感じさせるよ！

校長はもつと生徒に鎧を打とうぜ！

「……………最後は……………」

あ、今回は繰り返さないんだ。

安堵……………。

「……………金玉袋……………最後は……………」

今、ボソツと金玉袋って言ったよね？

いや、絶対言った！

「最後は……………」

もう、金玉袋でもいいから早く終わらせろよ！

「梟」

……………。

まさかのギャグ！

「……………」

もうダメだ！

やっとエロゲーでエッチシーンに行ったのに、狙いすましたかのように母親が部屋に入ってきて逝ってしまった時のようだ。

「フ・ク・ロ・ウ！」

なんか、校長が一字ずつ主張始めた！

気付いてないって思っているのか？

気付いてないのは校長だろ……。

さみーんだよ。

って事はあつたが、漸く教室に戻ってこれて席に着けたぜ！

スゲー、極楽なんですけど！

「夏休みも終わり、今日から二学期だ。気を抜かないで頑張ってくれよな」

担任の智夜がガッツポーズをとる。

……何故だろう？

別に似てる訳ではないが、松岡修造を思い出した。

「あ、そうそう。一週間後に転校生がくるからな。そのつもりで」

この学園に転校生が来るなんて凄いな……。

実はココへの転入は普通の入学より難しい。

毎年、高い倍率を誇り割れなど起こした事のない壁陽学園にとって、新しい生徒は別に要らない。

自分で言うのもなんだが、だってすでに優秀な人材が揃っているのだから。

だから、転入はするには優秀な生徒以上と学園側に思わせなくてはならない。

なので必然と、難しくなってしまうのだ。

拓夢の話だと、卒業する迄に一人でも転校生が来たら、一生の運を使ってしまうらしい。

……って事は使ってしまった。

「しかも二人だ」

なにぃ！

来世での運も使っちゃったぜ。

まあ、生まれ変わりなど信じてないけど。

サンタクロースや、神様なんてものは空想上の人物に過ぎない。

人間が創ったものに過ぎないのだ。

勿論、お化けや幽霊、UFOも信じていない。

あんなものは全て、科学で証明できるのだ。

非科学的なものなど認めないぜ。

魔女とかな。

……何か、社長を思い出したぜ。

久しぶりに、遊戯王でも見るかな。

「さらにヤローどもには朗報だ。二人とも可愛い女子だ」

なん……だと……！

可愛い……女子……。

か・わ・い・い・じ・よ・し！

テンションあがってきたー！

絵文字で表すなら、テンションあがってキタ（。・。・）！！

「ま、ってことだから（21）でも手はだすなよ」

そう言って、智夜先生は教室を出ていった。

今日は授業がないので、まだ午前中だけど放課後だぜ！

やっほう！

「恭ちゃん。どっか行かない？」

桜花が俺のもとにやってきて誘ってくれた。

「いいよ。どこ行く？」

俺は特に用事もないので、桜花の誘いを受ける事とした。

「き、恭ちゃんが行きたい所ならどこでもいいよ」

桜花がそう言って来た。

いつもそうだ。

桜花はいつも誘ってくれるけど、行きたい場所はどこでもいいって言うんだよな。

本当に行きたい場所に行けなくて、楽しくないのかな？

それとも、本当にどこでもいいのかな？

「恭介、聞いてくれよ！」

拓夢が駆け足でやってきた。

なんか、焦っている。

何か、あったのだろうか？

「どうした？」

「前にニコ動に投稿した曲あるだろ」

ああ、あのネタ曲か。

タイトルは‘オタク パラダイス’だったな。

我ながら、素晴らしいネーミングだ。

そう言えば、何か見れなかったんだよな。

恥ずかしいってか、怖いっていうか、そんな言い表せない気持ちになつて、気が付いたら一回も見えていなかった。

「ああ、それがどうした」

「聞いて驚くなよ……」

何だ？

まさか、荒らしが沢山いるとかか？

それは嫌だな……。

「ひ、ひゃ、ひゃく……」

ひゃく……？

百再生突破した？

数ヶ月で百再生は流石に少ない気もしなくもないけど、最初はこんなモンなのかな。

「百万再生突破した！」

「へ……」

ひゃくまん？

……ひゃく……まん。

百万再生っ！

「ま、マジで！？ ドッキリ！ 隠しカメラは？」

「落ち着けて。ドッキリじゃねえよ」

そ、そうだよな……。

芸人じゃねえんだから。

ロンドンブーツとかに嵌められたりする訳ないじゃないか。

「……ガチ？」

「ガチ」

「いっやっほー！」

テンションあがってキタ（。。）！！

無意識に立ち上がって両手を上に突き上げてしまったぜ。

「え……なんか分かんないけど、おめでとう」

桜花は意味が分からないよって感じだったけど、一様俺が喜んでからおめでとうと拍手してくれた。

「やったな……拓夢」

「ああ！でさ、早速だけ二作目を作ろっぜ！」

「もちろん！いますぐ行こう！」

「恭ちゃん……私と遊ぶって……」

あ……。

盛り上がり過ぎて、忘れてしまっていた。

「そうだった……。じゃあさ、明日みんなでカラオケでも行こうぜ？」

俺は桜花にそう提案する。

「カラオケ？」

「ああ。今日は部活で光輝も優希ちゃんも香菜ちゃんも部活だしね」
そう。

光輝はサッカー部に入ったし、香菜ちゃんはやっぱり演劇部に入っ
たし、優希ちゃんはゲーム部なんてそんなのあったの的な部活に入
っちゃったからね。

でも、明日は土曜日だから部活も休みなのだ。

「……うん。じゃあ、明日楽しみにしてるね」

桜花はそう言い切ると、教室を出ていった。

「じゃあ、寮に行くか」

拓夢がそう言ったが、俺は拒否する。

「いや、まず明日カラオケに行く事を忘れないうちに伝えておこう
と思う」

「メールでいいんじゃない？」

拓夢がそう提案してきた。

まあ、そうなのだが、残念な事に俺の情報網は少ないのだ。

「そうしたいのは山々なんだが、実は香菜ちゃんのメアドは知らな

いんだよね」

「あ……確かに俺も知らないな。なら、先に寮に行ってくるから会ってついでにメアドも交換してけよ」

「……してくれたらね。なんか、あんまりよく思われてない気がするし」

「最初がいきなりエロゲーの声優でしよって言ったんだってね」

忘れたい記憶を掘り下げてきやがって……。

「やめてくれよ。俺の黒歴史の話は」

「ふ……じゃ、お先に」

そう言って、拓夢も教室を出ていったので、俺も鞆を持って教室を出た。

「送信……と」

俺は明日カラオケに行こうと友達にメールを送る。

「あとは……」

目の前の部屋の扉のプレートには演劇部の文字が書いてある。

……前来た時と何も変わらない。

だが、今回はミスはしない。

好感度UPだぜ！

「失礼しまーす」

俺はスライドドアの扉を開けた。

「……夢の中、君には届かない。その外で手を繋いで……」

中に入ると、香菜ちゃんしか居なかった。

他の部員はどうしたんだろうか？

「香菜ちゃん一人なの？」

まあ、どうしたのかは香菜ちゃんに聞けば分かる事なので、聞いて見る事にした。

「……」

あれ？

明らかに機嫌悪い？

「……どうしてアンタがここにいるのよ。鍵かけたはずなんだけど」

「いや、開いてたから」

「え……」

鍵かけるの忘れたようだな。

でも、そのお陰で入れたからよしとするか。

「……今日は休みなの。だから、誰もいないわ」

だから、誰も居なかったのか。

納得。

「一人で練習とか偉いね」

「オーデিশョンの練習よ」

「へー、何のアニメ？」

「……違う。ゲーム」

「そっか。何のゲーム？」

「……アレよ」

「アレ？」

「……エロゲー」

あー、そう言えば香菜ちゃんはエロゲーに出てたんだよな。

あの屋上での出来事のせいで封印してたぜ。

「そうか、邪魔して悪かったな」

きつと、不機嫌なものもそのせいだろう。

だから、謝る事にした。

「別に……いいわよ。で、何かよう？」

香菜ちゃんがジト目で聞いてくる。

なので、俺も本来の目的を果たすでしょう。

「ちょっと喘ぎ声をおかずにと」

「死ね」

香菜ちゃんのローキックがモロに腹にキタ（。・。）！！

いや、絵文字でごまかしているが、本当に痛いぜ。

「ありがとうございます！」

「なんでアタシ、お礼言われてるの？」

「ローキックくれて」

「……」

香菜ちゃんが変質者見る目で見てくので、慌てて冗談だと言う。

「じよ、冗談だつて」

「分からないわ。このロリコン野郎！」

ちよ！？

ロリコンじゃねえよ！

そりゃ、美人よりはかわいい系。

熟女よりはロリの方がいいけど！

「安心しろ。俺のストライクは十二歳から十六歳の間だ」

「十分ロリコンじゃん」

「いや、待て。よく考えろ」

俺は片手を香菜ちゃんの方に付きだし、待てのポーズ。

「俺はまだ高校一年生だ」

「だから？」

「全然健全！」

グハッ！

今度はパンチが腹に飛んできたよ！

俺はMじゃないから喜ばないって！

「で、マジの話すると明日カラオケ行こうぜ」

「……………何する気？」

何で疑うんだよ！

「普通に歌うだけだって！ みんなにはメール出したんだけど、香菜ちゃんのは知らなくてさ」

「それでわざわざ？」

「おかしい？」

「うん！ だってもうすぐ昼食よ？ その時でもいいのでは？」

「あ……………」

忘れてた……………。

もうすぐ昼飯だった。

つまり、食堂でわざわざ来なくても会えたんだ。

「でも……………ありがとう」

「え……………」

「ありがとって言ったの！ 何回も言わせないでよねっ！」

「え、あ、はい」

「……出しなさいよ？」

「何を？」

「携帯よ！ 番号送るから」

「あ、うん！」

俺は携帯をポケットから出して、香菜ちゃんと赤外線通信でデータを共有する。

「ぐへへ」

「なんか、いきなり交換したことを後悔したわ」

そう言つて、香菜ちゃんは溜息を吐いた。

「サンキュー」

「別に。……変なメール送ったら、サツにつき出してやるんだからねっ！」

「はい」

香菜ちゃんと別れ、現在廊下である。

だが、寮に向かっている訳ではない。

屋上にだ。

実は、送った相手からOKのメールが来たが、優希ちゃんからだけ返信が来ない。

電話も考えたが、何か用事で返せないのなら迷惑になるので、でももしかしたらまた屋上に居るかもしれないから、ならちよつと屋上に居ないかよつて行こうと思ったからである。

え？

部活に居るんじゃないかって？

実は香菜ちゃんから聞いたんだが、スポーツ系以外の部活は今日ないらしい。

だから、ゲーム部も当然ない。

「……」

メールの受信一覧を開く。

十一時三十三分、『りょーかい』の文字の光輝。

部活だろうに一番とは恐れ入ったぜ！

十一時三十七分、『悠斗、行きます！』の文字の悠斗。

お前はガンダムかって言いたくなつたぜ！

だが、それより先に新しい受信メールはない。

つまり、優希ちゃんからはまだ着ていないのだ。

なので、屋上に着いた俺だつたが……。

結論から言えば、優希ちゃんは居た。

だが、返信出来ない理由も分かった。

なんと、優希ちゃんは寝ていたから。

「ん……」

優希ちゃんが目を擦る。

「あ、起こしちゃった？」

「アレ？ 恭介さん？ どうしたんですか？」

優希ちゃんは立ち上がり、手でパツパツと制服に付いた埃を取る。

「いや、メールしたんだけど返信がないからさ。もしかしたら、屋上に居るかもって思ってたんだ」

「そうだったんですか。すいません。優希、寝てましたです」

「別にいいよ。それより明日、カラオケに行かない？」

優希ちゃんが申し訳なさそうに謝るので俺は別に言いと言付けて、優希ちゃんをカラオケに誘う。

「カラオケですか？ 楽しそうですね。是非、お願いしますです」

そう言って、優希ちゃんはぺこつと頭を下げた。

「いいっていいって。……屋上、好きなの？」

「……好きですよ。……でも、嫌いな場所です」

ん？

好きなのに嫌い？

意味わからんぞ。

「すみません。意味わかりませんよね」

優希ちゃんが俺の心を察したのように、そう言ってきた。

「まあ、ぶつちやけわかんね」

「はは、そうですね。……優希にはお姉ちゃんが居たのです」

「へー。俺には兄も姉も居なかったからわからないけど、やっぱり上が居るっていいものなんでしょ？」

「はい……です。でも、ちょっと前からお姉ちゃんがいきなり話すらしてくれなくなって……」

優希ちゃんが少し俯いて話しを続ける。

「優希は何かお姉ちゃんの気に障る事でもしたのでしょっか。……だから話したいのです……。でも、勇気が出なくて……」

優希ちゃんが少し俯いて話してくれた。

「そうか……。もし、俺に出来ることがあれば何でも言ってくれよ。俺のできることなんてたかが知れているけど、出来る限りのことはするから」

「ありがとうございます……」

優希ちゃんは自分の事を話してくれた。

また、一つ優希ちゃんと仲良くなれた気がした。

だからこそ、優希ちゃんの力になってあげたい。

そんな気が……。いや、そんな気持ち確かにした。

Chapter 1 夢語る屋上（後書き）

声に出せたなら

何か変わるのかな？

だけど 言えないよ

だって僕は孤独だから

Chapter 2 カラオケパニック（前書き）

一度触れたなら

簡単に触れられる

だけど その最初が

触れられない

Chapter 2 カラオケパニック

土曜日。

勿論、授業はない。

ゆとり教育万歳＼（＾＾）／

つてな訳で昨日約束した通り、俺たちはカラオケに行く事になっている。

学園に近いカラオケ店まねきねこで九時から十八時までの間、歌いまくるつもりだ。

まあ、人数が多いから思った程歌えないと思うが。

因みに、この学園にもカラオケルームが存在し生徒なら無料で使用できるが、二部屋しかなく休日は俺たちのように歌いたい生徒が出てくる為、使う場合には申請が必要なのだ。

で、今回は残念ながら先に申請した生徒が居た為、使用は出来ない。

やはり、無料はでかいよな……。

コンコン

「恭ちゃん。起きてる？」

扉の向こうから桜花の声がする。

迎えに来てくれたのか、それは嬉しい限りだ。

「ああ、起きてるよ」

俺は桜花に返事をする。

ずっと、扉の前で立たさせる訳にも行かないからな。

曲がりなりにもここは男子寮なのだから。

……まあ、桜花が迎えに来てくれるのが日課となった今では、管理人にも許可を貰い、他の男子生徒も羨ましいとか言ってくるが、いつの間にか公認になっていたしな。

そのせいで、付き合ってるなんて噂も流れるし。

ただの幼馴染みだけなのに。

桜花も、根も葉もない噂で俺なんかと付き合ってるなんて思われたくないだろうしな。

「入ってもいい？」

だからこの言葉の答えは勿論、

「いいよ」

である。

「失礼しまーす」

桜花が扉を開けて、俺の部屋に入ってくる。

まあ、来年には違う人の部屋になってるけどね。

当たり前だが今日は授業はないので桜花は私服だ。

勿論、俺も私服だ。

俺は黒を基調とした髑髏の絵の服だ。

我ながら気に入っている。

自分で言うのもなんだが、俺はセンスがいい。

一家に俺一人の時代がくるね。

「おはよう、恭ちゃん」

満面のスマイルで挨拶してくれる桜花に、

「ああ、おはよう」

と返す。

「恭ちゃん、朝ごはん食べに行こ？」

桜花がいつもと変わらない言葉を紡ぐ。

だから、俺の返事もいつもと変わらない。

「おk」

現在七時二十三分。

休日の為、平日に比べると生徒は疎らでいつもなら満席なのに、今日は半数以上の席が空いている。

ゆっくり食べにくる人も居れば、外食に行く奴も居るからである。

まあ、学食は無料なので、わざわざ、外食をする人は少ない。

殆どはゆっくり九時十時に食べに来る。

俺も普段はその中の一人だ。

「恭ちゃんは何食べる？」

「そうだな……どうせカラオケ店でポテトとか頼むから軽くでいいかな」

「なら、私もそうしようかな」

「別に真似しなくてもいいぞ」

俺はそう言ったが、結局二人でタマゴサンドを食べる事となった。

「ふふ」

タマゴサンドを半分食べ終わった頃、突然桜花が笑い出したので驚いた。

「い、いきなりどうした？」

「べ、別になんでもないよ。ただ……」

「ただ……」

ただ……なんだろう？

「恭ちゃんと一緒に居れるのが嬉しくて」

なんだ、そんな事が。

別にたいした事じゃ、ないだろうに。

「今日も個室で……二人きりならもつといいのに……」

声が小さくて、何を言ったのか聞こえなかったけど、赤面して下を向いてしまった。

どうしたんだろう？

桜花って、よく赤面するよな。

赤面症なのかな？

「あ……恭介」

「ん」

俺の名を呼ぶ声の方へ顔を向けると、そこには香菜ちゃんが居た。

「香菜ちゃんも朝飯？」

「うん。そうだけど」

アレ？

朝からいきなり不機嫌？

「何か嫌な事でもあった？」

「そんなことないわ。ただ……」

また「ただ……」かい！

流行ってんの？

「今日急にオーディションが入ったから、行くのは午後からになるわ」

「マジか」

オーディションか。

香菜ちゃんは声優だからな。

まあ、一般的には余り知られていないみたいだけど。

「そうか、頑張れよ」

「も、もちろんよ。必ずエロゲーに出てやるんだから」

自分でエロゲーって言ってるじゃん。

桜花には聞こえてなかったみたいだけど。

そう言えば、昨日練習してたもんな。

でも、急につて言ってるから、オーディションはホントは今日じゃなかったのかな。

「受かるといいな」

「ええ。そう言っわけだから、じゃ」

そう言つて、香菜ちゃんは焼きおにぎりを食べながら食堂を出ていった。

九時丁度。

俺たちはカラオケ店に来ていた。

カラオケ……そう言えば久し振りだ。

最後に来たのはあの時か……。

「き、ききき今日は呼んでくれてありがとうございます」

優希ちゃんは俺に礼を言ってきた。

「別にいいって。友達なんだから」

「友達……はいです」

優希ちゃんに笑顔が浮かぶ。

「優希ちゃんは、カラオケとかはよく来るの？」

「は、はい。よくヒトカラしてますです」

ヒトカラ……一人カラオケか。

最近、流行ってるよな。

いや、単に友達がない奴が増えてるのか？

そう言えば、ヒトカラってJOY SOUNDを出してる会社、エクスINGの登録商標らしいな。

ふふ、豆知識

まあ、見せびらかしたりしないけどね。

……見せるんじゃないねえな、聞かせる方だな。

「知ってるか、ヒトカラってエクシングの登録商標なんだぜ」

と思ったら、光輝が言いやがった。

知ってたのか！

「ふん、その程度、知っている」

拓夢、お前も知っていたのか！

「あ、僕も知ってたよ」

悠斗もかよ！

ふー、言わなくてよかったぜ。

恥、かく所だった。

「……」

光輝、ざまあw

「恭ちゃん。そろそろ入ろうよ」

「そうだな」

桜花の言葉で俺たちはカラオケ店へと入る。

フロントに着くと、店員がテンプレの台詞を紡ぐ。

「いらつしゃいませ。会員証お持ちですか？」

「はい」

俺は財布からまねきねこの会員証を取りだし、店員に渡す。

油性のペンの太い方で書いてしまつて、潰れてしまつてるけど。

「はい、お預かりします。六名様でよろしいですか？」

俺、拓夢、光輝、悠斗、桜花、優希ちゃん。

確かに六人だな。

だが、俺は訂正する。

「いえ、午後からにもう一人来ます」

勿論、香菜ちゃんの事である。

「そうなんですか？」

優希ちゃんが俺に聞いてきた。

そう言えば、優希ちゃんが居る時は香菜ちゃんと遊んだ事はなかったな。

基本、香菜ちゃんは部活で全然遊んでなかったし。

……そうになると、桜花も今日、香菜ちゃんを知ったのか。

同じクラスだから会ってない事はないか。

まあ、俺の知らない所で仲良いかも知れないが。

「畏まりました。ご来店時にフロントへ電話をして頂きますようお願いします」

「はい」

「今回はどのコースで」

「フリータイムで」

「畏まりました。混雑した時は四時間でのご退出頂く事も御座います
が、よろしいでしょうか？」

「はい」

「ありがとうございます。今回、機種はどれにしますでしょうか？」

機種か……。

そう言えば決めてなかったな。

「何がいい？」

やっぱり、勝手に決めるのはよくないので、みんなの意見を聞く事に
した。

「私は恭ちゃんが選んだのならどれでもいいよ」

桜花……それが一番困るんだが。

「CROSSOがいいですっ」

「うおっ」

いつも静かな優希ちゃんがいきなり大きな声で言ってきたのでビックリしたね。

「す、すいません……」

いや、別に驚いただけだから謝らなくてもいいのに。

まあ、それが優希ちゃんっぽいけどね。

「みんなはそれでいい？」

俺は、拓夢と光輝と悠斗に聞く。

「ああ」

「いいぜ」

「いいよ」

と、三人とも反対しなかったので、それにせっかく優希ちゃんが意見してくれたのでCROSSOにする事にした。

「CROSSOで」

「はい。畏まりました。では案内致します」

俺たちは店員に連れられ、奥へと進んでいく。

そして、一つの部屋の前で止まった。

「百二十三号室になります」

案内された席は八人用の部屋で六人では広く感じる。

「では、何かありましたら電話下さい」

店員はそう言って、去っていく。

さて、歌いまくるぞ！

「え、えと」

優希ちゃんが、デモスクを弄り、設定していく。

あ、JOYはデモスクではなくてキョクナビだったな。

「主旋律……ミュージック……エコーは下げて……」

優希ちゃんは、まだ設定を弄っている。

……と思ったら、ピンクの可愛い携帯電話を取り出し、かざして口グインだっけ？

ログインしていた。

気が付けば、テレビ画面には全国採点の文字が右上に表示されている。

「優希ちゃん、最初歌っていいよ」

俺は優希ちゃんにそう言った。

「いいんですか？」

「もちろん」

まあ、そりゃあ、キョクナビを手にとって放さないんだもん。

「では……」

優希ちゃんは自分のマイルームに入っているマイうたから曲を一つ選択して送信ボタンを押し、俺の隣に座っていた優希ちゃんがマイクを持って立ち上がる。

当たり前だが、今日はみんな制服ではなく私服だ。

優希ちゃんは控えめな白いチェックのワンピースに、花飾りを髪の片方に着けている。

優希ちゃんらしい、清楚で可愛いらしい衣装だ。

もし優希ちゃんが二次元のキャラクターだったなら、可愛い妹キャ

ラかな？

見た目的には、‘生徒会の一存’の‘椎名真冬’みたいな感じかな。

まあ、ちよつと違うけど、大体そんな感じだな。

よく考えたら、性格も似てるかも。

……優希ちゃん、BL好きだからな……。

ぶつちゃけ、オタク パラダイスは優希ちゃんがモデルなんだよね。

BL……ずっとビューティフルライフだと思ってたのに騙されたよ。

……アレ、誰に騙されたんだっけ？

まあ、いいか。

過去より今だね。

「き、緊張しますです……」

俺は頑張れと優希ちゃんに言おうと思ったけど、テレビ画面に表示されたタイトルに吹いてしまった。

だって、‘カレーの歌’って書いてあったんだもん！

「恭ちゃんは何歌うの？」

もう片方から、桜花が俺にくつついてくる。

桜花は茶色を基調とした服だ。

だが、決して茶色だからって婆臭いと言うことはなく、所々に可愛らしいアクセントがあり、見事に着こなしている。

生半可な奴が着たら、この服に喰われてしまうだろうね。

桜花も二次元のキャラクターに居たって不思議ではないくらいに可愛い。

桜花も二次元のキャラクターで表すなら、同じ名前に桜が入ってる繋がりです。‘Fate/stay night’に登場する‘間桐桜’だな。

桜花……。

よく、俺の好みが分かってるな。

このこの

まあ、声優で言えば、俺はゆかりんLOVEですが。

世界一かわいいよ

「そうだな……」

俺は桜花の言葉に返事をしながら、キョクナビを弄り、曲を検索する。

……俺も今度、登録してみっかなー。

「ま、泣きゲーのOPでも歌うかな」

俺はそう桜花に言っつて、曲を送信する。

そして、キョクナビを桜花に渡す。

「ほい、桜花」

「ありがとう」

桜花はキョクナビを受け取り、曲を検索している。

その時、優希ちゃんの曲が終わり、採点画面が表示される。

九十三・四九九点と表示されている。

……高いなー。

「凄いな、優希ちゃん」

素直に思った事を俺は優希ちゃんに言った。

「あ、ありがとうございますっ」

優希ちゃんは喜んでくれている。

俺の言葉なんかで、喜んでくれるなんて、俺も嬉しいぜ。

「凄いね」

「上手いよ」

「さすがー」

拓夢たちも賞賛を優希ちゃんに送っている。

「ありがとうございます……」

と、頭を下げて優希ちゃんは席に座る。

「次は俺だな……」

俺は優希ちゃんからマイクを受け取り立った。

丁度、採点画面が終わり、次の曲が始まる。

……優希ちゃんのHNはユキか……覚えておこう。

「恭ちゃん、頑張つて！」

「おう！」

桜花からの応援に答え、俺は熱唱したね！

歌詞は何か著作権とかで書けないけど、まあ分かるよね？

あの泣きゲーだよ。

「　　るよー」

後奏カットによって後奏はバツサリと切られ、曲が終了する。

「恭ちゃん、凄いよ！」

「凄い上手かったですっ」

「まあ、なかなかだな」

と、賞賛の言葉が降ってくる。

あー、嬉しいぜ！

「おー！」

光輝が画面を見て、驚いている。

どうか、したか？

「……」

うん。

画面に書いてあるね。

……、採点できませんでした、って。

どうして？

イジメ？

誰かの陰謀？

「恭ちゃん、マイク」

桜花の言葉で俺は漸く理解する。

「あ……」

あ……そうだよ。

ONになつてなかったんだよ！

OFFのまま歌ってたんだよ！

「ふっ……まあ、点数は心の中に表示されてるぞ」

「何言ってるの？」

……悠斗に突っ込まれちゃった！

まあ、いいさ。

「桜花、マイク」

俺は桜花にマイクを渡す。

「恭ちゃん、私頑張るよ」

と言って、桜花は勢いよく立ち上がる。

逆に俺は座る。

「ん」

その時、メールが着ている事に気づいた俺はメールを開く。

予想通り、それ香菜からだった。

『一時くらいにはそっちにいけると思うわ』

今は、まだ九時半くらいなのでまだまだだな。

俺は、りょーかいと返信して携帯を閉じる。

一方、桜花はジャニーズの歌を歌っている。

桜花は、小学生の時もジャニーズとか好きだったから、変わんなんだな。

そう思うと、なんか桜花がより一層近くに居る感じがした。

あれから、何周かして、優希ちゃんはボカロを歌い、俺はアニソンを歌って、桜花はジャニーズ、拓夢はバンドや昔の曲、光輝は最新の曲、悠斗はアイドルを歌を歌い続けた。

気が付けば、時刻はもうすぐ一時になろうとしている。

「あ、もうすぐだな」

「ん？ もうすぐくるのか？」

拓夢がポテトを食べながら聞いてくるので、

「ああ、一時くらいって言ってたからな」

と答える。

その時、噂をすればなんとやらで、扉が開く。

「待たせたわね」

香菜ちゃんが入ってきた。

「ああ、待ったよ」

「な……仕方ないでしょ！」

「怒らないでよ」

まあ、そういう返しが来るって分かって言っただけだね。

「……」

隣を見ると、優希ちゃんが香菜ちゃんを見て、震えている。

「優希ちゃん？」

俺の言葉に優希ちゃんは答えず、小さく無意識に口から声が出たように呟いた。

「……おねえちゃん」

Chapter 2 カラオケパニック（後書き）

声に出せば簡単だけど

負のスパイラルが廻り

決して前へ進めない

道はあるのに

Chapter 3 姉妹（前書き）

それは きっと

素晴らしいものだ

僕も愛された

壊されるほどに

Chapter 3 姉妹

……。

……おねえちゃん？

「……」

香菜ちゃんが、優希ちゃんのおねえちゃん？

……え、そんなはずはない。

だって、優希ちゃんにクラスに居る声優を聞いた時、優希ちゃんは知らなかった。

いや、流石にエロゲーに出ている事は隠していた？

……でも、ギクシャクした関係なら知らなくても無理ないか……。

……結局、昨日のカラオケは香菜ちゃんが来た後、気まづくなり、一時間程で解散となってしまった。

「……」

はあ。

まさか、香菜ちゃんが優希ちゃんの姉だったなんてな。

優希ちゃんに屋上で話を聞いてなかったら、全く意味わからないま

ま、ギクシャクしたまま、カラオケが続いていたと思うと怖いね。

拓夢たちにはどうして優希ちゃんと香菜ちゃんがギクシャクしているのか知らない訳だしな。

そう考えると、知っているのは俺だけか……。

いや、悠斗と桜花以外は俺の前では香菜ちゃんと会ってもいないのか。

「……」

『兄貴、何してるの？ 早くしなさいよねっ』

画面上では、ツンデレ妹が喋っている。

『お……お兄ちゃん……急いで……』

もう一人の妹も喋っている。

性格は違うが、声は似ている。

まあ、そりゃそうだ。

この姉妹の声優、つまり中の人は同じ人物なのだから。

……画面上の姉妹は仲良しだ。

だが、優希ちゃんと香菜ちゃんは……。

『ほら、兄貴！ 涼だつて待つてゐるんだから！』

『お姉ちゃん……靴ひもほどけてるよ』

『えっ！？』

目の前の姉妹は仲良さそうに、主人公が来るのを玄関で待つてゐる。

……優希ちゃんと香菜ちゃんだつて昔はこんな風に仲良かったはずなんだ。

そう、優希ちゃんが言つてたんだから。

どうして……？

ういーん……ひとりでもゆくよ

その時、俺の携帯電話が震えだし、電話が着た事を告げた。

「……拓夢か」

ディスプレイには黒羽拓夢と表記されている。

俺は携帯電話を開き、ボタンを押して耳に当てる。

「どうした？」

『ニコ動にアップする楽曲が完成した』

ああ、そう言えば作つたね。

そのせいで、桜花と遊べなくなりカラオケに……。

「……そうか。それは良かった」

『うん。後は悠斗に頼んだPVの絵が完成するのを待つただけだ』

「そうか」

『……話したい。俺の部屋まで来てくれないか？』

話すなら、今言えば電話しているのだから話せばいいのにと思ったが、俺はすぐ拓夢の話したい事が分かった。

「分かった」

だから俺はそう言って電話を切り部屋を出た。

勿論、エロゲーの電源も消して。

……あ！

セーブしてねえ！

……まあ、自動でクイックセーブされているから、良しとしよう。

もう一度、ツンデレ妹の靴ひもがほどけるだけだからな。

グッジョブ！

クイックセーブ！

数分後。

俺は拓夢の部屋へとやって来た。

まあ、数分後と言っても、距離的には何部屋か越えて隣って訳だから走れば早い奴なら十秒程度で着くかもしれないな。

「お前、優希と香菜ちゃんのこと、何か知ってるだろう？」

正解だ。

まあ、拓夢たちが訳が分からないよ的な事になっているのに、俺は優希ちゃんと一緒に驚いてしまったしな。

正確には、香菜ちゃんが優希ちゃんのお姉ちゃんだった事に。

よく考えたら、優希ちゃんの名字、知らなかった。

まさか“竹達優希”だったとはな。

「ああ、詳しくは知らないけどな」

こんな事を聞くのは、拓夢だって心配しているのだと思う。

香菜ちゃんが入ってくるなり優希ちゃんの元気はなくなったし。

二人は歌わない、ただ席に座っていただけ。

顔を合わせたくないのか、二人とも下を向いて。

……同じクラスなのに全く気付きも出来なかった。

結局、気まずい空気に押し潰れそうになった俺は解散を宣言し、みんな了解して扉を開けた。

何が、出来る限りのことはするよ、だ！

俺は逃げただけじゃないか！

空気に耐えかねて！

屋上で言った言葉は、これじゃただの偽善じゃないかっ！

「恭介。昨日の解散は、間違いじゃないと思う」

俺は驚いた。

まるで、俺の心が見えているような事を言ったからだ。

「あの場面は離れて正解だったと思う。もちろん、俺の解釈だけだね」

……。

「……お前は、俺の心が読めるのか？」

自分でも馬鹿な質問だと思う。

だが、勝手に俺の口は開いていた。

「そんなの無理だよ。……でもそうだね、分かったらいいよね。相手の嘘だって簡単に見破れるんだから」

相手の心が読める……。

「俺は読めない方がいいかな」

「どうして？ 分かったら楽じゃない？」

拓夢が聞いてくる。

どうして？

そんなの決まっている。

「辛いからさ」

「辛い？」

ああ、そうさ。

「例え、表面だけだって分かっているけど、心が分からなければもしかしたらっていう希望が見える」

そう、そうすれば騙していられる。

心の中で嘲笑われていても。

「希望……ねえ」

拓夢は呟くように言葉を紡いだ。

それは肯定したのか、否定したのか、心が読めない俺には分からない。
い。

ただ、その表情を信じるならば、肯定も否定もしてないって感じだ。

「優希と香菜がね……姉妹とはな」

俺は拓夢に俺が知っている事を全て話した。

煙草の事だけは、隠しておいたけどな。

「ああ、俺も昨日驚いたよ。いきなり優希ちゃんが香菜ちゃんを見ておねえちゃんって言い出すからさ」

「……で、お前はどつするんだ？」

「どつするって？」

「優希と香菜のことだよ」

……。

出来る限りのことは協力したい。

この言葉は嘘ではなかった。

本心だったはずだ。

でもっ！

ぶっちゃけ、軽い気持ちで言った事も事実だ。

深くも考えないで。

「……何とかしてあげたい」

そう。

何とかしてあげたい。

「でも……」

「でも、何だよ？」

「軽い気持ちだった。深くも考えないで」

そう。

深くも考えないで。

「ただ、困ってるなら何とかしてあげたい。ただそんな軽い気持ちだったんだ」

「……何が悪いんだ？」

「え？」

「困ってるから助けてやりたい。手を差し伸べてやりたい。立派な理由じゃないか」

……立派。

立派なのか？

「立派？」

「ああ、立派さ。困ってる奴を助けるのに理由なんて要らない。そうだろ？」

困ってる奴を助けるのに理由なんて要らない。

……理由なんて要らない。

理由なんて関係ない。

そうだ！

俺はただ、困ってる優希ちゃんを助けたい。

あの時、俺はその気持ちだけだった。

それは、軽い気持ちだと思っていた。

でも、立派な理由だったんだ！

だって、困ってる優希ちゃんを助けるのに、理由なんて要らないんだから！

ただ、笑ってほしい。

それだけだ！

「ありがとう拓夢。お陰で分かったよ」

「そうか」

「ああ、俺は優希ちゃんを助けたい。だって悲しんでいる優希ちゃんなんて見たくないから。優希ちゃんには笑って欲しいから！」

理由……。

理由なんて要らないけど、敢えて言うなら、そう、俺は優希ちゃんに泣いて欲しくない。

笑って欲しいんだ！

「なら、行けよ」

「うん！一緒に……」

きつと、俺一人じゃ踏み出せなかった。

俺一人が動いたって何も変わらないと。

でも、そんなのやってみなくちゃ分からない！

そう、教えてくれた拓夢と一緒になら……！

「俺は行けない」

え……！？

「どうして？」

「優希が、待っているのはお前だからだ。だから一人で行け」

「俺を待つてる？」

「そうだ。自分のことを語る。それは一人じゃ抱えきれないからだ。だから、持って欲しいんだよ」

……。

「特に、何でも自分一人で溜め込みそうな優希が、だ」

……。

「誰でも良かったわけじゃない。お前だからだ」

……。

「分かったら、さっさと行け」

……。

「ああ」

俺は拓夢の部屋を飛び出した。

拓夢に「ありがとう」と走りながら伝えて。

勢いよく出たのはよかったが、流石に女子寮に入って行く訳にはいかない。

桜花が特別なだけであって、本来は禁止なのだ。

破ったら、最悪退学になる事もある。

……そう考えると、桜花は本当に特別なんだと考えさせられる。

寮の管理人曰く、「心を射たれた」と言っていたが、毎日の熱心さが伝わったのかな。

まあ、それはさておき一体どうしたものか、と、女子寮を見上げながら途方にくれていると、携帯電話と言う存在を忘れていた事を思い出す。

余程、焦っていたのかと、深呼吸をして俺は優希ちゃんへ電話を掛ける。

「……」

着信音はなる。

「……」

が、優希ちゃんはず、留守番サービスへ繋がってしまう。

「……」

俺は電話を切る。

そして、このまま女子寮に入ってしまったおうかとも考えたが、見付かった時、優希ちゃんに迷惑をかけてしまうと思い至り、考え直す。

そして、優希ちゃんは女子寮に居ると決め付けていたが、本当に居るか知らなかった事に思い至る。

どうやら、よっぽど、今、俺の頭は回転を止めているようだ。

俺の使っているドコモの携帯電話にはGPSを使つて、相手の居場所を探す機能が付いているが、相手が了承しない限り表示はされないという意味はない。

「……」

俺は階段を上っている。

別に優希ちゃんの居場所が分かった訳ではない。

ただ、もしかしたらソコに居るかもという止まっている頭をフル活動して考え出した勘である。

二階を越え、三階……そして四階の上へ。

目指すは屋上。

初めて話した時、優希ちゃんが煙草を吸ってた場所であり、俺が約束した場合であり、優希ちゃんが好きで嫌いな場所。

俺は屋上の扉を開ける。

そこには、初めての時と同じように煙草を持って遠くの景色を眺めている優希ちゃんの姿があった。

「……」

優希ちゃんは俺には気付かず景色を見続けている。

俺はゆっくり優希ちゃんのもとへ歩いていき、隣へやって来た。

すると、流石に優希ちゃんも俺に気付いてくれた。

「恭介さん……どうしてここに？」

俺は優希ちゃんの質問へは答えず、違う言葉を発した。

「お！ 景色綺麗だな」

ここに来て、男子寮の屋上で初めて見た時のように、太陽が沈み、映し出すオレンジの夕日は美しい。

少女は美しいより、可愛い方がいいけどね！

「優希には、灰色に見えますです」

優希ちゃんが、景色を見てそう呟く。

恐らく、本当に灰色に見えている訳ではないだろう。

空がオレンジに染められている景色をちゃんと見えてはいるはずだ。

でも、見えるけど見えないのだと思う。

オレンジ色だけど、灰色だから。

「俺はさ、前に約束したじゃん」

俺は景色を見ながら優希ちゃんに話し掛ける。

優希ちゃんも聞いてはいるけど、景色の方を向いている。

「出来る限りのことはするよってさ」

優希ちゃんは無言だ。

ただ、景色を見ている。

俺は話しを続ける。

「昨日のカラオケ。ぶっちゃけ、驚いたよ。まさか、香菜ちゃんが優希ちゃんの姉だったなんてさ」

「……」

「でさ。昨日の俺は扉を開けるくらいしか出来なかった」

「……」

「拓夢は間違っではないって言うてくれたけど、俺は正解だと思っ
てなかった」

だって、それは逃げた事と思っていたから。

「……」

「優希ちゃんはどうか分からないけど、今も俺はベストだったとは思
ってない」

「……」

「正直に言っけどさ。前に約束したとき、俺は軽い気持ちだったん
だ。ただ、笑って欲しいって」

「……」

「それを拓夢に言ったらさ、何て言ったと思う？」

「……」

優希ちゃんは答えない。

質問風だが、答えを求めてない台詞だと分かってるんだろう。

「別にいいじゃんだってよ」

「……」

「俺は特に理由もなく、約束した。だが、助けたいと言う気持ちに理由は要らないって言われてさ、分かったんだ」

そして、俺は優希ちゃんの方へ向いて、今一番言いたかった言葉を口に出して綴る。

カッコ悪くたっていい。

俺はアニメやゲームの主人公のように、カッコイイ台詞なんて言えないから。

でも、これはシナリオライターが書いた偽りの台詞ではなく、俺が心から思った本当の言葉だ！

「優希ちゃんには笑って欲しいんだ！ だから、優希ちゃんが抱えている悲しみを半分、俺に持たせてくれ！」

「……！」

優希ちゃんが驚いた表情を見せ、俺の方へ向く。

「前も言ったように、俺なんかじゃ何も出来ないかもしれない。でも、出来るかもしれないから、俺に手伝わせて欲しい」

「……恭介、さん……」

優希ちゃんの手から煙草が落ちる。

「俺に、灰色の世界を色が溢れる世界へ変える手伝いをさせてくれ」

「恭介、さんっ」

優希ちゃんが俺に抱き付いてくる。

「……」

俺は黙って優希ちゃんを受け止めた。

きつと、本当は香菜ちゃんに抱き付きたいはずだ。

言わば、俺は代わりだ。

「き恭介さんっ……！」

優希ちゃんは涙声で俺の名を呼ぶ。

でも、代わりでも、代わりになれるなら今はいい。

「ありがとう……ごじます……っ！……」

涙声で感謝の言葉を告げられる。

だから、

「それは、おねえちゃんと仲直り出来たら言ってくれ」

と、言ってやった。

そう。

これがスタートライン。

やっと、始まったのだ。

「……は、はい……っ！！」

優希ちゃんは力強く、返事をする。

だが、声はやっぱり涙声のままだ。

優希ちゃんには笑って欲しい。

だが、今だけはいいだろう。

今だけは。

Chapter 3 姉妹（後書き）

片方が正しくて

片方が間違っている

当事者から傍観者へ

それが間違いだと気付いた

Chapter 4 噂（前書き）

掟は破れない

それが世界のルール

抗つても 戦つても

神になれば かえられる？

Chapter 4 噂

「では、今日から新しい所に行くぞ」

正治先生がそう言つて、教科書のページを指定する。

そのページを俺たちは開く。

流石に、この天才校で居眠りなどをしてる奴などはいない。

そんな奴は入れないからな。

まあ、もの凄く頭が良ければ入れるかもしれないが。

「今回からやる所は、価値観の相違、だ」

一学期の現代文の試験は九十九点と、惜しくも一点足りなかったからな。

二学期は満点を採つてやるぜ！

葉鍵学園の試験は学期事に一回ある。

つまり、その一回の試験で、その学期の評価が付けられるのだ。

因みに、この学園の赤点は五十点。

半分以下は赤点なのである。

だからといって、簡単な問題でもない。

ぶっちゃけ難しい。

数学では、相対性理論を学んだが、満点まで五点足りなかった。

まあ、でもこのクラスの平均点は九十点。

このクラスが特別凄いのではなくて、他のクラスや、学年でも大体同じ平均点が出る。

やはり、ここに居る人たちは本当にみんな天才なんだと改めて思ったね。

全教科で最低点は九十三点で、俺の平均点は九十五点だが、クラスでの順位は十二位だった。

四十二人居るので、数字上では上位だが、一位の奴はオール満点など、まだまだ差がある。

やはり、苦手な英語で躓いたのは痛かったかもしれない。

いや、痛かった。

躓かなければ、一桁まで行けた。

……だから、二学期は頑張ってオール満点を目指すぜ！

「では、光輝くん。読んでください」

「はい」

正治先生に指名された光輝は教科書を持って、立ち上がって朗読を始めた。

「過去を見てみると、そして現在を見てみると、世の中には沢山の差別があることがわかる。例えば、人種差別。日本ではあまり馴染みはないかもしれないが、外国ではまだ存在する所もある。最も有名なのは黒人と白人の違いだろう」

差別……。

俺たちゆとり世代の日本では平等が憲法でも示され、あまりお目にかかることはないな。

…… 本当にそうだったけ？

何か、スゲー間近な問題だった気もしなくもねえが、ゲームの影響かな。

まあ、確かに昔は白人が偉く、黒人は身分が低かった。

だが、そんな事は誰でも知っている事だ。

日本でも、昔は黒人を奴隷として扱っていたらしいからな。

「次に有名なのは、男女差別だろう。俗に言う男尊女卑だ。これも外国ではまだ存在する所もある。日本でも昔は男尊女卑だった」

そうだな。

そういえば、男尊女卑から男女平等になったのは、結構最近なんだな。

確かに、女性の社長はまだしも、女性の校長とかを見ると違和感を感じる。

俺はジェンダーに取り付かれているらしい。

でも、流石に風呂・飯・寝るの親父を想像したりはしねえよ。

まあ、亭主関白とはいかなくても、かかあ天下は確かに嫌だね。

最近は草食系男子が増えているから、余計女子の肉食系が増えるんじゃないんだろうか？

俺も肉食系とは言えないしな。

ロールキャベツでも目指そうかな？

まあ、俺はきつと亭主関白にはなれないだろうな。

……なんか、女子に引つ張られる姿が想像出来る。

……まあ、妄想だな。

俺はきつと、ずっと彼女いない歴〃年齢で、いつか魔法が使えるようになるんだ。

……恋愛、いっぱいしてるし、嫁も沢山いるのにつ。

……画面の中では。

正治先生の授業が終わり、放課後となった。

だが、今は俺の目の前には正治先生が居る。

「進路とかは考えているのかな？」

正治先生は進路とか、悩み事を聞くカウンセラー的な事もしている。別に悩みとかはないが、進路の事は先生とかに早いうちから聞いてもらった方がいいだろうと思って、今話をしている。

職員室に訪れたのは単に落ちてた千円を届けたのが理由だが、正治先生がついでだから進路について聞かせてと言って来たので話をしている。

あ、別に、千円を自分の物にしようとか、一瞬も刹那さえも考えなかったからな！

本当だぞ！

ただ、ちよつと、ゲーム代にと心は揺れたり……なんかしないんだからな！

勘違いするなよ！

「ココを卒業したら、ゲーム科のある専門学校に行こうとしてる」

「じゃあ、ゲームプログラマーに?」

「ぶっちゃけ悩んでる。プログラマーかプランナーかで」

「なるほど」

ん?

先生にタメ口はおかしいってか?

別にいいんだ。

先生も了承済みだ。

何か、一学期の頃からよく話し掛けられ仲良くなった。

それで、先生が敬語は止めてくれと言うから、止めた。

それだけ。

ぶっちゃけ、先生の中では正治先生が一番、仲がいい……と言うのはおかしいか?

親しくなった。

担任の智夜先生より……。

……ん?

周りを見ると他の先生達がいて、それぞれ何かやっている。

印刷してる先生や、パソコンで何か打ってる先生など。

だが、担任の姿だけはなかった。

「智夜先生は？」

だから、聞いてみた。

まあ、特に意味はないが。

「ああ、智夜なら用事があるから帰ったよ。忙しいからね」

へえ、そうなんだ。

それから、進路について三十分程話して、俺は職員室を出た。

今俺は談話室にいる。

ここは、その名の通り、談話する部屋だ。

個室ではなく大部屋なので、聞かれない話をするには適さないけどな。

ただ、無料の自動販売機も設置されていて、たわいのない話をするには最高の場所だ。

つまり、今のような時には最高の場所って訳だ。

「でさ、もし本当ならヤベーじゃん！ めっちゃヤベーじゃん！」

紙パックのコーヒ―牛乳を片手に持ち、ストローで啜る俺の前で、悠斗が俺に向かって話してくる。

「なっ！ スゲーだろっ！！」

まあ、確かにもし本当ならそれはとてつもなくスゲー事だ。

多分、葉鍵学園の歴史を見ても、まずないだろうな。

だって、ここは天才学園。

失礼だが、テレビに映るイケメンやアイドルとかは、ぶっちゃけ頭は悪いだろ？

高校生になって、掛け算できないとか終わってんだろ。

だから、頭がいい奴はブサイクが多い。

見た目が悪いから、せめて中身だけはって頑張る。

……まあ、全ての人に当てはまる訳じゃねえけどな。

大体はそんな感じじゃね？

でも、この考えも偏見なのかな。

ジエンダーかもしれないしね。

つまり、一言で言えば、アイドルの結愛ちゃんが、この天才校に転校してくるっていう噂を悠斗は手に入れたらしい。

だが、噂なんて、所詮は根も葉もない話。

極論を言えば、信じられない。

だって、大人気アイドルの結愛ちゃんが、この天才校に転校してくるってことは、かなりの天才って事だ。

それは、それでいい。

アイドルは頭が悪いなんて、間違いだとはぶっちゃけ思っていないが、全員ではないとは思っている。

結愛ちゃんは、見た目も中身も凄い奴なのだろう。

ライバルが増えるのは辛いけど、確かにアイドルが来てくれるのは、アイドルにそんな興味もない俺ですら嬉しい。

だとしたら、悠斗のようにファンは、もっと嬉しいんだろうな。

だが、問題は北海道に来るって事だ。

この学園は寮生活が義務だ。

つまり、この学園に入るって事は、ここで暮らすって事になる。

いくら、飛行機で行けるからと行って、わざわざ北海道に転校して

くる意味はない。

アイドル業をするなら、都市圏に居た方が遥かに楽だ。

だから、俺は信じられない。

「そんなの根も葉もないただの噂さ」

正直に言った。

前は悠斗も分かっていたが、今回はガチっぽいので本音を言っていた。

「ああ、分かってるよ」

何だ、分かっているのか？

「だから、噂の真偽を確かめにいく」

はあ？

やっぱり、コイツ何も分かっていない。

好きな女の子が来るって事が余程嬉しいのか、周りが見えていないようだ。

悠斗の中では、‘そうあってほしい’が、‘そうであるはず’に変わっている。

願望が想いが、そうさせているんだ。

だから、その証拠が‘ある’と信じられるから、見つけようとして
いるんだ。

‘ない’はずの証拠を。

「そうか。頑張れよ」

俺は、話を切り上げギャルゲーをする為に寮に戻ろうと席を立った。

「く・ろ・れ・き・し」

俺の足が止まる。

「あの時、無理矢理手伝わせたの誰？」

……。

「無理矢理付き合わせたのは？」

……。

「……俺です」

「分かればよろしい」

俺は、コーヒー牛乳をゴミ箱に投げて、悠斗の後を追った。

まあ、あの時は俺が悠斗を引きずり回したのだから、今回は礼も兼

ねて付き合つよ。」

ただ、一つ違うのは、捜し物が存在するかしないかの違いだ。前回はあつた。

でも、今回は……。

「で、どうするんだ？」

「噂の発信元を探す」

「どうやって？」

「僕に噂を教えた奴に聞いた奴を聞く」
なるほど。

つまり、どんどん辿って行くって訳だな。

「僕が聞いた奴は先輩から聞いたって言うてた。行こう」

そう言つて、悠斗は再び歩き出す。

噂の発信元。

そんなの、見つかるのかな……。

海から探す様なものだしな。

まあ、ネットという海よりはマシか。

「あずにゃん萌え！ やっぱ時代は妹系だよね！」

先輩は、発言通りオタクのようだ。

しかも、みんなが想像するような太っていて、汗っかきのキモオタだ。

ぶっちゃけキモい。

あずにゃんだって、桐乃の声で「キモッ」と言うだろう。

でも、気付かなかったな。

中の人と同じだなんて。

キャスト見るまでは、「平野綾」か「伊藤かな恵」のどっちかだっ
て思ってたから、吃驚だったよ。

顔がw(。o。o)wってなっちまったぜ。

「先輩、ちょっといいですか？」

見た目で少し引いていた悠斗が、意を決したように話し掛けた。

見た目で引くのは悪いとは思うが、……うん。

これはキモい。

「やっぱりい、男じゃ萌えないお」

うん。

声もキモい。

「ゆわゆあの噂は誰から聞いたんですか？」

悠斗が先輩の言葉を無視して、噂の話を聞く。

「ゆわゆあ？ ああ、あれはねえ。三年の男子があ、喋ってるの聞いたんだお」

俺と悠斗は三年の男子の情報を聞いて、キモオタのもとを離れた。

「……ビックリしたね」

「……ああ。あんなの、ゲームやアニメでしか居ないものだと思うてたよ」

「……僕もだよ。ある意味、真のオタクだね」

そんな話をしながら、俺たちは寮の三階に上がり、キモオタが話していたと言う、三年の男子が居る部屋に辿り着いた。

「……」

悠斗がチャームを押す。

数秒後、扉が開く。

「あら〜ん。いい男」

「……」

俺と悠斗は目を丸くした。

キモオタの次はオカマかよ！

どんだけ濃いんだよッ！

こんな奴、この学園に居ていいのっ！

ってか、こんなに濃いのに今まで知らなかった事にも驚きだよ！！

「どうしたのよお？ ガッカリしたあ？ そりゃあ、二丁目にはあ
敵わないわよお」

ガッカリしたよ！

別の意味でな！！

「あの、ゆわゆあの噂って誰から聞いたんですか？」

悠斗は、キモオタのお陰で耐性が出来たのか、もう大丈夫のようだ。

「噂あ？ 一年生のお女子から聞いたのよお〜」

女子からか……。

どうしよう。

女子寮には入れないぞ。

「そんなことよりい、部屋によってえ行かない？　優しくするわよ
お」

「「遠慮しますッ！」」

そう言つて、悠斗と一緒に階段に向かって走り出す。

男子寮の外に出てきた俺と悠斗は立ち尽くしていた。

理由は、次の情報元が女子だからだ。

男子は女子寮には入れない。

桜花が特別なだけだ。

……桜花？　そうだ！

「桜花に連絡してみるか？」

俺は悠斗に提案する。

まあ、寮には居ないかもしれないけどな。

情報元の女子も寮に居るといふ証拠はないが。

だとしたら、無駄だな。

居なけりや、余計探せないけど。

でも、桜花なら知ってるかも。

同じ一年生のようにだし。

「うん！　お願いするよ」

俺は桜花に連絡する。

女子なら、桜花じゃなくてもいいかも知れないけど、優希ちゃんと香菜ちゃんには、こんな事で今はしづらいからな。

二人とも優しいから、やってはくれると思うけど。

香菜ちゃんは、最初嫌って言うと思うけどね。

桜花はコールが始まって、一回目で俺の電話に出た。

相変わらず早い。

『恭ちゃん！　電話してくれて嬉しい！　どうしたの？』

桜花の口調は明るい。

何か、スゲー嬉しそうだ。

いい事でもあったのかな？

「あのさ……」

俺は桜花に、経緯を話した。

『それなら隣の子がそうだよ。確か、ナンバープレートに書かれていた名前が確かそうだから』

どうやら、知っているらしい。

「じゃあ、行ってくれる？」

『いいよ。恭ちゃんの頼みなら喜んで』

行ってくれるようだ。

桜花は優しい奴だな。

今度、お礼しなきゃな。

チャイムが携帯電話越しから聞こえる。

俺は受信音量を最大にして、悠斗と携帯電話から聞こえてくる音に耳を傾ける。

『あ』

『あー』

『あ』

『あなたが』

『あ』

『噂』

『あ』

何か、相手の言葉が『あ』としか聞こえないんだが、携帯電話の調子が悪いのだろうか？

『間違いないですね？』

『それと便座カバー』

『では誰から？』

『それと便座カバー』

どうしてだろう？

今度は『それと便座カバー』としか聞こえないんだが。

最新携帯なんだけどな。

スマートフォンに替えるという携帯会社の陰謀か？

『それは本当ですか？』

『いい質問ですねえ』

『嘘……じゃ、ないですね？』

『いい質問ですねえ』

……何故だろうか。

池上彰の名言が聞こえるのだが。

って言うか、桜花。

どうして、話が進む！

絶対進まないだろ！

『分かりました』

『でもそんなの関係ねえ』

ボタン

何か、一発屋の台詞を聞いたような。

気のせいだよな、うん。

雇がしまったようだから、話が終わったようだ。

『噂と言つか、先生から聞いたようです。だから、彼女が嘘を言っていないければ噂は真実だと思います』

マジで……。

「やったあ！ ゆわゆあに会える！」

そんな……。

バカな……。

アイドルが何故？

俺の中の常識が、パラダイムシフトされていく。

その後、職員室で聞いたらすんなり本当だと答えてくれた。

マジかよ……。

ってか、今日の頑張りって………。

Chapter 4 噂（後書き）

加害者は 笑う

被害者は 泣く

傍観者は 知らない

知っているけれど

Chapter 5 転校生（前書き）

幾千の欠片の世界は

絡み合っているから

自分の為に 人を傷付け

生きていく

Chapter 5 転校生

「……大丈夫かな？」

拓夢があのようなように、不安げに聞いてくる。

だから答えてやる。

「大丈夫だ、問題ない」

拓夢は頷き、マウスをクリックする。

ちゃんと、投稿出来たようだ。

「二曲目……流れ、掴めるかな」

「大丈夫さ。俺の詞、お前の曲。そして、悠斗の絵。すべてが完璧だよ」

そう。

昨日の夜、噂が真実だと知った悠斗は、嬉しさからか凄いスピードで絵を仕上げた。

そして、今、漸くニコニコ動画に投稿したのだ。

「そう言えば、明日は転校生が来る日だな」

「ああ」

噂の転校生がな。

翌日。

「席に着けー！」

担任の智夜先生が、生徒に指示する。

みんな、反発する事など勿論なくちゃんと席に座る。

無論、俺も。

強いて言えば、言われる前からな。

悠斗は、待ちきれないという感じで、顔が綻んでいる。

「前に言ったが、転校生を紹介する。入ってきていいよ」

先生の声を合図に、教室の扉が開く。

どのくらいの生徒が、アイドルの結愛ちゃんが来るって知っているかは知らないが、全員の視線が扉に注目される。

そして、そこから期待通り、アイドルの結愛ちゃんが姿を現す。

驚きの表情をする生徒が大半だ。

俺は知っていたから驚かないが、殆どの生徒は噂を聞いていても、

真実だとは思ってなどいなかっただろう。

俺だって信じられなかったさ。

「おっ」

思わず声が出てしまったね。

結愛ちゃんはテレビで見る通り、可愛いから知ってはいた。

ほんと、ゲームの中から出てきたような少女だ。

配置は絶対妹だな。

問題はもう一人だ。

めっちゃ、可愛い。

いや、マジで。

アイドルに負けないくらいの可愛さを持ってるよ。

アイドルって言われたら絶対信じちゃうくらい可愛い。

いや、もしなっでなくても、なったらすぐファンが付くだろうね。

まあ、結論を言うと、二人とも可愛いって事さ。

みんな、同じ感想らしく、「レベルたけー」、「ゆあゆあだ」、「k t k r」等の声が聞こえる。

それもその筈だ。

結愛ちゃんは、黒髪のツインテール。

これだけで、大抵の男は落ちるだろう。

身長も百五十ちよいくらいで、まさに妹系アイドルの頂点と言っていい。

もう一人の子は、茶髪のショートで、身長は百五十五弱くらいだ。

前髪をヘアピンで×にして留めている。

こっちは、クールな感じが漂っている。

と言っても、お姉さん系ではない。

ぶつちやけ、小柄で胸は結愛ちゃん同様すつとんっぱい。

だが、それがいい。

貧乳はステータスだ、希少価値だ！

「えっと、自己紹介してもらえるかな」

先生が二人にそう言うと、ざわめきが治まる。

流石は、天才校だぜ。

「埼玉県から来ました“釘宮結愛”です。よろしく願いします」

結愛ちゃんが自己紹介をした。

何か、テレビで聞いた声よりは低い。

まあ、テレビの時は媚びてる声だからな、アニメ声って言うのかな？

だから、これが本当の声なんだろう。

それでも、可愛い声に変わりはねえけどな。

「堀江理緒”です。よろしくお願い致します”」

そう言つて、もう一人の少女、理緒ちゃんはお辞儀をした。

礼儀正しいだな。

由緒正しいどつかの箱入り娘とかなのかな？

まあ、それはともかく二人とも可愛い！

よく、美人派が可愛い派かつてあるけど、絶対可愛い派だよねっ！

外国人は美人派が多い気がするけど、俺からすればイミフ。

全く、ワケが分からないよ。

何か、契約厨みたいな台詞を浮かべてしまったが、とどのつまりは……。

可愛い方がぜってえいいに決まっているッ！！

放課後。

そこには、よく漫画とかにある光景が映っている。

転校生を囲んでの質問責めだ。

よく見ると、悠斗も加わっている。

「スゲー人気だな」

光輝が俺の所に近付いてきて、そう呟く。

「この学園への転校は珍しいのに、さらに二人とも可愛いからね。まさに、可愛いは正義だよ」

「……よく分からないけど、確かに可愛いよね」

「ああ、俺の嫁だ」

「いやいや、せめて彼女でしょ」

彼女か……画面の中では沢山居るのにッ！

現実は厳しー（><）

もし、この世がゲームだったなら、現実では不可能な Repeat

を繰り返して、RewriteとRebuildを行って、必ず手
にしてやるのにッ！

まあ、現実では告った事なんてないけどな。

「じゃあ、俺は部活があるから行くな」

「おう！ 頑張れよ」

「ああ！ 近いうちに将棋リベンジするからな」

「いつでもウエルカムさ」

「余裕ぶりやがって」

そう言い放つと、光輝は部屋を出ていった。

光輝は部活に入った為に、なかなか遊べなくなってしまった。

次遊ぶ時は、こっちが調整しないとな。

「恭介、今ケータイから楽曲を見てみたんだがな」

今度は、拓夢が俺の前に現れて話し掛けてきた。

「どうだった？」

投稿から一日しか経っていないからな。

一万再生あれば、凄いいんじゃないかな？

だが、流石に零という事はないとは思っけど、二桁にも届いてなかったら泣くしかないな。

「なんと、十万再生だ」

……何。

十万再生だと……。

「……やったな」

「ああ！」

つい、拓夢とハイタッチしてしまったね！

だって、そのくらい嬉しいんだよ！

後で、アイドルを囲んでる悠斗にも教えてやらないとな。

「三作目もよろしくな」

「任せておけ！ どんな歌詞だろうが、書いてみせるぜ！」

「頼んだぜ！ じゃあ、俺はティルズの最新作を買いに行ってくるよ。予約してるから安心だぜ」

そう言うと、拓夢は教室を出ていった。

ティルズシリーズか。

嫌いって言う人もいるけど、俺は好きだぜ。

「恭ちゃん。聞いてもいい？」

光輝、拓夢に続いて、桜花が俺の前に現れた。

「どうした？」

一体、何だろうか？

「恭ちゃんは、転校生をどう思う？」

「どういう意味？」

「だから……その……可愛いとか……」

ああ、そういう事か。

「もちろん、可愛いに決まっているじゃん！ あの二人をブサイクと言う奴はよほどの美的センスのない奴だと思っぞ」

何度も言うが、結愛ちゃんと、理緒ちゃんは可愛い。

「……恭ちゃんは……ああいう子が……タイプ……なの……？」

タイプ？

そりゃあ、勿論。

「ドストライクですとも」

当たり前前の質問、愚問だね。

いや、俺以外の奴も同じ事を言うだろうぜ。

例え、美人派で巨乳派でお姉さん系がいいと言う俺と全くの反対の人が好みの奴でも、心揺らぐに違いない。

「そ……そんな……始末……きゃ……………」

「ちょ！ お、桜花っ！」

何か、分らないが、桜花が走って教室を出て行ってしまった。

まあ、桜花なら大丈夫だろう。

俺は席を立って、悠斗のもとへ向かう。

どうやら、優希ちゃんと香菜ちゃんはすでに教室を出たらしく、姿はない。

「ゆあゆあちゃん！ さ、サインくれないかな？」

俺が悠斗の所に来た事など悠斗は気付きもせず、結愛ちゃんに、サインをねだっている。

「……………」

だが、結愛ちゃんは無言だ。

どうやら、無視されているようだな。

ドンマイb(・・)

「ゆあゆあちゃん……どうしてさっきから話してくれないの?」

「……」

生徒の言葉に結愛ちゃんは無言で、ただ教科書を鞆に詰めている。

「ゆあゆあちゃん」

「……ないで」

「え?」

「ゆあゆあとか言わないで! 気持ち悪い!!」

結愛ちゃんのその言葉に、悠斗は勿論、周りの生徒も驚く。

勿論、俺も。

「……」

そして、結愛ちゃんは、そのまま席を立って、教室を出て行ってしまった。

「……」

どうやら、悠斗は放心状態のようだ。

悠斗だけではなく、他の生徒も放心状態のようだ。

そりゃあ、大ファンの結愛ちゃんに「気持ち悪い」とか言われたんだから仕方ないな。

「なんだよ！ やっぱアイドルって性格わりいな！」

そう言つて、怒って出て行く生徒も多数いた。

「あの……」

そう呼ばれて俺は後ろを向く。

そこには、もう一人の転校生、理緒ちゃんがいた。

何だろう？

理緒ちゃんは、結愛ちゃんとは違い、さっきまで質問責めにたいして、ちゃんと受け答えしてた筈だ。

それを、押しきつてまで、話し掛けられる理由などない筈だが。

「なにかよう？」

「はい。この後、空いていますか？」

予定の事だろうか？

どうしてそんな事を聞くんのだ？

「まあ、空いているけど」

「では、後で屋上に来てください。では」

そう言っつて、理緒ちゃんは教室を後にする。

その後の事は思い出したくない。

簡単に言えば、男共にもみくちやにされたと言っつておこつ。

「どういふ関係だ」とかの質問責め。

だが、この後の出来事に比べれば何て事もなかった。

そつ、命の危機に比べれば。

男共の襲撃の後、悠斗は何とか歩けるまでには回復して、教室を出て行った。

俺は約束通り、屋上を目指していた。

その時だった。

「……」

「……」

偶然、結愛ちゃんと遭遇した。

「……よう」

まあ、目も合ってしまったし、無言は流石に嫌だったので話し掛けた。

「……」

が、悠斗たちと同じように返事はない。

「……結愛ちゃんでもいいかな？ 呼び方」

まあ、どうせ無視されるんでしょうけど。

「いい」

だが、予想外に予想外。

向こうから返事が返ってきた。

だから、俺はさっきの事を追及してみる事にした。

「どうしてさっき無視したんだ？」

「……」

また、無視ですか。

「……気持ち悪いからよ」

と、思ったら、ちゃんと返事が返ってきた。

「気持ち悪い？」

「ゆあゆあとか気持ち悪くない？　今まで仕事だからって我慢してたけどもう限界！　私はためえらのなんだって言うの！　仕事だからお兄ちゃんとか言ってたけど、赤の他人だろ！　馴れ馴れしくゆあゆあとか言うなっての！」

何か、スゲエぶっちゃけられた。

うん。

ファンが、聞いたらスゲー悲しむんだろうな。

きつと、アイドルも大変なんだな！。

思ってる想像以上に。

「だから辞めて来たの。いちようは休みって扱いだけど、もう戻るつもりなんてない。ここならアイドルに興味ある人は少ないって思ってたけど、結局同じね。もうゆあゆあとか呼ばないで！　私は結愛。ゆあゆあじゃない！」

そう言って、結愛ちゃんは俺の横を通り過ぎて行った。

なるほど、理由が分かったよ。

アイドルを止めたから北海道に来た。

そして、天才校ならアイドルに興味ある人は確かに少ないだろう。

現に、さっきだって悠斗のように集まっていたのは十人程だ。

まあ、それが多いか少ないかはわからないが。

でも、理由が解けてスッキリしたぜ。

……俺は別にアイドルとか興味なかったからアレだけど、もし俺じゃなく悠斗が聞いてたら、もう歩けないなこりゃあ。

二次元愛してて良かった。

階段を上って扉を開ける。

もしかしたら、優希ちゃんも居るんじゃないかとドキドキしたが、杞憂に終わった。

だって、もしいたら、理緒ちゃんに煙草がバレるかも知れないからな。

「ちゃんと、来てくれましたね」

理緒ちゃんが、コッチに向かって話し掛けてくる。

「そりゃあ、来てくださって言われたからな」

「そうですね。ありがとうございます」

「で、何のようだ？」

屋上まで呼んだって事は、きっと他の人には聞かれない大事な用なのだろう。

初めて今日出会った俺に、そんな大事な用って何だろうか？

「すいませんが、こちらに来ていただけますか？」

理緒ちゃんが待っている。

俺は理緒ちゃんのもとへ歩いていく。

そして、理緒ちゃんの隣にやって来る。

「で、どうした？ 俺に用なんだろ？」

「はい。あなたにしか出来ない用です」

俺にしか？

一体、どんな用だって言うのだろうか？

「……………」

理緒ちゃんが近づいてきて、

「……………」

押された。

そして、俺は屋上から投げ出される。

そして、走馬灯を見て身体を赤色で染める。

「……っ」

もう少しで、そんな事になっていた。

だが、一瞬の殺気に気付いたと言つか、感じて理緒ちゃんを避ける。

そのお陰で、死なずに済んだ。

てか、なにになにつ！

どういことっ！

俺、なんか殺されるまでの事、何かした！？

「……どういことっもり？」

俺はあくまで冷静を保って、理緒ちゃんに問い質す。

「緑川恭介さん。死んでください」

直で「死んでください」って言われたよ！

何で何だよ！

理緒ちゃんは何？

暗殺者とかでもやってるの！？

「……そりゃあ、どうして？」

「あなたが死んで、喜ぶ人が居るんです」

ハア？

ホントに暗殺者とかやってるの！？

もしくは何？

裏世界の人間ですか、理緒ちゃんは？

そんな、何の特徴もない普通の高校生のつもりの俺が、殺される程に誰かに恨まれる事などないと思うんだけど。

「なに？ 理緒ちゃんは暗殺者かなにかですか！？」

まあ、黙っていても仕方ないので、素直に聞いてみる。

これが、悪い冗談ならいいんだけど。

理緒ちゃん、冗談とか言わなそうな子だしね。

いや、でも、やっぱ、殺される程に恨まれる筋合いはないよ！

絶対にッ！

ギャップ萌えになるから、「噓っぴょん」とか言つてよー理緒ちゃん……。

「そうですね。あなたにとっては私はあなたの首を刈る死神ですね」
死神って……。

「でも、避けてくれてよかったです。凄く鈍感でそのまま死んでもらつては困りますから」

殺そうとしていて、次は困るって支離滅裂じゃね？

って事はわざと気付かせたの？

よかったー鈍感じゃなくて。

「言つてることが分からないな。死んでとか言つておいて、死なれては困るとか」

「確かにそうですね。さっきのやり方で死なれては困ります。でも、死んで欲しい」

さっきのやり方で死なれては困る？

理緒ちゃんに押されて、屋上から落ちて死ぬのは困るって事？

おいおい。

まさか、殺害方法も指定されているのかよ。

俺は全く憎まれる理由は思い付かないが、今やってるエロゲーなら、身体を半分に切断して、姉妹をくっ付けて縫ったり？

え！？

そこまで俺は憎まれてるの！？

恨まれる事など、憎まれる事など、そりゃ、生きている間に衝突は何回もしてるけど、何度も言うが殺害される程の事はないと思う。

俺はイジメとかしないいい奴だったからな。

「どんな残忍の方法で殺害するつもりだ？」

俺は、他人事のように喋る。

「殺害はしません」

は？

殺す殺す言つといて、意味分かんないんですけど。

「私はあなたに望むのは、自殺、して頂くことです」

自殺だと？

「あなたには自ら飛び降りて欲しいのです。さっきはいきなりでしたから怖かったですよね？ でも、自分のタイミングでは怖くないでしょ？ 少なくともさっきよりは」

いや、怖いって！

てか、それを思わす為に押したのかよ！

自ら飛び降りて死ねとか、ある意味殺されるより酷いねこりゃ。

「イヤだ」

死ねと言われて「はい、そうですか」って死ねるかよ！

「分かってます。あなたは生きたいんですね」

「当たり前だ」

「私の目的はあなたを殺すこと。でも、殺害では喜ぶ人はいません。あなたが、この世界に見切りをつけ、自ら死んでこそ、喜ぶ人がいるのです」

それは、そいつはとてつもなくDSだな！

「俺は死なないからな」

そう言いきって、俺は理緒ちゃんに背を向けて、階段へ向かう。

「死なせてあげますよ。それだけが私の……あの人の幸せですから」

と、後ろから声がしたが、無視！

……何で俺が殺されなくてはいけないんだよ！

何か、よくよく考えたらスゲー苛ついてきた。

よしっ！

エロゲーすつかー！

Chapter 5 転校生（後書き）

選ばれたのは

様々な理由があるけれど

一番の理由は やっぱり

この世が 群像劇だから

Chapter 6 ツンデレ（前書き）

願ったこと 祈ったこと

虹のような笑顔が

いつまでも いつまでも

隣に居ますように

Chapter 6 ツンデレ

「当たり前のことだが、一樣言っておこう」

一時間目。

浜田先生の保健の授業だ。

浜田先生はそう前置きを置いて、喋りだした。

「射精が行われて、精子は卵子を目指す。精子は生まれながらに、生きるための方法、目的を知っているわけだな。卵子への道のりは短いと思ったらそれは間違いだ。精子は小さい。全長は約五十μmだ。もちろん、肉眼ではまったく見ることが出来ない」

前置き通り、当たり前前事を浜田先生は喋っている。

復習のつもりなのだろう。

まあ、万が一、忘れていたら、大変だからな。

だが、この天才校にその程度忘れている奴は……。

「……」

何か、光輝が冷や汗出しながらガン見してるな。

もしかして……。

居たな。

忘れてた奴。

ま、度忘れなどよくある事さ。

俺も、度忘れが多くて、アルツハイマーかと、驚いたくらいだ。

あ、今は認知症か。

だから、無理矢理病院に連れていかれたしね。

結局、違つてほつとしたけどな。

「膣内に射精された精子は、卵子を目指してひたすら泳ぐ。そのルートは最短でも約十七センチ、人間で言えば、約六キロの距離に相当する。そこを約十時間以上かけて泳ぐ。ただし、道中の環境はとても過酷なため、ほとんどの精子は卵子のところまでたどり着くことが出来ない。まさに、サバイバルだな」

うん。

そして、精子は数日しか生きれない。

だから、辿り着く為に、精子は泳ぎ続けるんだな。

辿り着いても、受精出来るのは、最初に辿り着いた精子のみ。

レースして一位だけと言う訳だな。

周りは全員敵……まさに、孤独のランナーだな。

「フェルマーの定理……深いな」

二時間目。

鈴木先生の社会の授業だ。

フェルマーの定理……。

社会ではなく、数学で教わるものではないのだろうか？

まあ、いいけどね。

「うん。じゃあ、フェルマーの定理は置いといて……」

置いとくのか。

なら、何故語った。

「チェリーパイの話でもしようか」

……。

「突っ込めよ！ 欧米かって！？」

いや……。

ってか、本人たちも最近はあまり、欧米かって言ってないぞ。

「敏彦ならちゃんと、欧米かってツツコンでくれるのに」

いや、そう言われても……。

なら、敏彦先生と漫才でも組めば良かったじゃん。

タカアンドトシならぬ、カズアンドトシとして、活動すれば良かったじゃん。

「まあいいよ。じゃあ、今日はピーチパイについてだな……」

……。

「だから突っ込めよ！ 今日のもう自習にしちゃうぞー！」

その方が、勉強が捗る気がするのは気のせいでもいいのかな？

「……仕方ない。では、オッパイの話でも」

「」「エロか！」「」

見事にハモったね。

「うつ……うつ……」

鈴木先生、嬉しさのあまり泣いちゃったよ。

「世の中、パソコンはなくてはならないものです。昔は、これがマ

ウスですよー、鼠に似てますねーから入ってましたが、今はそんなことは省いても問題はないですね」

三時間目。

三浦先生の情報の授業だ。

鈴木先生のボケに突っ込む三浦先生だ。

実際に見た訳ではないけどね。

「では、今日から二学期の終わりまでゲームを作って行きます。プログラミング言語は一般的なC言語を使用します」

ゲームは好きだぜ。

特にRPGは大好きだ。

テイルズシリーズ……まあ、正確にはテイルズオブシリーズか。

版權をテイルズウィバーに取られたんだよな。

後、ファイアーエムブレムシリーズも好きだ。

よく、ファイアーエムブレムと間違えたもんだぜ。

間違いのエンブレムもファイヤーも版權は持つてるらしいけど。

そう考えると、RPGの代表作のDQとFFは全然やった事ないな。

DQは、昔の携帯電話のアプリにDQ?の前編が入っていたから、少しやった程度だしね。

あ！

ゲーセンにあった、百円入れて、カードが出てきて、剣を刺す奴は一回だけやったな。

小学生の中に大人が一人居る光景は絵になるぜ。

恥ずかしいと言う絵がな。

俺なら絶対なれないね。

FFは、?を友達から借りてやったくらいだな。

スクエニと言えば、DQやFFをよくリメイクとかしていると言う印象しかないな。

スクエニのゲームってよくよく考えたら、買った事なかったし。

ゲームより社長をリメイクしろと言うコメには笑ったけど。

あ、ゲームじゃないけど、ガンガンコミックスの漫画買ってるから、貢いじゃっているな。

……打ち切りされたけど。

ふざけるなスクエニ！

「では、左上にあるアイコンをクリックしてくれ」

先生の指示通り、左上にあるアイコンをクリックすると、英語の文字列が表示される。

俺、英語苦手なんだよな。

まあ、プログラム作った人が、外国人だから仕方ないけど。

「まずはちよつと練習でPSSに登場する猫、トロを出現させてみて下さい」

えーと。

Load(“A”,Toro,1);と。

よし、キャラクターが表示されたぜ。

「みんな出たかな？ 今日から一人一人にゲームを作って貰う。作り方は一学期に教えた通りだ。ジャンルは何でもいいが、二学期中に終わるように」

どんなゲームを作ろうか？

シナリオを考えなくっちゃな。

「より、高度なゲームを作りたいなら、友達とチームを組んで作ってもいいぞ」

高度なゲームを作ろう。

みんなが神ゲーと称えるような、な。

「じゃあ、ジャンルはテイルズ作品のようなRPGか、Key作品のような泣きゲーのどちらかと言う事で、いいな？」

「ああ」

「もち」

「いいよ」

「はい、です」

「恭ちゃんがいいなら、私はいいよ」

四時間目の授業も終わり、今は昼食だ。

俺は、光輝、拓夢、悠斗、優希ちゃん、桜花と一緒にゲームを作る事となり、ジャンルを決めていた。

香菜ちゃんにも誘ったのだが、断られてしまった。

やっぱり、優希ちゃんが居るからだろうか？

だが、俺は後で首を縦に振るまで誘うつもりだ。

迷惑かもしれないが、それが俺が出来る最初の一步だと思っているから。

「インフレーション理論によれば宇宙の膨張は光のスピードを超えて加速していくわけだが、光より速く遠ざかる物体という運動は物質は光の速さを超えられないとする相対論と矛盾するか恭介、答えてみよ」

五時間目。

担任の智夜先生の数学の授業だ。

俺は、智夜先生に指名されたので、席を立ち答えた。

「相対論とは矛盾しない。なぜなら物体は周りを取り巻く空間に対し相対的に静止しており、光より速く膨張するようになるのは空間そのものってことで」

完璧な返答をしたぜ。

「うん。その通り。流石は……天才校に入っただけはありますね」

えへへ。

「では、続きをやります」

六時間目。

正治先生の国語の授業だ。

「では続きを……結愛ちゃん。読んでくれ」

「はい」

指名された結愛ちゃんは席を立ち、音読し始めた。

「さて、私は差別について書いたが、それは一例だ。何故差別が起るのか、それは価値観が違うからだ。もし、君の友達がオタクでフィギュアを集めていたら、そして君がオタクを気持ち悪いと思っ
ていたらどうだろうか？」

フィギュアか……。

そう言えば、俺はフィギュアは集めた事がなかったな。

フィギュアは二・五次元だと昔、誰かが言ってたな。

「友達からすれば、フィギュアは宝物だろう。だが、君にしたらただのガラクタでしかない。これが、価値観の違いだ」

俺はガラクタとは思わないぞ。

「もつと簡単に言えば、好きなものと嫌いなもの。それは人によって違う。賛否両論と言っ言葉があるが、これこそまさに、価値観の相違だと言えるだろう」

「終わった……」

六時間目が終わり、今日の授業は全て終了した。

ふと、香菜ちゃんの席を見るが、香菜ちゃんはすでに教室を去った後のようだ。

「恭介さん……」

顔を前に戻すと、そこには優希ちゃんが居た。

「ん？ どうした？」

「……お姉ちゃんを誘うんですか？」

「ああ、そのつもりだ」

「……了解してくれるでしょうか？」

「してくれるまで、粘るだけさ」

首を縦に振ってくれるまでな。

「……優希はお姉ちゃんに避けられてから、怖くなって自分からも避けるようになっていました」

「……そうか」

「はい。でも、優希はまたお姉ちゃんと仲良くしたいです。だから……優希も頑張りますっ！」

「ああ」

「きっと、今優希がお姉ちゃんと会っても、何も話してくれないと思いますです。だから、優希とお姉ちゃんを繋ぐ架け橋となって下さいですっ!」

「任せとけ」

優希ちゃんと話した後、俺は教室を後にし、香菜ちゃんが居ると思われる演劇部を目指す。

が、途中、悠斗に遭遇する。

「よ! どこいくんだ?」

何処に行くのかと、聞かれたので、

「演劇部」

と、返した。

「それはまたなんで? また黒歴史でも刻むのか?」

それはもう、忘れてくれ……。

「違うよ。香菜ちゃんを誘うんだ」

「ゲーム制作に?」

「ああ」

「頑張つてね」

と、言われた時、俺のポケットから一円玉が落ちた。

前に、お釣りをポケットに入れて、そのままにしてたのを忘れてたぜ。

「あ……」

一円玉は転がって、悠斗の足元で止まる。

「落とすなよ。一円でもお金なんだからな。一円を笑うと一円に泣くよ」

そう言つて、悠斗は一円玉を拾って渡してくれた。

「サンキュー」

俺は再び一円玉をポケットへ入れる。

「ちゃんと、財布に入れないとまた落とすよ」

ぶつちゃけ、一円程度なんだよな。

俺の場合。

「残念ながら財布は寮だし、よかつたらあげようか？」

ま、悠斗も要らないだろうけど、一円を力説するからふざけて言うてみた。

「マジ？ いいの？ ありがとう」

何か、めっちゃ、喜ばれた。

「じゃあ、はい」

俺は一円玉を悠斗に渡す。

「ありがとうね」

一円玉で、そんなに喜ぶとは、悠斗は将来、お金には困らないな。

「いいよ。じゃ」

「うん。じゃ」

悠斗と別れた俺は、漸く演劇部へ辿り着いた。

「……………」

だが、今は入れば演劇部の迷惑になるとココに来て、そう思い至り、部活の終了時間まで、待つ事にした。

終了時間までは、まだ数時間ある為、俺は情報室でゲームの企画書、プロットを制作する事にした。

まあ、簡単にだけどな。

現在、午後の五時五十分。

部活の終了時間は、午後六時。

「そろそろだな」

俺はパソコンで制作した企画書を印刷して、演劇部へと向かった。

「……」

「……」

その道程の途中、今度は理緒ちゃんと出くわした。

昨日、俺は理緒ちゃんに屋上に呼び出されて、自殺しろと言われた。

可愛いけど、何考えてるか、分からない奴だぜ。

「くんばんは」

黙っていると、理緒ちゃんの方から話し掛けてきた。

うん。

屋上での出来事がなければ、礼儀正しい可愛い子なのに。

「ああ」

一樣、返答する。

挨拶されているのに、無言なのは流石に悪いからね。

「どうですか？ と、聞いても無駄ですね」

質問に自分で答えを出すと、理緒ちゃんは去っていった。

「……」

俺は目的地、演劇部へと足を動かした。

「六時……よし、いいな」

俺は部活が終わる時間になった事を携帯電話で確認すると、演劇部の扉をノックした。

扉をノックした。

大事な事だから二回言いました。

ちゃんと、礼儀を弁えているんだぜ。

「……」

だが、返事がない。

屍になっているって事は、ゲームじゃないんだからないと思っけど。

「ああっ！」

気付いてしまった。

いや、気付かなかった。

本日、休部の看板が掲げられていた事に。

まさに、やつちまったなあ状態だぜ。

「クソ……どこに……」

演劇部に居ないとなると、もう何処にいるか分からない。

もし、寮に居るなら、入る事も出来ない。

完全に詰んだ。

ツンデレだ！

あ、詰んだ出れないの方ね。

「……あ！」

また、気付いてしまった。

電話すればいい事に。

前に、カラオケの件の時に交換した事を忘れていた。

「……」

俺は携帯電話を開き、リストにある、竹達香菜を選択して、通話ボタンを押す。

呼び出している。

プルルルル……

呼び出し音が俺を焦らす。

十数秒の呼び出し音の後、遂に繋がった。

『なに？』

「話があるんだけど、会えない？」

『今、言えばいいじゃん』

ごもつともで。

でも、それではダメだ。

俺は口先の魔術師ではないから、電話ではきつと、了解を得られない。

「会って話したいんだ」

だから、会って強引にでも首を縦に振るわせるつもりだ。

『……わかったわ。どこに行けばいいの？』

よし！

第一関門は突破だ！

「学校の屋上で待ってる」

『……わかった』

そう言つて、電話は切れた。

携帯電話をポケットにしまつと、俺は屋上へ歩き出す。

「なんですか？ 屋上に呼び出して」

「好きだ」

「通報しました」

「変質者じゃないよ俺！」

「冗談言つために呼び出したんなら、死ね」

死ねとはヒドッ！

俺、泣いちゃうよッ！

（TOT）えーん！

「いや、ぶつちゃけ、付き合えるんなら付き合いたいよ。香菜ちゃんは可愛いし」

「え……。べ、べつに誉められても嬉しくなんかないんだからねっ」

か、可愛い……。

お持ち帰りい！

「……おっと、本当に犯罪者になるところだった」

「……」

ひい！

睨まれたよ！

「で、わざわざ屋上に呼び出して、本当の理由は？」

それは勿論、君を誘う為だけど、屋上を選んだのは優希ちゃんがよく使っている屋上こそ、相応しいと思ったからだ。

煙草を吸う為だけだな。

まあ、香菜ちゃんがそれを知っているかは不明だけだな。

それに、ココは誓った場所だから。

「誘うためだ」

「……それは、断ったはずだけど」

「どうして？」

「何でもいいでしょっ」

「優希ちゃんだろ」

「……」

香菜ちゃんが黙る。

やっぱり、優希ちゃんが原因らしいな。

「どうして優希ちゃんを無視するんだ？」

「……何でもいいでしょっ！ アンタには関係ない！！」

関係ない？

それ違うよ、香菜ちゃん。

「関係ないことないよ。俺は優希ちゃんどこで誓った。君と優希ちゃんを繋げる架け橋になると」

「ハア？ 意味わかんないんだけど」

香菜ちゃんは溜め息を吐く。

「だから俺は手始めとして、君をチームに入れる」

優希ちゃんは勇気を出すと言った。

だから、俺はその手助けをする。

そう、誓ったのだから。

「……当事者でもないのに……部外者は黙ってればいいのよっ!」

っ!

今までも、怒鳴られた事は何回かあった。

でも、今回は、今までで一番本気で怒っている事が空気が読めない奴だって分かるだろう。

「……」

香菜ちゃんが、俺に背を向けて階段の方へ向かう。

「あ……」

なのに、声がでない。

ゴメン、優希ちゃん……。

詰んだ……無理だった。

その時、

「お姉ちゃんっ！」

屋上の影に隠れていた優希ちゃんが姿を現す。

「な……！」

驚きを表情を隠せないでいる香菜ちゃんは、優希ちゃんの方に顔を向け、硬直している。

俺も驚いている。

きつと、間抜けな表情をしていただろう。

どうして、ココに？

偶然ココにいて、ずっと隠れていたの？

「お姉ちゃん……」

「……」

「優希は……何か、お姉ちゃんの気に触ることもしたのでしょ
うか」

優希ちゃんの瞳から綺麗な粒が溢れる。

見ると、足が震えている。

怖いんだろう、拒絶される事が。

「……っ……そんなこと……ない……」

優希ちゃんの言葉に、ぎこちないが確かに香菜ちゃんは否定した。

「では……なんで……ですか……？」

優希ちゃんが、そう香菜ちゃん……姉に、勇気を出して聞く。

「……っ」

だが、勇気を出せたのは片方だけだった。

「……分かったわ。恭介、チームに入るわ。それでいいでしょっ！」

そう言い放つと、走って階段を降りて行ってしまった。

「……やっぱり」

「優希ちゃん。そんなことはない。ちゃんと、否定してくれたじゃないか」

「……はい」

「……ってか、ゴメンな。あんな見栄張ったのに、優希ちゃんが偶然屋上に居なきゃ、止めれなかった」

「そんなことはないです。恭介さんはちゃんと架け橋になってくれましたです。お姉ちゃんをココまで連れてきてくれたです」

え？

「偶々居たんじゃないのか？」

俺がそう言つと、優希ちゃんは首をかしげた。

「何言つてるんですか？ 教室での会話で架け橋になってくださいと言つたじゃないですか？ つまり、屋上まで連れてきてくださいと言つ意味だつたんですが……伝わらなかったですか？」

はい。

伝わりませんでした。

屋上に呼び出さなきゃ、優希ちゃんをずっと、待たせる事になつたぜ。

来る筈のない姉を待つて……。

チュッ

「え？」

頬に柔らかい何かが当たる感触がした。

「えへへ、お礼ですっ」

そう言つと、優希ちゃんも走って階段を降りて行ってしまった。

頬を擦ってみる。

きっと、今の俺の顔は、誰もが引く笑みをしているのだろう。

理由は勿論。

優希ちゃんが、可愛いから。

俺は思った。

三次元も素晴らしいと！

Chapter 6 ツンデレ（後書き）

交差点ですれ違った

全ての欠片には

それぞれに歩むべき道

辿り着く終着点がある

Chapter 7 鈍いのではない、経験がないだけ（前書き）

何もないなら

それでも よかった

だけど 何でもあるから

砂の城は波に消えていく

Chapter 7 鈍いのではない、経験がないだけ

「九月か……」

俺は携帯電話の待受画面を見て、そう呟いた。

何故なら、今日から九月だから。

内地……本州なら、八月末迄休みなんだろうから、今日から学校に「だりー」とか言いながら行くんだろうが、北海道の夏休みは八月半ばで終わるからな……。

その分、冬休みが本州より多いからいいけどな。

まあ、休みの日にちは、北海道でも本州でも同じ五十日と決まってるんだが。

何か、九月始めになると、何で昨日、勉強を受けに行ってるんだろうと考えてしまうな。

小学生の時は、そんなの知らないから何とも思ってたのに。

ただ、本州の人たちより早く、八月半ばで学校行きたくない病が始まるだけで。

この学園に通っている生徒でそんな事を考えているのは、多分俺だけだと思っけどな。

まあ、九月かと意識した理由はもう一個あるんだけどな。

「……よく考えれば、北海道を出たことなかったな」

俺は、そんな事を思い出しながら、携帯電話を弄って、ブックマークから自分のサイト……ブログを開く。

そして、簡単ログインをクリックして、携帯製造番号を送信して、作者画面に入って作詞を始める。

テーマは、昨日授業中に閃いた奴を採用。

まあ、テーマは出来ていても、頭の中の想像物……映像を文字に変換するのは結構難しく、打っては消して、打っては消しての繰り返し。

いつもの作詞作業となんら変わらない。

たまに、一発ですんなり、スラスラと書ける時もあるけどね。

‘オタク パラダイス’は、その例だね。

やっぱ、モデルが居ると、書きやすい。

あんまりぎつちりし過ぎると、範囲が絞まって余計書けなくなるから、程々がいいけど。

ピンポン

部屋のブザーがなった。

どうやら、桜花が迎えに来てくれたらしいな。

「今行く」

そう扉へ……実際にはその後ろに居る桜花へ話し掛ける。

そして、忘れ物がない事を確認して、扉を開ける。

「おはよう。恭ちゃん」

桜花が俺へ、いつもと変わらず挨拶をしてくる。

「ああ、おはよう」

だから、俺も返事をして、一緒に並んで歩く。

ぶっちゃけ、めっちゃ恥ずかしいんだけどね。

寮の奴は、上級生も含めてからかってくるし。

俺は桜花の彼女じゃねーよ。

ただの幼馴染なのにな。

桜花だって、迷惑していると思うからホント止めて頂きたい。

「ん？ どうしかな？ 恭ちゃん？」

「え？ い、いや！ な、なんでもない」

俺は意識せずに桜花の顔を見ていた事に桜花の言葉で気付き、慌て繕った。

今日は、九月一日……もうすぐ、桜花の誕生日。

小学生の時は、特別プレゼントをあげた記憶はないが、今回は折角だし、サプライズで渡そうかなと思ったのが、九月を意識したもう一個の理由だ。

「いきなりだが、もうすぐ学祭だ」

担任の智夜先生の言葉にクラス中がざわめく。

ざわ……ざわ……。

なんて擬音は現実には聞こえないが。

まあ、天才校である葉鍵学園の数少ない遊びのイベントだからな。

みんな楽しみなんだろう。

中には、遊びなんて不要だとか思っている奴も少なからず居るだろうが。

俺は、あって嬉しい。

天才にだって、休養はいると俺は思うね。

嫌だって思う自分も少なからずいるけどね。

「でだ。知ってると思うが、葉鍵学園は必ずクラスで何か出し物をしなければならぬ」

葉鍵学園は、と言ってはいるけど、大体の学校はそうだと思うので、そんなに特別な事ではない。

ただ、問題は……。

「出し物を何にするかは、後でアンケートをとるから」

担任の智夜先生はそれだけ言うと、遂に問題の言葉を綴った。

「で、次だ。クラス全員がペアを組んで漫才をしてもらう」

これが、問題一。

何でも、創立した時から続く伝統らしい。

何故、漫才が伝統になったかは知らないけど。

しかも、プロの芸人が来て採点までしてくれる涙が出る仕様だ。

「最後に、男子代表五名と、女子代表五名は」

言わなくても分かっている。

問題二。

男子は女装、女子は男装しなくてはならない。

他の学校でも、女装や男装はあるだろうが、殆どの学校はやりたい奴だけの自由参加だろ？

だが、この学園は、やりたい奴がいなくても、必ずクラスから男女五名ずつ出場しなくてはならない。

体育館の舞台で、全校生徒が見ている中で男子は女装を、女子は男装をしないとならない。

これは恥ずかしい……。

選ばれた女子生徒は、水着コンテストもしなければならぬから、女子よりは気が軽いかもれないが、女装だけで何か大切なものを失うのは確実だ。

バンドとかは自由参加なのに、漫才とコレだけは強制参加なのだ。

生徒会の決めたイベントにも強制参加だが、そっちは毎年大した事はないので、別に大丈夫だろう。

「ってなわけで、まずは女装、男装する奴を決める。やりたい奴はいるか？」

智夜先生が挙手を求めるが、当然の如く

「……」

誰も、手を挙げたりはしなかった。

「だろうな」

智夜先生も、こうなる事が予想付いていた様な反応を見せる。

「では、ジャンケンだな」

ジャンケンだと……！

慌てるな俺……当たり前だが選ばれる確率は、選ばれない確率より断然低い。

大丈夫……大丈夫……。

漫才はみんなやるから、諦めも付くし、どうせ大体のペアはしゝんとなるんだろうから、そんなに嫌ではない。

嫌ではあるけどね。

白けるのが分かっているのに、舞台にあがるなんて、公開処刑以外の何物でもない。

でも、みんなやるから、諦めは付く。

だが、女装は別だ。

恥ずかしいし、人生の黒歴史になる事はまず間違いない。

そんなものに出たくなど当然ない！

だから、俺は勝つ！

大丈夫……アイドルグループのメンバーが、センターを獲得する為にジャンケンをして、見事センターを獲得する確率よりは、確かに高い確率で選ばれてしまう。

だけど、大丈夫だ、問題ない。

Aクラスの生徒は全員で四十四名。

その内、男子生徒は二十一名。

選ばれる確率は、クラスの男子生徒二十一名の中の五人。

つまり、二十一分の五。

四人に一人当たってしまう計算だ。

「……」

そう考えてしまうと、かなりの高確率だ。

でも、確かに宝くじとかに比べるのならかなりの高確率だが、選ばれる確率は、選ばれない確率を下回る。

四人中、三人は外れるのだから。

まあ、実際にこの確率論は使えないが、選ばれる確率より、選ばれない確率の方が高い。

大丈夫だ、問題ない……。

そう、大丈夫だ、問題ない

「……」

大丈夫では……なかった。

選ばれてしまった……。

まさか、こんなに俺がジャンケンに弱いとは……。

いや、焦って深読みし過ぎたのかもしれない。

俺の精神力は、どこかの王様のように、豆腐メンタルのようだ。

でも、気は少し晴れた。

何故なら……。

「じゃあ、出てもらうのは、恭介、光輝、悠斗、拓夢、智紀、桜花、優希、香菜、結愛、理緒に決まった」

そう。

光輝たちも一緒に出る事になったから。

クラス全員……と言っても、選ばれてしまった俺たち以外が拍手をしてくる。

安堵しながら拍手をしている奴、憐れみの目を向けながら拍手をし
ながらしている奴等バラバラだが、みんな選ばれなくて良かったと
心から思っている事だけは、心が読めない俺だって分かる。

拍手が、生け贄を差し出す儀式に感じるぜ。

つてか、俺たちみんなジャンケン弱いんだね……。

そのお陰で、発狂しなくて済みそうだが。

「……」

「？ ……どうかしましたか？」

そう言つて、目の前に居る理緒ちゃんが頭を傾げる。

「いや、まさか理緒ちゃんとペアになるなんてな、と思ったただけだ」

女装なんかしなくてはならなくなって気が参っているのに、次の漫
才のペアを籤引きで決める事になり、その結果、理緒ちゃんにな
ってしまった。

いや、別に理緒ちゃんが嫌いな訳では断じてない。

ぶっちゃけるなら、可愛いし、嬉しい。

だが、それは前の屋上での件がなければの話だ。

屋上での件があるから、嬉しいがってもいられない。

またいつ、殺されかけるか、分からないし。

「別に殺しませんよ」

理緒ちゃんは、俺の心でも読んだみたいにな、そう俺に返してくる。

「私がして欲しいのは、望むのは、自殺、であって、他殺、や、事故死、ではありません」

そう、話を続けた。

周りのクラスメイトにも理解ちゃんの声は届いてはいるはずだが、漫才のネタ合わせだとも思っているんだろう。

ツツコミをくれたのは、誰もいなかった。

「はい。そろそろ時間だから、話し合いは放課後にして、席に着いてくれ」

智夜先生の合図に、クラス全員が席へと戻る。

「では最後だ。うちのクラスの出し物を決める」

出し物か……もう何でもいいよ。

女装に比べたら、もう何だってするさ。

智夜先生が、生徒に小さい紙を渡し始めた。

「それに、自分がやりたい出し物を書いてくれ」

前の席の生徒から送られてきた紙を受け取り、一枚を自分のテーブルに置いて、残りを後ろの席の生徒に渡す。

「多数決にするつもりだから、そのつもりでな」

多数決か……なら、フザケて書いてもいいだろう。

多数決なら、フザケて書いたものが当たる確率なんて、それこそ黒歴史の選ばれてしまう確率よりも低いから。

「よし！」

俺は書いた。

「コスプレ喫茶」と

放課後、俺は談話室に部活のやっていない悠斗と拓夢の二人を連れだしてやってきた。

「何だ？ ゲームのことなら全員が揃っているときに決めた方がいいんじゃないか？」

「でも、部活もあるから、全員が揃えるのは土日だけだよ？ 平日じゃ、六時からになるし」

拓夢の提案に悠斗が返事を返す。

明確には言っていないが、その言葉には否定が入っている。

悠斗は、俺だけで決めてもいいと思っているようだな。

「別に六時からでもいいだろ」

拓夢が喰いかかる。

「それは、そうだけど……」

悠斗が折れる。

拓夢はみんなで決めたいんだな……。

「なら話は終わりだな。俺はゲーム……じゃなく、ちょっと用事があつて……」

と思ったけど、違ったみたいだ。

拓夢は単に話を早く切り上げて、ゲームをしたいだけだ。

「実は……」

でも、今回悠斗と拓夢を誘って談話室に呼んだのは、ゲームではない事を告げる。

「違うのか？　じゃあ、他になにかあるの？」

「用がなかったら呼ばないって」

「……そうだな」

俺の言葉に拓夢が賛成する。

拓夢は早く切り上げたいみたいだ。

「どんなようなの？」

悠斗が聞く準備が出来ているようだ。

「もうすぐ九月五日だが、五日は桜花の誕生日なんだ」

俺は拓夢と悠斗を連れ出した理由を述べる。

「そうなんだ……なんかプレゼントしないとな」

拓夢は誕生日だと分かったと、さっきよりは帰りたい症候群から抜け出したみたいだ。

「僕もプレゼント用意するよ」

悠斗もプレゼントを用意してくれると言ってくれた。

「ありがとう。実は俺もプレゼントを渡したいんだが、なにを渡せばいいのか分からなくてさ」

「ああ……お前、そういうの鈍そうだもんな」

俺の言葉に拓夢が何か納得している。

別に鈍い気なんかないんだけどね。

ただ、確かに女子にプレゼントなんて渡した記憶がなく、何を渡したらいいか分からないから、アドバイスを聞こうと思って二人を連れ出しただけだ。

つまり、鈍いのではなく、経験がないだけ。

俺は凄いテクニシャン……嘘です、すいません。

ただの、草食系男子です。

「プレゼントは気持ちが込もっていたら、なんだって嬉しいと思うよ？」

悠斗のアドバイス……気持ち。

なるほど、物ではなく、気持ちが……なるほど。

「だからって要らない物を贈っても邪魔になるだけだよ」

確かに……拓夢の言う事にも一理ある。

「やっぱり、桜花の好きな物でいいんじゃない？」

拓夢のアドバイス……桜花の好きな物。

なるほど、好きな物を貰って嬉しくないはずはないからな。

「まあ、不安なら他の奴に聞いてみたらどうだ？」

そうだな……。

「そうするよ。ありがとう」

六時過ぎ。

「恭介？ どうしたんだ？」

グラウンドでサッカーの部活が終わった直後の光輝に尋ねた。

「プレゼント？ そうか、桜花が……」

「うん。だけど、プレゼントはなにがいいか、よく分からなくて」

「そうだなあ……やっぱり、女子のことは女子に聞くのが一番じゃね？」

光輝のアドバイス……女子に聞く。

なるほど、確かに女子の方が好きな物を知っている可能性が高い。

俺にアクセサリとかぬいぐるみって言われても、よく分からないしね。

「なるほど、参考にするよ」

「おう！ 俺もプレゼントするから、被るなよ」

俺は光輝に手を降り、別れた。

「プレゼントですか？」

俺はゲーム部にやってきた。

優希ちゃんに意見を聞く為だ。

「うん。ってか、ゲーム部ってなにやっているの？」

こんな部活が、部活として成り立つのだろうか？

いや、もしかしたら、凄い何か……そう何か世間に貢献しているのかもしれないし、ゲーム部と言う名前だけで判断するのはいけない事だ。

それこそ、オタク差別と何も変わらない。

「見てみますですか？ もう、誰も居ないので入っても大丈夫ですよ？」

「そう？ それじゃあ、お邪魔されようかな」

俺は優希ちゃんの好意を有り難く受け取り、部屋に入ってみた。

「おお」

無意識に声が漏れたね。

「どうですか？ まさに地上最後の楽園ですっ」

優希ちゃんが力説するのも頷ける。

部室は決して広いとは言えない……いや、パソコン等の機材があるから狭く見えるだけで、実際には教室くらいはありそうだが。

中には、あらゆるゲーム機が置いてあった。

Wiiやファミリコン・ピュター、メガドライブ等のゲームをしない人でも知っている有名なゲーム機から、ビデオカセット・ロツクやカセットビジョン、ぴゅう太等のマイナーなゲーム機もある。

「すごい……」

まさに、楽園！

ヤベエ、入りたくなってきた……。

「しかもですっ！ なんとゲーム開発も可能なのですっ！ 授業のゲーム開発など目じゃないのですっ！」

「……」

圧巻だった。

確かに、ここはパラダイスだ。

部室が輝いて見えるぜ。

「……あ」

「どうしかったですか？」

俺の呟きに、優希ちゃんはきょとんとしてこちらを見ている。

「圧巻されて忘れるところだった。プレゼントの話で来たんだよ」

すっかり、ゲーム部が羨ましくて忘れる所……いや、実際に忘れてたが。

ゴメン桜花……不覚にも俺の頭が、ゲーム 桜花になってたよ。

「やっぱり、BLですっ！ 是非、モデルに……」

「いやいや！ あげるのは桜花だから！ そんなのあげられないよ！」

「……そうでした。確かに優希の誕生日は、八月十八日でしたです」

八月十八日……もう、過ぎてしまったのか……。

「悪いな、祝ってやれなくて。知っていれば、プレゼントを贈ったんだが」

「べ、別にいいですっ」

優希ちゃん……やっぱ、いい奴だなあ。

来年こそは必ずプレゼントを渡そう。

香菜ちゃんにも、二人一緒に。

「プレゼント……健全な女子ならアクセサリーとかが、いいんじゃないですか？」

優希ちゃん……自分が健全じゃない自覚あるんだ……。

「アクセサリーなら、当たり前外れないと思いますです」

優希ちゃんのアドバイス……アクセサリー。

なるほど、確かにアクセサリーなら、当たり前外れないか……。

「ありがとう。参考にするよ」

「はいです」

「はあ？」

優希ちゃんと別れた俺は、部室から帰宅途中の香菜ちゃんに会った。

まあ、実際には待ち伏せしてたんだけど。

「プレゼント？　なにがいいかな？」

「……」

香菜ちゃん……機嫌悪いみたいだ。

「なんか……俺、悪いことしちゃった？」

「そんなことないわ。あたしが、自分自身が悪いだけよ。オーディション落ちたの」

あー……カラオケの時の、落ちてしまったんだ……。

「プレゼントだっけ？ そうね。あんたを裸体にして、リボン巻いて、自分がプレゼントだって贈ったら？」

香菜ちゃんのアドバイス……俺が裸体になってリボン巻いて……。なるほど、……って。

「却下だあああっ！」

叫んだね！

何だよ、エロゲーの女の子みたいな事はッ！

「嘘よ。叫ばないで頂戴……本人に聞けばいいじゃない。今は、本人に好きな物を聞くって普通よ？」

そうなんだ……。

「よし！ 分かった、ありがとう」

「ふん……」

香菜ちゃんが、帰路に着こうと、歩き出したので、背中に向けて一言、

「来年は、お祝いするから」

と言つて、俺も歩き出した。

後ろから、「ふああ……ありがとう……」と小さく聞こえたが、恐らく気のせいだろう。

「きよ、きよ、恭ちゃん！ プレゼントって!?!」

「ああ、桜花の誕生日にサプライズプレゼントするから、好きな物……」

気付いてしまった……。

サプライズプレゼント……本人に聞いたら、無意味じゃないか！

俺、馬鹿だ……。

いや、仕方ない……。

そう、仕方ない……。

こう言うものに俺はアレなんだ。

鈍いのではない、経験がないだけ。

Chapter 7 鈍いのではない、経験がないだけ（後書き）

知りたくないから

幸せでいたいから

僕は 行動を起こした

扉に鍵を掛けた

Chapter 8 プレゼント（前書き）

僕に贈られたプレゼント

それに僕は気付けなくて

こんなに近くに居るのに

ああ 僕は盲目の少年

Chapter 8 プレゼント

「九月四日……」

俺は数日前のように携帯電話の待ち受け画面を見ながらそう呟いた。
いよいよ明日は桜花の誕生日だ。

本当ならサプライズプレゼントのはずだったが、経験がないばかりにみんなにプレゼントは何がいいのかを聞いているうちに、経験がないばかりに本人に、桜花にも聞いてしまった。

……まあ、香菜ちゃんのアドバイスを実行しただけなのだから、俺の過失……ミスでは断じてない。

結局、ばれたのでサプライズではなくなってしまったが、みんなもプレゼントを用意して一緒にする事になった。

一緒に祝うってだけで、プレゼントをみんなも用意している事は言っていないけど。

桜花は「そんなの悪いよ」とか「気持ちだけでうれしいから」と謙遜していたが、無理矢理押し通した。

だが、桜花にサプライズプレゼントがばれる原因となった香菜ちゃんのアドバイスは失敗したと言わざるを得ないだろう。

何故なら、桜花にプレゼント何がいいかと聞いても、「恭ちゃんの選んでくれるものならなんでもうれしいから……」と言って、教え

てくれないからだ。

いつもから余り主張しない桜花の性格が裏目に出てしまったと言っている。

余り主張しないなら優希ちゃんもそうだが、優希ちゃんはアッチ系になると饒舌になるからな……。

「桜花にもそういうもの、あるのかな……」

そんな事を考えていると、またいつものように、扉を叩く音が聞こえた。

噂すればなんとやらって奴だな。

「恭ちゃん、起きてる?」

「ああ。今、行く」

あー、プレゼントどうしよう……何としても今日中に聞き出さないと、間に合わない。

店の時間もあるから今日の午後六時がタイムリミットだ。

今は七時三十五分。

扉を開けたら、目の前に居る敵と勝負だ。

必ず、勝利してやるぜ。

俺は決意を胸に扉を開けた。

「おはよう恭ちゃん」

桜花の笑顔が現れた。

ミッションスタートだ！

残り時間 十時二十五分四十九秒

一時間目。

「では、続きからだ。ページを開け」

浜田先生の保健の授業だ。

……授業中には桜花にプレゼントは何かいいか、聞き出す事が出来ない。

かなりのタイムロスになる。

「く……」

授業は六時間目まであり、一時間分の授業は五十分……これは、十分休憩もアタクしないと厳しいな。

まさか、授業中にメールを送るなんて芸当は俺には出来ないし、万が一にも先生にバレたら携帯電話は放課後まで没収されてしまう。

もし、俺ではなく桜花がバレたら迷惑以外の何物でもない。

「人体における全水分量はどうなっているか……理緒、答えてみよ」

浜田先生に指名された理緒ちゃんは、席を立ち答える。

「男性六十%、女性五十%、乳児七十五%です」

「正解だ」

理緒ちゃんは難なく、完璧に答えて席に座る。

よく考えると、席立って外したらめっちゃ恥ずかしいな。

「では正常血圧値を、光輝答える」

「え！ えっと……」

指名された光輝は席を立つが、理緒ちゃんと違い直ぐには答えず、考えている。

「どうした？ この程度、常識ではないか」

いや、常識ではないと思うが……案外知らない人も多いんじゃない？

「確か……最高値百三十mmHg未満、最低値八十五mmHg未満
だっけ？」

光輝は自信なさげに答える。

「なぜ疑問系なんだ。当ってはいるがな」

「よかった……」

光輝は安堵して席に座る。

「じゃあ次は」

キンコーンカンコーン

ずっと聞き慣れているチャイムになった。

ゲームじゃないんだから、チャイムの音がどんどん歪んでいったりはしない。

やっと、一時間目が終わった。

だが、漸く本番だ。

「よし！」

俺は桜花と戦う為、勢いよく席を立った……立ったはずなのに、その勢いはすぐに収まる事になってしまった。

「恭介、お前はどんなプレゼントにしたんだ？」

今からそれを決めようと出陣しようとしていたのに、それを殺した光輝が話し掛けてくる。

「貴様が……プレゼントを遠退かしたんじゃあ！」

「うお！ どうしたんだよ！？」

「……間違えて、笑われればいいのに」

「リアルトーンでヒドッ！」

そう言つて、光輝は自分の席に戻っていった。

キンコーンカンコーン

「チツ……時間が……」

残り時間 八時一分三十三秒

二時間目。

「数学を始める。教科書を開いてくれ」

担任の智夜先生による数学の授業だ。

「微分・積分の問題だ。 $\cos(x)$ dxを、では恭介、求めよ」

……あ、俺が呼ばれたのか。

俺は席を立ち答える。

「 $\sin(X) + C$ 」

「正解だ」

よし！

俺は心の中でガッツポーズを決め、席に座る。

間違ったら恥ずかしいもんな。

まあ、女装に比べれば何ともないが。

「あ、そうそう。クラスの出し物が決まった」

決まったんだ……俺は何て書いたんだっけ？

……あ、コスプレ喫茶だ……今思うと先生見たんだよな……恥ずかしいぜ。

名前を書いた訳じゃないから、自分だってバレないのが唯一の救いだな。

「多数決の結果、コスプレ喫茶になった」

「「「……」」」

え……。

クラス中が静寂に包まれた。

いや、授業中に喋っている奴なんていないからもとから静かではあるんだけど……その、なんだ、凍り付いた静寂って言うか……そんなものだ。

「……どうした？ 半数以上がコスプレ喫茶をやりたいのだろう？ 先生としては同じ趣味を持つことはいいことだと思っぞ」

「『『……』』」

半数以上って……俺はふざけて書いただけなのに……マジかよ……。

キンコーンカンコーン

先生の衝撃的な発言からあつという間に時は流れて、再び十分休みとなった。

動揺してばかりはいられない。

俺には時間がないからな。

俺は勢いよく席を立ち上がる……はずだった。

「なあ……… 恭介、話があるんだ」

「拓夢………」

「え？ なんで睨んでるの!?!」

「別に、睨んでねえよ。で、なんのよう？」

「いやいや、明らかに睨んでるだろ」

しつこけえな……。

「睨んでないニヤン！ そんなことないピョン！ なんのよう？」
「わすか？」

「……まあ、スルーさせてもらつよ。昼食の時に話すよ、じゃ」

そう言つて、拓夢は自分の席に戻って行つた。

キンコーンカンコーン

「……」

また、ダメだった……。

でも、まだチャンスはある！

アクティブに考えるならまだ、二回邪魔が入って失敗しただけで、まだ二回以上出陣するチャンスが残っている。

大丈夫だ、問題ない。

残り時間 六時五十九分五十二秒

三時間目。

「パソコンはみんな立ち上げましたか？」

敏彦先生による情報の授業だ。

「では、ゲームを開始してください」

お、そうだ！

ゲーム制作なら、同じグループの桜花に近付ける。

好きな物を聞き出すチャンスだ！

「よし……」

俺は席を立とうとした瞬間、敏彦先生の非情な宣言が。

「なお、グループを作っている人もいるでしょうが、今日は自分が作った企画を書いてもらうので、自分の席でお願いします」

なにーっ！

自分の席じゃあ、近付けないじゃないか。

「く……」

俺は仕方なく、企画書の作成に乗り出す。

「グループで作る人は企画書に、その胸を書いといってください」

昨日、みんなと話し合って結局、Key作品のような泣きゲーを作ることになった。

まあ、読みゲーになるから文章量は増えるだろうが、比較的簡単に出来るので、質の良い物が完成出来ると見込んでの事だ。

悠斗が作ればプロ顔負けのCGが作れるだろうし、拓夢が作ればネットで神曲と呼ばれるようなBGMを作れるだろうしね。

キンコーンカンコーン

よし！

今回こそは桜花のもとへと行くぞと、俺は席を立つ……立ったのだが……。

「……」

非常にトイレに行きたい。

ああー、今日は一時間目も二時間目も邪魔が入って動けなかったから、トイレにも行っていなかった。

「……」

桜花は自分の席にいる……居るけど！

俺は……向かった。

トイレへ。

大丈夫だ、昼休みに話し掛ければ問題ない。

キンコーンカンコーン

残り時間 六時零分八秒

四時間目。

「国語を始めますよ」

正治先生による国語の授業だ。

「では前回の続きから誰かに読んでもらうとしようかな」

正治先生はそう言つと、生徒たちを見渡す。

一瞬、先生と目が合った気がしたが、当てられる事はなくほつとする。

別に、当てられても困る事はないけど、やっぱり朗読はちょっと恥ずかしかったりする。

間違える事はないだろうけど、噛んでしまったりしたら赤面だね。

「じゃあ……智紀くんを読んでもらうかな」

「はい……」

呼ばれた智紀は、俺たちとは別に仲が良い訳ではないが、一つ共通点がある。

何を隠そう俺たちと同じ、黒歴史……女装しなければならないメンバーに選ばれた憐れな一人だ。

智紀は席を立つて、朗読を始めた。

「さて、前の章で私は価値観の相違についての例をあげた。では」

キンコーンカンコーン

四時間目の授業が終わった。

昼休みだ……つまり、漸く接触のチャンスが生まれた訳だ。

「何食べるんですか？」

そう言つて、優希ちゃんが俺が持っている食券を覗いてくる。

「牛丼、玉ねぎ抜き」

「玉ねぎ、嫌いなんですか？」

「嫌いだね」

「その気持ち、分かるぜ」

拓夢が俺の言葉に入ってきて、賛成してくれる。

「やつぱ、野菜は邪道だ。野菜は身体に良いって言うけど、別に食わなくても死なねえし！ プロスポーツ選手だって偏食でも活躍している人もいるし、声優だって偏食でも活躍している人もいるんだから！」

うーん……別に野菜全てが嫌いな訳でもないんだけど……まあ、好きではないけどね。

「ほら、リオンだって野菜嫌いだけど、人気じゃん」

二次元キャラと一緒にしなくても……絶対野菜嫌いはい関係ないと思うよ？

大体は見た目と声優のお陰なのだと思いますが。

「そつえば、桜花は？」

周りを見渡しても、桜花が居ない事に気付く。

いつもみんなと一緒に食べている訳ではないが、桜花とは絶対一緒に食べていたのだから……。

「桜花？ 桜花なら用事があって、今日は来ないらしいよ」

なん……だと……。

それでは、欲しいプレゼントを聞けないじゃないか。

それでは、欲しいプレゼントを聞けないじゃないか。

……大事な事なので、二回言いました。

「……」

何でよりによって今日と言うこの日に居ないんだよ……。

あー、時間だけが、無情に、非情に過ぎて行く……。

結局、俺は拓夢と優希ちゃんと三人で昼食をとっている。

「恭介さん！ 拓夢さん！」

いきなり、優希ちゃんが俺と拓夢の名前を呼んだ。

「な、なに？」

「どうした？」

俺と拓夢は吃驚しながらも、優希ちゃんの方を見て、優希ちゃんの言葉を待つ。

「恭介さんと拓夢さんは、ニコ動で投稿して凄い再生数誇ってますねっ」

「聞いたの？」

「はい！ いい曲だと思いますです！」

「そうか……ふふ」

拓夢が喜ぶ。

コメントで「好きだ」とか書かれていても、やっぱりこうやって実際に言われる方が断然嬉しいね。

「そこで……相談なんですけど……」

優希ちゃんが相談……何だろうか？

「二人を題材とした同人誌を描かせて貰えませんか？」

「同人誌？」

拓夢が首を傾げる。

同人誌……アレだろ、コミケとかで売られてる……え？

「優希ちゃんは同人誌描いてるの？」

「はいですっ！ 優希はコミケで同人誌を売っているのです」

マジか……絶対人混みとか苦手そうなのに。

ってか、行った事ないから詳しくは知らないけど、めっちゃくつち

や暑いらしいね。

熱気で。

でもまあ、一度くらいは行って見たいものだな。

オタクの端くれとして。

「なんで俺らの同人誌を？」

「人気Pだからじゃないですかっ！ しかも二人でっ！」

「……」

ん……何か、嫌な予感がプンプンとするんだが。

「その二人が一生懸命熱く、時にぶつかり、抱擁しながらも、一緒に作りあげる……素晴らしいじゃないですかっ！」

優希ちゃんが目を輝かせながら語る。

「……」

拓夢が呆気にとられている。

そう言えば、優希ちゃんが腐女子だって知っているのは、俺と悠斗だけだったな。

「で、どっちが攻めでどっちが受けなんですかっ？」

優希ちゃんが質問責めをしてくる。

攻めとか受けて……メイド喫茶で悠斗と決闘してた時の攻めと受けて、あの時はどっちが攻撃側か守備側かって事かと思っていたけど、違っただ……。

「……優希って、二重人格？」

拓夢が戸惑っていた。

「優希ちゃん。俺たちを同人誌に載せるのは、やめてもらえるかな？」

俺がそう言つと、優希ちゃんは凄く残念そうに引き下がってくれた。

「二百冊は固いと思ったのに……残念です」

「……そうだ、拓夢。なんか、俺に話があるんじゃないっけ？」

「ああ、そうそう。忘れてたよ」

忘れてたのかよ！

拓夢が話し掛けて来なかったら、桜花に接触出来たのに！

あ……一様後でメールしとくかな。

どうせ、無駄だろうけど。

「楽曲のことだけだよ……」

「楽曲？ 三作目行く？ 今作ってるのはまだ完成しないから、昔作った奴でよければ……」

「三作目も出したいけど、違うよ」

「じゃあ、なに？」

「俺らの楽曲をカラオケに配信したい」

……な、に……。

「マジで？」

「マジで」

「素晴らしい提案だと思いますですっ」

「でも確かに……カラオケ配信されれば印税がどっかんどっかん付いてくる」

歌われれば歌われる程、金が降ってくるー！

「恭介さん。残念ですけど、印税は入ってきませんです」

「なん……だと……」

「大体のPはもらってませんです。恭介さんたちがもらえる確率はないに等しいです」

「マジで」

「マジです」

……まあ、入るかどうかはも分かんねえけど、取り敢えずリクエストだけはしてみる事にした。

どうなるかは分からないけどね。

残り時間 四時二十九分三十三秒

昼休みが終わり、午後の授業……も流れ星のように流れて終わった。

結局、話し掛けれずにね。

メールの返信は着たけど、やっぱりの文面だったし。

「……ここからが勝負か」

残り時間は、約三時間三十分。

聞き出すには十分な量が残っている。

明日と言う大切な日に、俺だけ何も準備しない訳にはいかない。

何としてでも聞き出さなければ……。

「よし！」

今度こそと、俺は桜花の席の方を見るが、桜花はすでに居なかった。いつもなら、向こうから来てくれるのに、今日に限ってなかなか会えない。

朝の迎えに来てくれた時は、教えてくれなかったし……。

だが、必ず聞き出して見せる！

俺は席を立ち、桜花を探し始めた。

残り時間 零時十七分四秒

「……」

一言で言つなら、桜花が見つからない。

そのまま、質のない時間だけが、無情に、非情に流れていく。

電話をしても、メールをしても返信が来ない。

「……どうして」

本当にどうして……いつもなら、呼び出したらすぐに出てくれるのに、今日に限って俺を焦らす。

「ねえねえ。ちょっと……」

俺が意気消沈して廊下に寄り掛かっていると、香菜ちゃんが話し掛けてくる。

「なに？」

「あんた……プレゼントは買ったの？」

「まだ……」

「なにやってるの！ バカじゃないのっ！」

「いや……ゴメン」

何か……押されて謝ってしまった。

「ほら、早く話しかけてきなよ」

「あ、ああ……でも……」

その桜花が見つからないんだよ。

「まさかと思うけど桜花がどこにいるか、知らないわけじゃないよね？」

「……知ってるの？」

俺の言葉に香菜ちゃんが呆れたように溜め息を吐く。

「はぁ……いい？ 桜花はクラス委員長よ？ 知らないわけないよ

ね？」

クラス委員長？

あ……そう言えばそうだったな……すっかり忘れてたよ。

「ちょうど、会議も終わった頃じゃない？　呼び出しておいであげるから、屋上に行きなさい」

「あ……ありがとう」

「べ、別に……たいしたことじゃないわ」

残り時間　零時六分四十二秒

「……相変わらず、綺麗な景色だな……」

会議か……だからメールも電話も通じなかった訳か……桜花は礼儀正しいからな、マナーモードじゃなく電源自体を落としているんだろう。

……香菜ちゃん……俺がプレゼントまだだって気付いて話し掛けてくれたのかな……。

ガチャ

「恭ちゃん……」

俺が考えているうちに、屋上に桜花がやって来た。

「桜花……」

「恭ちゃん、話ってなに？」

「プレゼントのことなんだけど……」

「プレゼントなんてそんな悪いって。本当に気持ちだけで嬉しいから」

まあ、その返事は予想済みさ。

だから、今日は違う一手を打って、見事桜花を討ち果たそうと思つ。

「実は……みんなもプレゼントを用意してくれているんだ」

「ええ！？」

俺の言葉に桜花は驚く。

今だ！ 意義有りの勢いで押しきる！

「だから……俺だけ渡さないわけにはいかない。ね？ 俺を助ける
と思つて欲しいもの教えて？」

「……」

桜花が口ごもる。

そして、暫しの静寂の後、桜花が口を開く。

「本当に、その気持ちだけで嬉しいんだよ？」

それじゃあ、意味ないと言おうとしたが、先に桜花がまた文字を紡ぐ。

「だって、私にとっては本当に今、この時間こそがプレゼントみたいなもので……恭ちゃんと一緒にいれるだけで、本当に本当に嬉しくて、それ以上なんて要らないよ……」

「桜花……」

「それ以上はもう我が儘になる」

我が儘なんて……ただ、俺と居るだけでいいなんて……。

本当に桜花は、いい奴だなあ……。

「でも、明日は鼓動が始まった日じゃん。その日ぐらいは子供みたいに我が儘になってもいいと思うよ」

「じゃあ、今日は我が儘は言えないの？」

「え！？ いや……」

俺がテンパると、桜花は笑いだした。

「ふふ。じゃあ、恭ちゃんに甘えて今だけ我が儘になるね」

「お、なにがいい？」

「今度……今度でいいから、一緒に水族館に行きたいな」

「そんなことでいいなら、もちろんOKだよ」

俺は桜花にそう伝える。

「嬉しい……」

ミッションクリア！

残り時間 零時零分零秒

「景色、綺麗だな」

「ホント……昔みたい……」

俺たちは暫く、屋上からの景色を眺めていた。

Chapter 8 プレゼント（後書き）

大人になれる場所

綺麗な景色が見える場所

僕だけのモノだから

証を建てよう

Chapter 9 二人（前書き）

二人の間の中で

腕を引っ張られて

一人は腕を放して

一人は腕を切り落とす

Chapter 9 二人

今日は狭間の日だ。

一週間前には桜花の誕生日と言う、大きなビッグイベントの日があった。

そんなビッグイベントも無事成功し、一息つけると思ったら大間違いだ。

一週間後には学祭と言う、またまた大きなビッグイベントが待っている。

俺の生涯の黒歴史になるであろう、女装と言う公開処刑の日が。

『大丈夫だよ！お兄ちゃんなら絶対大丈夫っ！』

目の前に居る、俺の妹が応援してくれる。

まあ、俺の声は届かないんだけどね。

俺と妹の間には次元と言う壁が存在していて、誠に残念ながら、その存在を見る事しか出来ない。

あー、タイムマシンで未来に行けたなら、二次元へのパスポートとか売ってないかな……なんて夢見ながら、俺はマウスをクリックした。

『絶対っ！ お兄ちゃんは笑われるよっ！』

そうですねっ！

笑われると俺も思うよ……嘲笑の意味でねっ！

「……妹が悪いんじゃない。妹は応援してくれているんだから。違う意味で」

悪いのはそう、全てシナリオライターのせいに決まっている。

『高く高く、手を伸ばしたら、お兄ちゃんなら星だって掴めるよっ』

いやいや、無理だから。

例え、東京タワーから手を伸ばしても届かないって。

まあ、単なる比喻表現なんだろうけどさ。

「星……儚い夢の跡地……」

『お兄ちゃんっ！ 頑張ってね』

ああ、妹よ、任せておけ。

……俺と心境が被るから、感情移入しやすいと思って買ったけど、実際どうすべきかな、漫才……。

『行ってらっしゃい』

このゲームの主人公恭介が可愛い妹の見送りを背に玄関の扉を開け

る。

すると、家の門の所に、三人の少女が待っていた。

『き、恭介さんっ！ わ、私を相方に選んでくださいっ！』

そう言っで最初に口を開いたのは、左に居る眼鏡を掛けたいつも大人しい図書委員……と言っ設定の同級生だ。

『恭介先輩　うちと一緒に漫才せえへん？　てか、しましょ』

そう言っで次に口を開いたのは……まあ、CGだから口動いてないけど……右に居る髪をポニーテールにしていつも元気な一年後輩の少女だ。

『べ、べつに嬉しくなんかないんだけどっ！　仕方ないからアタシが特別に相方になってあげるわ！　感謝しなさいっ！』

そう言っで最後に口を開いたのは、真ん中に居る勝ち気な……テンプレ的なツンデレの幼馴染みだ。

……うわ、選択肢が出た。

- ・同級生と漫才をする
- ・後輩と漫才をする
- ・幼馴染と漫才をする

「……」

羨ましいけど、漫才大会当日に相方を選ぶのはどうよ？

『お兄ちゃんっ！ いたっ！ よかった……』

アレ？

さっきまで玄関で見送りをしてくれていた可愛い妹が外にまで出て来てくれた。

わざわざなんだろう？

『はいお兄ちゃん。お弁当忘れてたよ』

そう言って天使の笑顔でお弁当を渡してくれた。

マジ天使や……リアルで居ないのがめっちゃ残念だ（涙）。

「……」

あー、俺、理緒ちゃんとかだもんなあ……真面目そうな理緒ちゃんとなら、正当漫才かな……それともギャップを狙って理緒ちゃんには犠牲になって貰おうか？

俺を殺そうと……死んで欲しいと望んでいる罰としては、そのくらいは許されるべきだ。

『早く選びなさいよっ！』

『恭介さん……お願いしますっ！』

『恭介先輩 うちと一緒に頑張ろ？』

考えに耽っていたら、ゲームに催促されてしまった。

つか、選択肢を押さないと台詞吐くんだ……知らなかった。

「……押さなかったら、他の台詞も吐くのかな？」

と思いついた俺は、敢えて選択肢をクリックしないで放置してみる。
すると

『まさか、寝落ちじゃないでしょうねっ！』

幼馴染みに怒られてしまった。

と言うか、ゲーム内的には朝なのだから、完全にメタ発言じゃないイカ？

おっと、ツツコミを入れたら、イカ娘みたいな語尾になってしまったでゲソ。

『分かっていると思うんやけど、この作品の登場人物はすべて十八歳以上やで』

……じゃあ後輩よ、お前は留年してるんか？

『早く選べよチキン野郎！』

っ！

絶対お前そんな事言うキャラじゃないじゃん！

制作者の遊び心って怖いぜ。

『グフフ……早く押すんだお』

っ！？

だ、誰だ！？

誰の声なんだ……この気持ち悪いキモオタのような声は！！

制作者の遊び心と言う名の悪戯か？

いや……制作者からの「早く選べよ、クソ野郎」と言う心の声だろう。

「……」

まあ、これ以上待つのはなんか怖いので素直に真ん中のキャラクターを選んだ。

『ア、アタシ？ ……ありが……当然よねっ！』

勿論、当然だよ。

俺は眼鏡に萌えないので論外だし、元気な女の子は嫌いじゃないけど、ツンデレには勝てないに決まっている。

でも、属性の頂点はヤンデレに決まっているけど。

そう言えば、CGには映ってないけど、主人公の後ろに妹が居るんだよね？

ずっと天使の笑顔で、この長い沈黙を見ているのかな？

リアルだったら絶対に「早く行けよ、ゴミカス」と心の中で思われてしまうんだろうな。

二次元のキャラクターに心がなくてよかったぜ。

『っ……………！』

あ、同級生が目頭に涙を浮かべながら走ってどっか行ってしまった。

『まあ、恭介先輩がうちを選ばないのは、分かっていたんですけど、やっぱり諦めきれなくて……………し、幸せにな』

後輩も走ってどっかに行ってもうた。

「グフフ……………」

あ……………キモオタのような台詞を吐いてしまった……………誰も聞いてなくてよかったぜ。

二次元へ声が届かないって、いつもは悲しいけど……………万が一、もし聞こえていたのならどうなるんだろうか？

二次元の彼女がもしも、もしもこっちの世界を見る事が出来たなら彼氏の顔とか見て、「下手こいたー」とか言うのかな？

まあ、俺はブサイクじゃないから、「下手こいたー」とは言わせねえよ！

コンコン

桜花が来たようだな。

俺はパソコンの電源を落とし、玄関へと向かう。

あ……セーブしてねえ！

「……下手こいたー」

昼休み。

俺は今、更衣室に居る。

理由は泣きたくなる程、簡単だ。

服装の寸法があっているかどうかの確認である。

当たり前だが、男子用の更衣室だから女子は居ない。

まあ、隣に壁の奥には居るんだけどな。

「チツ……なんで僕がこんな屈辱的なことをしなければならぬ」

そう俺たちの気持ちを代弁して口に出したのは、同じクラスの被害

者の一人“陣内智紀”。

「そうだよなー。はあ……まったく一週後が辛いぜ……」

光輝がそう呟くと溜め息を吐いた。

「僕なんて考えるだけで高熱で倒れそうだよ」

悠斗はそう言いながら、制服を脱いでいく。

あー、女の子だったら間違いなくCG有りの萌えシーンになるんだろうなー。

「いや、実際高熱に魔された方がマシかもしれないねえぜ？　そしたら、学祭は寝てるだけでいいんだからな。それで、気が付いたら黒歴史は他の生徒が犠牲になってくれてるさ」

確かに……高熱出たなら、ルート分岐出来るかもな。

夢覚めたら、なにもなく、まるで悪い夢だったみたいにな。

「まったく……学祭なんて僕は要らないと思うね」

智紀が愚痴を吐く。

学祭……選ばれなかったなら、めっちゃめっちゃ楽しめたんだろうけど、女装している奴を嘲笑って……本当に当事者になって分かって奴だな……本人たちはこんなにも辛いって。

「まあ、負けたんだから仕方ないよ。諦めきれないけど、諦めて晒

し者のモルモットを演じようぜ」

俺は嘲笑気味にそう呟きながら、俺用に用意された服を意を決して袖を通した。

「大体、なんでこんなことをしなくてはならないんだ！ 僕の人生の汚点にしかない！」

うん。

それには、素直に賛成だよ。

「人の価値は頭なんだ。どれだけ賢いか、知力があるか。こんなことは腕力しか脳のない塵芥にでもやらせておけばいいものを……。それこそ、嘲笑ってやったものを！ 無能にはそんなバカなお似合いとねっ！」

智紀が力説している。

人の価値は知力か……どうなんだろう？

そんなはずないと思う自分と、そうだと思っ自分が居るな。

まあ、どっちにしろ……女装しなければならない事に変わりはないんだけどな。

「はあ……」

寸法はあっているみたいで、ピッタリだった。

「コスプレする人たちはよく恥ずかしくないな」

不意に光輝が、独り言のようにそう呟いた。

「確かに、コスプレイヤーの人たちのことなんてなんとも思っていないかったけど、今なら良くテレビに姿を映せたと賞賛を贈りたいね」

「だな。俺なら恥ずかしくて、例え普通の姿でも避けちゃうな」

拓夢の言葉に俺はそう返事した。

今思えば、凄い勇気の持ち主たちだぜ。

無謀とも思える絶対似合わないアニメキャラクターやゲームキャラクターのコスプレをして、堂々と人前に出る事が恥ずかしくないのはマジでスゲーとしか言いようがない。

寧ろ、見せびらしているさまは最早、神の所業！

心臓に毛が百本……いや、百兆本は刺さっていても決して可笑しくなど断じてないし、寧ろ当然と驚かないくらいだ。

「まったく……ブフッ」

「おい！……うつ」

ヤバイ……吐きそうだ。

キメエ！

友達を見てキメエとか思うのは、友達として失格だと思っけど、これは仕方ないって！

「……メイドガイ？」

「悠斗！ それ禁句！」

「あ……ゴメン」

ダメだ！

誰の目も見れねえよ！

見たら、笑ってしまう！

みんなも同じらしく、ロッカーを見ている。

「……ってか、ちょっといいか？」

目を合わせないで、ロッカーに向けたまま、光輝が話し掛けてきた。

「どうした？」

「クラスの出し物、コスプレ喫茶だよな？ まさかとは思っけど、クラスでもこの格好じゃないよな？」

「」「」……「」「」

長い沈黙が訪れる。

「だ、大丈夫だって！ 誰もメイドガイなんて見たくないんだからさ！ 男子は男子のコスプレだよ！」

そんな沈黙を破って、悠斗が声を発する。

その声は震えている。

「そうだな！ そうに決まっている！」

拓夢が悠斗に賛同し、みんなも賛成し始める。

‘そうだ’ではなく、‘そうであって欲しい’、と言う意味で、願望が入っているが。

だって、この女装は……言わなくても分かると思うが、一言で表すならこの言葉がやはりピッタリだろう。

黒歴史

午後の授業……五時間目は、情報だ。

「さて、じゃあ一週間ぶりの授業ですが、今日から本格的に作業に入ってもらいます」

敏彦先生が話している。

「では、席を移動して構わないので制作を開始してください」

漸く、ゲーム作りが、紙の上から画面の中へ移行する時がやってき

た。

昼休みの事を忘れる為にも集中しなければ。

「……」

そんな事を考えていると、メンバーであるみんなが、俺の席へとやってくる。

なんか、知らない間にリーダーにされていたんだよな……拓夢は策士だよ、まったく。

お前は作曲だろ。

心の中で「あ、今俺、上手いこと言った」と思いつつ、みんなで周りの席をくっ付けて、それぞれパソコンを立ち上げる。

「じゃあ、始めようか」

一様は俺がリーダーなので、リーダーらしく、開始の宣言を行う。

だが、みんな手が動く事はなく、光輝が「リーダー、何すればいいですか」と意地悪っぽく言ってくる。

確かに、Key作品のような泣きゲーを制作する事には決まったが、シナリオやキャラクター等は全く出来ていなかった。

「……下手こいたー」

「ぶざけてるの」「

香菜ちゃんに睨まれちゃったよ（ ; ）！

「決して心からふざけてなどはいません！」

「べ、別にそこまで力説しなくてもいいわよ……」

どうやら、香菜ちゃんに俺の誠意が伝わったようだ。

「で、実際どうするんだ？」

拓夢め……俺に責任を任せて、逃げやがって！

「恭ちゃん何でも言っていていいよ。私、頑張るから」

桜花は本当にいい奴だなあ。

そんな桜花に好きな奴が居るかは分からないけど、もし居るならそいつがめっちゃ羨ましいぜ！

まあ、それはさておきどうするか……。

ゲームに必要なのは、シナリオとグラフィックとサウンドだ。

少なくとも、この三原則が出来ていなければ、何も始まらない。

「じゃあ、とりあえず拓夢には」

ゲームなら、いやリアルでも重要な選択肢だ。

- ・シナリオを頼む
- ・グラフィックを頼む
- ・サウンドを頼む

間違えたら、駄作……クソゲーになってしまうのは、まず間違いない。

さて、拓夢に頼むのは

「BGMを頼むよ」

歌入りのは後で一緒に制作するとして、拓夢には作曲の力をフルに活用してもらって、BGMを手掛けてもらう事にしよう。

「BGMか……。任せろ！ 五曲に二曲は神曲しか作らねえぜ！」

「いやいや！ 全部神曲にしろよ！」

「分かったよ。残り二つは良曲にしよう」

まあ、二つも神曲にしろとか、残り一つはとか、色々ツッコみどころはあるけど、とりあえずは……。

「じゃあ、悠斗は」

「え！ スルー！？」

拓夢が何かほざいていたけど無視！

・シナリオを頼む

- ・グラフィックを頼む
- ・サウンドを頼む

サウンドは拓夢に頼んだから、悠斗には神の腕を見込んで

「キャラクターを描いてくれ」

「いいけど……どんなキャラ描けばいいの？」

た、確かに……サウンドとは違って細かく決めてじゃなければ、最悪使えなくなってしまう。

「まあ、それは後で決めよう。今は、背景を描いてくれ。学校を中心に」

「分かったよ」

よし！

背景で学校なら、キャラクターとは違い癖がないから、多少はイメージが違っても使う事が出来るし、普通のさえ描いてくれれば大丈夫だ。

いや、悠斗の腕なら普通なんかじゃないか。

「最後にシナリオは……」

- ・優希ちゃんに頼む
- ・香菜ちゃんに頼む
- ・桜花に頼む

・光輝に頼む

「ワクワクテカテカ」

「優希ちゃんは……ないとして」

「どうしてですかっ！」

優希ちゃんが珍しく、声を張り上げて抗議してくる。

うん……その声も新鮮で可愛い。

チャラ男風に言うなら「君、かわういいね」かな。

ま、関係ないけど。

「優希ちゃん。どんなシナリオを書くつもり？」

「そうですね。まずは主人公の男性にあるとき、実の兄を名乗るイケメンが現れるんですっ」

優希ちゃんが力説しているけど……やっぱり、嫌な予感が……。

「そして許されざるフォーリンラブ！」

あー、やっぱり……だから、ダメなんだよ。

「どうですか！ ネット上では神と呼ばれる優希のシナリオは？」

うん。

きっと、真冬ちゃんが実在したら、優希ちゃん見たいな人になるんだろうな……。

「ダメ」

「どうしてもですかっ！」

「優希ちゃんのシナリオは乙女ゲーのシナリオなんだよ」

「どうしてもダメですかぁ？」

優希ちゃんが上目遣いで見つめてくる。

ヤベエ、変わった声の芸人みたく「いいよー！」って言いたくなってしまうぜ。

が、口を固く閉じてぐつと我慢する。

「……仕方ないですね」

我慢していると、優希ちゃんが折れてくれた。

良かった良かった。

優希ちゃんがダメとなると、次の選択肢は

- ・優希ちゃんに頼む（NG）
- ・香菜ちゃんに頼む
- ・桜花に頼む

・光輝に頼む

一番上はNGだったから

「香菜ちゃんできる？」

香菜ちゃんなら、台本とかで色々なシナリオとか見ているだろうし、適任だと思うのだが。

「そんなのやったことないんだから、分かるわけないじゃない！あんたバカじゃないの？死ぬの？」

「いやいや！死なねえから！まあ、とりあえず書いてきてよ」

「し、仕方ないわね……」

それでシナリオは大丈夫……ではないな。

シナリオは一人に付き、一つのシナリオを担当してより深いシナリオを書いてもらおう。

・優希ちゃんに頼む（NG）

・香菜ちゃんに頼む（OK）

・桜花に頼む

・光輝に頼む

優希ちゃんはダメで、香菜ちゃんは大丈夫と……。

姉妹なのに、二人は右端と左端に座っている。

このゲームが完成している頃には、姉妹揃って隣の席に座れているといいな。

「桜花はできる？」

「もちろんだよ。恭ちゃんが望むものを書いてみせるよ」

「頼もしい」

「えへへ」

- ・優希ちゃんに頼む（NG）
- ・香菜ちゃんに頼む（OK）
- ・桜花に頼む（OK）
- ・光輝に頼む

えーと、最後は唯一まだ余っている……残っている

「光輝も作つてきなね」

「俺だけなんで命令形なんだよ！」

光輝がなんかわめいているけど無視！

「よし、後は俺もシナリオ書けば……」

「あの……優希は何をすればいいのですか？」

あ……忘れてた。

「優希ちゃんはプログラムやってよ。パソコン得意でしょ？」

「わかったです」

よし！

これで完璧

「ちょっといい？」

「どうしたの香菜ちゃん？」

「シナリオって言ったって、全体の構図とか、キャラクターとか分かんないと書けないわよ」

た、確かに……。

「下手こいたー」

「うー」

なんか、魔女の惨劇が起こりそうな作品に登場するキャラクターの口癖みたくなってしまったが、別に真似した訳ではない。

前の授業で香菜ちゃんに殴られた後頭部が痛くて、唸ってただけさ。

「はい席に着いてくれ」

担任の智夜先生がそう言いながら教室に現れる。

だが、この六時間目の授業は数学ではない。

一週間後に迫った学祭に向けて、漫才のネタを作る時間である。

「漫才の前に報告がある。気付いている者もいるかもしれないが、女子生徒二名が転校した」

え……言われて席を見ると、確かに空席となっていた。

意外と、気付かないものだなあ。

まあ、人の目は節穴ってよく言うしね。

「で、その二人の漫才の相方は、もう片方の転校した相方の方と組んでくれ」

ま、普通に考えたら、それが妥当だな。

わざわざ、全員をまたシャッフルするのは面倒だしね。

「転校した相方の生徒は立ってくれ」

そう担任に言われて立ったのは

「……」

「……」

俺の友達の姉妹だった。

Chapter 9 二人（後書き）

真ん中を通して

二人は出会った

一人は笑って

一人は泣いた

Chapter 10 学祭前日（前書き）

約束は破るためにある

誰の言葉だっただろうか？

ああ そうだった

弱い者の言い訳だった

Chapter 10 学祭前日

「はぁ……」

俺は溜め息を吐いた。

理由は言わずもがな。

明日はビッグイベント……学祭の事だ。

学祭の事を考えると、それだけで辛い。

本当に、氷風呂にでも浸かって、高熱でもだそうかな。

それもあり辛いだろうけど。

肉体的な苦痛か、精神的な苦痛か……。

「はぁ……」

俺は再び溜め息を吐いた。

『どうしたの？ 考えごと？』

幼馴染みが心配してくれる。

違う次元の住人だが。

「現実逃避はやめたらどうでしょうか？」

そう俺に話しかけてきたのは、隣に居るリアル住人の理緒ちゃん。

「べ、べつに現実逃避なんかしてないんだからねっ！ 勘違いするなよな！！」

俺はそう言いながら、携帯ゲーム機の電源を切って、ポケットへしまう。

勿論、セーブ済みだ。

もう、下手はこかねえぜ！

「せっかく、個室が与えられているんです。さっさとやっちゃいましょう」

「誰も殺さねえよ！」

「何、言っているんですか？ バカなの？ 死ぬの？」

「死なねえよ！」

「やる」というのは、殺める事じゃなく、勿論、アツチの事でもない事は分かっていたが、理緒ちゃんが「やる」というと、どうしても屋上での出来事が脳内再生されるんだよ。

つまりは

「悪いのは、理緒ちゃんだよ」

「？ 何が悪いのかは分かりかねますが、とりあえずすいません」
なんか、大人の対応された！

謝られたら、こっちが悪いみたいじゃないか！

「……ごめん」

「？ どうして謝るんですか？」

「気にしないで」

うん。

気にしないで、本来の「やる」の意味を全うしよう。

その為に、クラス全員に個室が与えられているのだから。

「じゃあ、漫才の練習でもするか」

「？ 私は最初からそう言っていますか？」

「……」

そうですね！

「でも、いいんですか？ 漫才のネタ、まだ完成してませんよ？」

そうですね！

「分かっているさ。一時間目にネタを完成させ、二時間目にネタの練習をすれば、三時間目からのクラスの出し物のセッティングに余裕で間に合うぜ」

俺はそう言い放ち、理緒ちゃんに親指を立てて見せた。

ふ……決まっているぜ！

「今日までずっと、ネタが作れていないのに、僅か五十分程度で作れるのですか？」

そ……そうですね！

「絶望した！止まってくれない時間に絶望した！！」

「あ、死んでくれるんですね。嬉しいです」

「死なねえよ！」

「死なないのですか？死んでやるー！と、叫びながら首を吊ってくれたらありがたいのですが」

「いやいや！あの人、実際死ぬ気ないから！てか、俺も死ぬ気ねえから！」

「では、ネタを完成させてください」

くっ……そうですね！

確かに、ネタを俺たちだけ完成させてないなんて事は許されない。

体育館の舞台の上で、冷たい視線を向けられ、死ぬ程恥ずかしい事になってしまう。

冷たい視線を向けられない為には

「理緒ちゃんを犯せばいいんだ」

「死にますよ？ 社会的に？」

「じよ、冗談だつて！」

まあ、ネタを見せるのはしなくて済むだろうが、社会的に死んでしまふな。

そんな事しないけど。

「あ、ネタを一つ浮かびました」

「え？ マジ？ どんなネタ？」

理緒ちゃんが考えたネタ、どんなのだろう？

めっちゃ期待。

「このネタをすれば、確実に生徒全員が驚いて言葉を失うでしょう」
驚かすの？

てか、言葉を失わせちゃダメでしょ？

笑わせて、大爆笑してくれないと。

でも、確かに最近の芸人は手品とかで笑わせるより驚かせている芸人もいるしな。

掴みとしては、悪くはないかも。

まあ、最近の若手芸人のネタで笑う事なんて、そうそうないけど。

寧ろ、トークで笑う事が多いな俺は。

「どこ見ているんですか？ 白い快樂でもしているんですか？」

「やってねえよ！」

「あれは、身体の中で漆黒に変わりますからね。止めることをオススメします。でも、一度使ってしまったら、雪のように溶ける快樂が忘れないなくて、繰り返すのでしょうけど」

「だから、やってねえよ！ 俺は酒も飲んでねえし、煙草も吸ってねえ健全な高校生活を謳歌している模範的な高校生だよ！」

お酒と煙草は二十歳から！

……一回だけセブンスターを吸った事はあるけど。

一回ぐらいは許容範囲だぜ！

タモリの番組の相槌が俺の言葉に対して聞こえてくるぜ！

そうですね！

「話が逸れました」

「理緒ちゃんが逸らしたんでしょう？」

俺が違う事を考えていたのも、少しは悪いと思うけど。

「話を戻します。まず、あなたが舌を噛みます」

「痛い」

「血が流れ出します」

「痛い」

「死にます」

「殺すなよ！ そんなことしたら確かに生徒全員、言葉失うわ！
生徒だけじゃなく先生たちも含めてな！」

「ダメですか？」

「ダメに決まっているでしょう！」

「では、首を掻き切るのはどうでしょうか？」

「オヤシロ様なんて俺、見えねえから！ まずここ雛見沢じゃない
から！ 雛見沢症候群に完成しねえから！ 第一に梨花ちゃんは存

在しないから！ あの声は世界一かわいいゆかりんですから！」

ハアハア……ってか、理緒ちゃんサブカルチャーに詳しいね！

ちょっと俺の好感度がったよ！

「そうでした。黄金の魔女に呪い殺されるというのは？」

「ベアトリーチェも存在しないから！」

「残念です。最高のネタだと思ったのですが」

どうやら、理緒ちゃんの無駄な引き出しは終わったらしい。

でも、これからどうするか……。

「私たちではダメならば、誰かに来ていただいて、指南を仰げばいいのではないでしょうか」

な、なるほど……それは盲点だった。

確かに、ネタをする奴がネタを作らなければならないなんて規則なんてありはしない。

「じゃあ、拓夢に電話してみるよ」

そう言つて、俺は携帯電話をポケットから取り出し、リダイヤルの欄から拓夢にポインターを合わせ、クリックする。

プルル

数回の呼び出し音の後、拓夢が電話に出た。

『恭介か。どうした？』

「ああ、実はネタが浮かばない」

俺がそう言つと、拓夢は驚いたように話し返してきた。

『え？ まだ出来てなかったのか？』

「うん」

『あー、……うん。ドンマイ』

「だから、ちょっと来て、指南して欲しいんだが」

俺は目的を拓夢に伝える。

『恭介。俺だつて、ネタの練習中なんだ。それは無理だ』

あ……忘れていた。

今、クラス全員がネタの練習の時間だった。

『あ、そうそう。お前に伝えておかなければならないことがあったんだ』

「なに？」

ネタのアドバイスか？

『前に、ニコニコ動画に投稿した楽曲二つをカラオケに入れたいって話しただろ？』

あー、そんな事もあったな。

「どうなったの？」

『今、リクエスト投票中になっていて、上位二百位に入ると配信されるから』

「りょーかい」

そう返事をして電話を切った。

どれくらいの楽曲がリクエスト投票中になっているかなんて知らないけど、上位二百位なんて無理だろうから、あんまり期待はしない方がいいな。

なんて考えていると、なぜか急に理緒ちゃんが「すいません」と謝ってきた。

「え？」

「他の生徒も練習中だということを、忘れていました」

「別にいいって。ド忘れなんて誰だってするんだから」

でも、理緒ちゃんも度忘れする事があるんだな……可愛いところも

あるじゃないか。

好感度アップだぜ！

「では、緑川恭介。あなたはよくド忘れするのですか？」

「まあ、そうだな。昨日の晩飯が何を食ったとか、忘れてしまうことは結構多いな。あと、フルネームじゃなく、名前だけで呼んでよ」

「分かりました。以後、恭介と呼びます」

「それでいいよ」

「話を戻しますが、それは若年性アルツハイマーでは？ 若いのに可哀想……」

「違うから！ 可哀想なものを見る目で見ないでえ！！」

「あ、今は認知症でしたね。私としたことが、すいません」

そう言うと、理緒ちゃんはペコと頭を下げた。

「どっちでも違うからな！ つか理緒ちゃんは俺のことバカにしてない？」

「はい」

「はいって……」

好感度ダウンだぜ……。

「嘘です」

「ホント？」

俺が疑いの目で理緒ちゃんを見ると、理緒ちゃんは俺の言葉に「そんな疑う人、嫌いです」と返事されてしまった！

「……振り出しに戻りましたね」

「大丈夫だ！」

「？ なにか、策でも？」

「もちろんだ！ この作戦を使えば、嫌でも来てしまうぜ！ 言わば、条件反射だな」

「なにか分かりませんが、期待しています」

「おう！ 泥船に乗ったつもりで待っていてくれ」

「沈みます」

俺は理緒ちゃんのツッコミに華麗にスルーを決めると、再び携帯電話で今度はリダイヤルではなく着信履歴から光輝の電話番号に合わせて、ボタンを押した。

プルル

拓夢より数回長い呼び出し音の後、光輝の声が聞こえた。

『おっはー』

「古っ！」

『ネタだよ、ネタ。で、なに？』

「そうそう。よく聞けよ？」

『？ ああ』

「来てくれるかな？」

『いいと……いや、行かねえから！』

な……バ力な。

誰でも知っている国民的番組の定番の、あの誘い文句を拒否するだ
と！

一種の刷り込みと言っても過言ではない「来てくれるかな？」とタ
モリが言ったら「いいとも」と返すのが自然反射！

それを逆らうだと！

「ま、まさか……異邦人！？」

『いや、歴とした純粋な日本人ですから！ 日本人過ぎて困るくら
いに……！』

「日本人で困るなんてやっぱり……スパイ！」

『だから日本人だっていつてんだろ！？ てか、異邦人とかじゃなく普通に外人つていえよ』

「ふふ。外人つてネットで言ったら、差別用語だつて罵られて……
うっつ」

『それは……可哀想に』

「来てくれるかな？」

『いいと……どさくさに紛れて言わすなよ！ 行かねえよ！』

「来てくれるかな？」

『いいと……行かねえつていつてんだろ！』

「チツ」

『あ！ お前舌打ちしたな！ 切つてやる！ 切つてやるんだからな！』

ガチャ

あ、本当に光輝の奴、切りやがった。

「どうでしたか？」

「奴は、光輝はサイボーグだった。だから、洗脳が効かなかった」

「サイボーグ？ あ、恭介の妄想ですね。乙」

理緒ちゃん……つめてえ！

これが、噂でも聞かないクールツンツンですか！

キンコーンカンコーン

「な……！」

「一時間目が終わってしまいましたね。結局、ネタは完成しませんでした」

……。

「絶望した！ 時報のような邪魔物のチャイムに絶望した！！」

「あ、死んでくれるんですね」

「死なねえよ！」

全く……さっきも同じやり取りをした気がするぜ。

「でも、今だけは時が止まって欲しいぜ」

「女子トイレを覗くのですね。犯罪者乙です」

「除かねえよ！ 二次元の女子トイレしか除かねえよ！」

「ロリコンの罪で逮捕します」

「ロリコンは罪じゃねえ！俺は紳士だよ！」

「変態というなの紳士ですね。分かります」

「分からなくていいから！」

「分からない？やはり認知症」

「違うから！」

「では、白血病」

「健全な健康体だよ！あえて俺に病を付けるなら釘宮病くらいだよ！」

「言つてて、恥ずかしくないんですか？」

「……」

「そうですね！」

「恥ずかしいに決まっているじゃないか！バーロー」

キンコーンカンコーン

六時間目も終わり、漸く放課後となった。

漸く……じゃないな、俺にとっては死へのカウントダウンだな。

「恭ちゃん。漫才の出来はどう？　大爆笑？」

俺が教室の席……と言っても、コスプレ喫茶の為に配置移動しているから、俺のいつもの席ではないが、席から立とうとした時、桜花が後ろから話しかけてきた。

「なんとか、出来たよ」

そう。

二時間目の五十分で試行錯誤の末、なんとか、ネタは出来た。

ただ、練習する時間はなかったから、明日のぶつけ本番になってしまったけど。

「楽しみにしているね」

桜花が満面の笑みで話している。

作り笑顔じゃなく、本当に期待している笑顔だ。

「まあ、まんまり期待はするなよ」

「恭ちゃんが作ったネタだよ？　大爆笑必死だよ」

いやいや、そんなにハードルを上げないでくれ。

「あ、私、委員の集まりあるから行くね」

「ああ、頑張れよ」

「うん」

桜花は俺に手を振りながら、教室を出て行った。

今、俺は屋上を目指している。

理由はメールしたら優希ちゃんが屋上に居ると返信があったから。

俺なんかが力になれるかなんて分からないが、少しでも力になれたらいい。

そう思っただけ俺は約束したからな。

必ず、二人を昔みたく仲良くさせてあげるぜ。

「そのためにはやっぱり香菜ちゃんから理由を……」

「なにブツブツ呟いてるの？ キモいよ？」

気付けば、目の前に結愛ちゃんが居た。

キツイ言葉を言われてしまったが、話しかけてきてくれただけ、少しは仲良くなれたと自負しておこう。

「はは、少し考えごととして。結愛ちゃんは明日の学祭は楽しみ？」

「正直、ここまで来て、また舞台にあがらないといけないなんて苦痛です」

まあ、そうだろうな。

結愛ちゃんはアイドルを休業して……本人は辞めたつもりでこの学園に来たのに男装とか、コスプレとか、水着とかしないといけないもんな。

「まあ、これは仕事じゃないんだからさ、気楽にやったらいいよ」
エロゲーの押し売りだが、他に言葉が見つからなかったのだから仕方ない。

それで、結愛ちゃんが少しでも気楽になってくれたら嬉しい。

「ちょー作ってさ、めっちゃぶりっ子してさ、テキトーに、相槌うつて、笑って、びっくりしとけば、男の人って、喜ぶじゃん」

「え？」

「でもね、それって私なのかな……」

「結愛ちゃん？」

「みんな、つくられた存在のゆあゆあのファンであって、本当の私のファンはいない」

……………。

「好きな食べ物は、イチゴ。好きな動物は、犬。バカじゃないの！」

「結愛ちゃん!？」

「みんなバカよ！ 騙されて！ 本当に好きなのは肉よ肉！ 犬なんて嫌いよ、嫌い！」

「結愛ちゃん。落ち着いて」

俺はどうしたらいいかわからず、とりあえず落ち着いてと言っしかなかった。

でも、それが正解だったのか、結愛ちゃんは冷静さを取り戻した。

「……ごめんなさい。今は忘れて。じゃあ」

そう言っつて、結愛は去って行こうとする。

だけど

「ねえ」

俺は、その足を止めさせた。

「……なに？」

結愛ちゃんが、こちらに振り返る。

「もし、よかつたらさ、一緒にゲーム作らない？」

なぜ、誘ったのか、それは自分でも分からなかった。

「え？」

「どうかな？」

でも、きっと、俺は結愛ちゃんにも笑って欲しかったのだと思う。

未だ、優希ちゃん一人笑わせられない自分だけど、だからって、だから結愛ちゃんが笑わないでいいなんて間違っているから。

「……………いいの？　今からなんて迷惑じゃない？」

結愛ちゃんがそう質問してくるが、その口調は明らかに一緒にやりたいという口調ではない。

否定されてもいいみたいなの……だが、俺は否定は決してせずに答える。

「俺、リーダーだから、俺がOKと言えばOKだよ。まあ、みんな反対しないだろうけどね」

と、わざと軽い感じで言った。

「……………そう。じゃあお願いするわ」

そう言つと、結愛は再び歩き出して消えて行った。

なんと、予想外な事に結愛ちゃんが一緒にゲームを制作する事を了承してくれた。

案外あっさりしていてビックリしたが、嬉しい方向に転んだのだから、OKと言う事に変わりはない。

「よかった、よかった」

あ、早く屋上行かないと。

屋上。

優希ちゃんが待っていた。

「ごめん、待たせた？」

「そうなことないですよ」

そう言って、優希ちゃんが屈託のない天使の笑顔を見せてくれる。

優希ちゃんマジ天使

「……話って、お姉ちゃんのことですか？」

「ああ」

俺は結愛ちゃんから、優希ちゃんの双子の姉である香菜ちゃんに、理由は分からないが避けられていると教えられた。

俺は一緒にゲームをつくる事をキツカケに自然に「アレ、取って」、「はい、アレです」みたいに話せればと思っていた。

だが、ゲーム制作の時間も、一緒につくりはするが……まだ企画段階だが、お互いに離れた席に座って会話もない。

つまり、まだ実りは叶ってなくこれからだ。

そんな中、クラスから二人の女子が転校した。

まあ、先生に言われるまで気付きもしなかったが。

そして、その転校した二人の女子はそれぞれ、優希ちゃんと香菜ちゃんの漫才の相方で

「その……どう？ 話せてる？ ネタをつくるにはどうしても話すとは思っただけど？」

経緯はどうであれ、優希ちゃんと香菜ちゃんは漫才のコンビとなった。

これが、上手くいっているのならそれに越した事はないが、もし上手くいっていないのならかなり気まずい空気が流れているはずだ。

特に今日の一時間目と二時間目の個室での漫才の練習は。

「恭介さんの想像通りだと思いますです」

と言う事は、残念ながら上手くは進まなかったか……。

「そうか……」

「はい……」

「……」

「……」

……。

「……ネタはどうだ？ 出来たの？」

沈黙に耐えられず質問してみたが、すぐに愚問な質問をしてしまったと気付く。

話だってまともに出来ないのに、会話主体の漫才なんて出来ていないはずがない。

「ネタは出来たのです」

「え？」

意外だ……間違っただけで以外と心の中で変換しそうになってしまったぞ。

「それはよかったな。でも、どうやって？」

「お姉ちゃんが、作ってきてくれたです」

「でも練習は？」

「お互いに無言です。優希も沈黙に耐えきれなくてケータイに逃げてしまったです……」

まあ、俺でも逃げちゃっただろうな……カラオケの時みたいに。

「……ごめんな」

「え？ いきなりどうして謝るんですかつ」

「だって、俺、全然役に立ってないからさ……」

「そんなことはないです！ 恭介さんがこの屋上で手伝ってくれるって誓ってくれたから、優希も頑張ろうって思ってたんです！」

誓って……。

「ぶつちやけ優希、諦めてたんです。お姉ちゃんが優希を嫌いになったなら嫌だけどそれでもいいって。ぶつかるのが怖かったから……」

「……俺、どれだけ役に立つか分かんないけど、手伝うから！ 頑張ろうね！」

「はいです！」

優希は強く頷いた。

それにしても、どうして香菜ちゃんが優希ちゃんを避けるのだろうか。

結局、聞けてないんだよねー。

嫌いではないって言うていたけど……じゃあ、どうしてなんだろう？

ただの愛情の裏返し？

不器用な愛情表現みたいなの……だったらいいのに。

「明日の女装、楽しみにしてますね」

「うぐう」

そ、そうだった……。

勿論、優希ちゃんの件も大事だけど、明日のビッグイベントも大事だよな。

「明日、来てくれるかな……？」

「いいともー」

見に来てくれていいのにい！

どこか。

周りはコンクリート剥き出しの部屋に高校生くらいの少年と少女が居る。

「明日は学祭だな」

「そうね」

少年は学祭を楽しみのように語る。

一方、少女の方はそれほどでもないようだ。

「学祭の本番はここだ」

そう言つて、少年が手を広げる。

「明日、ここはモルモットの聖地となる。萌えと燃えが融合した楽しい楽しい愉快な学祭がな」

少年は饒舌に、尚且つ愉快そうに顔を歪ませながら笑う。

「それは傍観者が、でしょ。当事者の女の子たちにとっては、違う意味で顔を歪めますでしょうね」

少女は対照的に、声優だったら棒読みと言われるような抑揚のない声で淡々と話す。

「それがいいんじゃないか。誰だってやってていわれて少女の処女を奪つても楽しくないだろう？ 止めてって懇願する泣き叫ぶ少女を無理矢理壊すのだ。それが愉悦というもの」

少年は明日の事を考えては顔を歪めます。

「……」

少女は無表情で顔を歪ませ笑う少年を見る。

「演技じゃないリアルな悲鳴、ありもしない出口へ向かって足を進める憐れな道化。所詮、この手を出ないことも知らずに。いや、知っていても願わずにはいられない。なぜならそれが唯一の希望だからだ」

「ないと思っただけでももしかしたらと願い、それがそうなるはずと願望に変わる」

「わかっていないじゃないか。さて、明日はここに何個の棺桶があるのかな？」

少年は高らかに笑う。

その笑いは嘲笑。

憐れな女の子たちを嘲笑う愉快そうな笑い。

その高笑いとは対照的な少女のように、今日と言つ日は暗い静寂に飲まれていく。

Chapter 10 学祭前日（後書き）

二人きりの暗い部屋の中で

扉など見向きもせずに

君だけのために命を削るよ

本当は一人きりだと知るときまで

Chapter 11 学祭 Maid cafe (前書き)

真っ白いキャンバスを

染めていくけれど

結局真っ黒になるから

また真っ白く塗り潰す

Chapter 11 学祭 Maid cafe

「くくくっ」

コンクリートに囲まれた部屋で少年の笑い声が反響する。

「つまらない表の学祭は終わりだ。今から楽しい裏の学祭が始まる」

「……準備できたわよ？」

無表情な少女が楽しいそうに独り言を呟く少年に話しかける。

「そうか。では始めよう。表の学祭ではモルモットになってしまったが、ここでは畏怖し有りもしない光を求めるモルモットを嘲笑う支配者だ」

「結構、笑えたわよ。普段しないであろう人の女装」

そう話す少女だったが、その口振りは昨日のように棒読みで決して笑っている感じではない。

「一生の不覚だよ。来年からは裏から手を回さないと。こんなことが二度三度もあったら、生まれ変わってもこの黒歴史を覚えたまままでいてしまうぜ」

「プリニーとして使われている姿は、ちょっと見てみたいかも」

少女はそう少年に話を返すが、やはり抑揚のない棒読みで気持ちが入っていない。

「生まれ変わりなどフィクション。ゲームや漫画、所詮は二次元のモノであって存在などしない」

そんな少女の喋り方には慣れているのか、少年はそんな事など無視して語り続ける。

「だが、人類最大の夢、まだ誰もなしていない究極の夢、不老不死、……。必ず、必ず成し遂げてみせる」

「……」

少女は黙って少年の一人語りを聞いている。

まるで、そこに誰も居ないかのように。

ただ、少年の居るであろう方を向いているだけで本当は壁を見ているみたいに。

「さあ、つまらない話は終わりだ。今から萌える愉悦の時間が始まる。それに比べれば、黒歴史など今は酒の肴にでもなるさ」

「お酒は二十歳から……」

少女は再び少年に話しかけるが少年は「お前、よく一緒に居れるな」と少女の言葉を返す。

「屑を嘲笑うのは天才の権利だ。お前はルールに縛られ過ぎなんだよ。さあ、背徳の気持など消し去ってモルモットを嘲笑いに行こうぜ」

そう言つて薄ら笑いを浮かべつつ奥の部屋へ歩く少年だったが、急に立ち止まり持っていた飲み終えた缶コーヒの空き缶をグシャリと握り潰して後ろへ放り投げた。

「……」

少女は音を出して転がっていく空き缶などには目もくれず、ただ少年の方を無表情で見る。

「ちつ……思い出してしまつたぜ。表の学祭をよ」

そう言つた少年は歪んだ笑みを消し、少しイライラした表情をみせた。

「……」

遂にビッグイベントの学祭が始まつてしまつた。

いや、俺は学祭には肯定派だし、めっちゃ楽しみで嬉しい事には勿論変わらない……ないはずだったのだが、生贄の一人に選ばれてしまった時点で全て終わってしまった。

「ああ、なぜ現実にはセーブがないのでしょうか。あー神よ、もし時が戻るなら、あの時グーを出した自分を殺したい。見習い天使フロンよ、俺を導きたまえー」

「大丈夫ですよ、愛があればネタがつまらなくても笑ってくれます」

そう俺の独り言にツッコミをいれて来たのは、本当に天使みたいな可愛い可愛い優希ちゃん。

優希ちゃんマジ天使！

てか、優希ちゃん……知ってて「愛」って言うてくれたのかな？

優希ちゃんなら、ゲームに詳しくてもおかしくないけど、偶然だったらならば、優希ちゃんはイノセントチャームだぜ。

一部はイノセントじゃねえけどな（笑）。

「優希ちゃんおはよー」

「おはようございます。恭介さん」

ペコリと頭を下げる優希ちゃん……可愛い過ぎる！

まさに歩く萌え要素だぜ！

「あー、優希ちゃんが本当に天使ならいいのにー。でも所詮生まれ変わりとか、天使とかはフィクションだもんねー」

「そうですね……って！ 天使なんてどうでもいいんです！ 恭介さん！ 一大事ですっー！！」

え！？

い、一体どうしたツス？

あ……プリニーみたいになってしまったッス！

俺は犯罪などしない健全な男児だから、プリニーなどにはなりはしないッス！

「一体どうしたッス……どうしたんだ？」

優希ちゃん言葉には焦りが見える。

「お、お……お姉ちゃんが、早退しました……」

え……早退？

「……学祭を？」

「はいです。……声優のオーディションに行つたみたいです」

今日は土曜日だから、本来ならば学校が休みだ。

そして、普段学生で勉学に励まなくてはならない香菜ちゃんが、役を掴む為にオーディションに行く日は土曜日と日曜日しかない。

放課後なら行けなくもないが、午前中とかなら学校と言う拘束がある香菜ちゃんはオーディションに行く事が出来ない。

学校を休んで行くと言う方法もなくもないが、この学園はレベルの非常に高い学園で一回の休みが致命傷となるし、そもそも高校には単位があるからなかなかそうはいかないだろうな。

まあ、声優のオーディションが何曜日にやっているかなんて俺には

分らないが、もし平日にもオーディションが開催されているんだとしたら、土日と祝日しか行けない香菜ちゃんにとってはかなりの痛手だろう。

だから、今日オーディションがあるのならば、行きたい気持ちは確かに分かる。

俺の知っている限りだと、香菜ちゃんが声の仕事をしているゲームは二つくらいしか知らない。

俺が知らないだけで、もう少しくらいは出てはいるのだろうが、少なくとも全てパソコンソフトのゲーム……所謂エロゲーにしか出てはいないはずだ。

テレビアニメとかには一切出た事はないはず……まあ前にオーディションに受けに行っていたのだから出れるのなら出たいのだろうが。

「……でも、今日は学祭だぞ」

そう、今日は確かに土曜日だ。

だけど、学園は休みではない。

勉強はないけど、ないがビッグイベント学祭が開催されているんだぞ。

「やはり、優希とは漫才を……一緒に居たくないということなんでしょうか……」

「……そんなはずはない。そんなはずはないよ。だって一緒に漫才

をしなくなかったら、ネタなんて考えて来ないよ」

そうだ。

昨日、優希ちゃんを心配して屋上で話した時、優希ちゃんはお姉ちゃんの香菜ちゃんが漫才のネタを作ってくれたと言った。

本来ならば一緒に作るべきなのだが、それはともかく置いても、本当に一緒に漫才をしなくなかったら、そもそも漫才のネタなんて作ってこないはずだ。

「でも、オーディションって当日に分かるものじゃないですよ？前々から行くことを決めてたとか……？」

「……それは分からないけど……」

元々オーディションに行く気だったのなら、漫才のネタを作ってこなくてもいいはず……つまり今日行く事を急に決めた？

でも、恐らくだけど、飛び入り参加とか有り得ないよな……ならやはり最初から……。

「で、恭介さん！ お願いがあります！」

「な、なに？」

「優希の……優希の相手になってください！」

優希ちゃんがそう言った時、俺は午前中の事を思い出した。

午前がクラスの出し物、そして午後からは……。

……。

「恭ちゃん？ どうしたの？ 顔暗いよ？」

午後からの事を考えて意気消沈していると、桜花が顔を覗き込んできて心配してくれる。

めっちゃ、嬉しい……嬉しいけど、どんなに心配してたって黒歴史へのカウントダウンは止まらないよぉ！

「ちよつと午後からのことを想像してただけだよ」

俺がそう教えると、桜花は「ああ……」って口を漏らす。

そりゃあ、俺は自分の事……午後からのコンテスト、女装の事で頭が一杯で深く考えていなかったが、桜花も不幸な生け贄に選ばれた犠牲者の一人。

俺からすれば、男子の女装と違って、女子の男装は恥ずかしいかもしれないが、決して黒歴史ではないはずだ。

まあ、俺が男性だからで女性視点から見れば、全く逆の結論が導き出されるのかもしれないけどね。

「男装はいいけど、水着は恥ずかしい……」

そっだ。

女子には男装の他に水着も着なければならない。

実際に行っている学校がどのくらいあるのかは知らないけど、ゲームなどにはよくある水着コンテスト……俗に言うミスコンだ。

「……私も頑張るから恭ちゃんも今は、今を頑張ろう」

そう言つて、桜花が両手を前に出して、胸の前で手をグーにしてガンのポーズを取る。

うん。

めちゃくちゃ可愛い！

「ね？」

更に笑顔でウィンク！

「ぐはっ……」

死んだ！

はい！

俺、死んだ！

「え？ 恭ちゃん！？」

桜花が焦ったように俺の名前を呼ぶ。

「ああ、大丈夫だよ。そうだな、頑張ろう」

「うん！」

話が一段落したちょうどその時、校内アナウンスが流れる。

『これより学祭を始めます』

それを合図に三年生が教室を出始めているだろう。

ここの学園は一年生と二年生がクラスの出し物を出して、三年生がそれを見て回ると言う感じらしい。

俺も昨日、昼休みに知った。

因みに俺のクラスは、勿論コスプレ喫茶……ではなくメイド喫茶だ。桜花たち女子はメイド服を、俺たち男子は執事のような服を着ている。

でも、メイド服も執事服もコスプレ用のレンタル物だから、そういう意味ではコスプレ喫茶と言えなくもないかもしれない……ないか。何故こうなったか……理由は簡単だ。

大人の都合……大体の事に使える魔法のようなこの言葉ではなくて、もっと現実的な都合、そう予算の都合、所謂金の問題である。

一クラスに与えられる予算は勿論、無尽蔵……無限ではなく決めら

れている。

で、足りなかった。

それだけの話。

ただ、メイド服と執事服だけなら、大量注文の為、多少は安くなつてギリギリ予算に足りた……ので、メイド喫茶となった訳である。

まあ、執事も居るので執事喫茶と言えるか……女子の方にも来てもらえて、まさに一石二鳥とはこの事だな。

俺が自分の考えに感心していると、横からツツコミが入った。

「なーにラブラブやってるんだよー」

そう俺と桜花に向かってツツコンで来たのは、見た目は決して悪くないのに彼女とかいないエロゲーなどにおける悪友みたいな奴。

「む……恭介、今失礼なこと考えてただろ！ いや、絶対そうだ！ 怒ってやる！」

うん。

なんか、昨日と少しデジャブを感じさせる台詞を紡ぐね。

「そんなことないさ。寧ろ、誉めてたんだよ。光輝のこと」

「え？ マジで？ それは悪いこと」

「光輝は童貞で素晴らしいって」

「どこが誉めてんだよ！」

「いやはやまさに童貞の帝王、童帝だぜ！」

俺がそう誉め讃えてやっているのに、光輝は怒りをあらわにする。

「意味わかんねえよ！」

確かに、文字にしなければ同じ言葉を言っているだけだもんね。

光輝にはこの高いギャグセンスが理解できない事を計算に入れなかったぜ……。

恭介、一生の不覚！

「確かに悔しいことに否定は出来ねえけどさ！俺はしたいのに出来てないんじゃないかって、別にしたくないからしてないだけだ！」

「ぐす……分かるよ、光輝。それが男の言い訳……じゃなかった。それが男の勲章だよな。うん。お前は汚れていない。綺麗な光輝だよ」

「今、めっちゃお前に汚されたけどね！俺は妹一筋なんだよ！」

「なん……だと……。まさかのシスコン発言」

「そういう意味じゃねー！ただ兄として妹が好きってただけ！変な意味とかねえよ！勘違いすんな！」

光輝、ちょっとマジっぱいな……流石に悪乗りしすぎたみたいだ。

「ま、気にすんなよな！」

と俺が大人の発言をした所で、この話し合いは終了。

まだ光輝がガミガミ言っているが無視！

そして辺りを見渡す。

メイド服に赤いカチューシャを付けたレベルの高い女の子たちが目に映る。

見た目はいい奴は頭が悪いって思っていた事を反省しないとな……
だってジュリと音を立ててしまいそうなくらいみんな可愛い

ジュリ

え？

俺は音を立ててないぞ？

でも今、確かに音が……？

「なんとなんと。まさに拙者のための空間！ 萌えですなあ。ジュリ」

「い……いらっしゃいますー！」

擬音の正体は客だった。

……キメエ。

凄く、キモい。

アニメや漫画に出るようなキモオタだ。

接客を担当している結愛ちゃんも最初一瞬、顔を引киつたのが、見てとれた。

でも、流石はプロのトップアイドル。

すぐに笑顔を見せて接客をしている。

営業スマイルだと分かっているけど、あれは堪らないね！

俺が顔を引きたらせっていると、隣に悠斗がやってきて、耳元に語りかけてきた。

（ねえ、あの人。前にゆあゆあが転校してくることを証明するために話した人じゃない？）

（でも、確かに似てるけど、あのキモオタは二年生のはずだよ？
だったらここにいるはずはないよ）

（そうだよな……気のせいかな？）

（キモいから同じに見えるだけだよ、きっと）

（そうだね！　そう言えば、キモオタの次の人も凄かったよね）

ああ、確かに。

あのオネエ系の男子には、流石にビビったぜ！

オネエ系なんて、テレビでしか見た事なんなかったからね。

「あら〜ん。いい男たちねえ」

「……………」

俺たち固まったね。

いや、クラス全体が。

よくよく考えれば、その人は確かに三年生だったけど。

数分後には、メイド喫茶は満席状態の大盛況となった。

その分、忙しいけど。

「コーヒー、お持ちしました」

俺は、最初のお客さんのキモオタへコーヒーを差し出す。

「なんでえゆあゆあたんが持ってこないんだお？」

結愛ちゃんは大人気なんだよ！

キモオタ一人を相手になんか出来ねえよ！

「すみませんお客様。当店はこの通り混んでおりまして、ご了承ください」

心の声は勿論、心に留めて、俺は紳士的に店員のように、そう言つてキモオタへ頭を下げた。

なんか、スゲエ負けた気がするのは、気のせいだと思いたい。

「初めてあつたヤローになんか興味ないお」

初めて？

やっぱり似ているだけ？

でも、こっちは逆に興味が出てきて、聞いてみる事にした。

「ウヒョー！ まさか弟の言つてたのはお前？ 奇跡展開キター！」

弟……だから似ていたのか……。

「では、失礼します」

「ちょっと待つお」

俺はキモオタから一秒でも早く離れたかったので、去ろうとしたが、呼び止められてしまった。

「なんでしょか？」

だが、不満などは決して口にださず、クールに紳士的に接客する。

「なんか、話すお？」

え……うぜえ！

忙しい時に絡んでくるんじゃないよ！

……とは言えないよな。

俺の発言一つで、満席状態が全て空席に変わるかもしれないからね。

まあ、アニメの事をちょっと言って、気分を舞い上がらせて、さつさと去らせてもらおうとするか。

「お客様は涼宮ハルヒのキャラで誰が好きでしょうか？」

「オウフｗｗｗｗいわゆるストレートな質問キタコレですねｗｗｗｗ」

キメエ！

「おつとつとｗｗｗｗ拙者キタコレなどといふネット用語がｗｗｗｗまあ拙者の場合ハルヒ好きとは言っても、いわゆるラノベとしてのハルヒでなくメタSF作品として見ているちょっと変わり者ですのでｗｗｗｗダン・シモンズの影響がですねｗｗｗｗドプフォｗｗｗｗついマニアックな知識が出てしまいましたｗｗｗｗいや失敬失敬ｗｗｗｗ」

.....。

「まあ萌えのメタファーとしての長門は純粹によく書けてるなと賞賛できますがwww私みたいに一歩引いた見方をするとですねwwポストエヴァのメタファーと商業主義のキツチュさを引き継いだキャラとしてのですねww朝比奈みくるの文学性はですねwwwフオカヌポウwww拙者これではまるでオタクみたいwww拙者はオタクではござらなのでwwwwコポオ」

いやいや、百対零でお前オタクだから！

意味わかんねえよ！

深いんだか、浅いんだか全然わからない話しやがって！

まあ、お前のお陰で一つだけわかったよ。

……俺は健全だと。

キンコンカンコーン

『間もなくお昼になります。三年生は教室に戻ってください』

この校内放送が流れ、あんなに大盛況だったメイド喫茶は気付けば、クラスメイトだけになっていた。

いつもはこの数のはずなのに、さっきの大人数を見たら、めっちゃ少なく感じてしまう。

まあ、俺は大人数とか苦手だし、会話とかも正直苦手だから、店員とかはあんまりやりたくねえな。

「ねえ」

「ん？」

最後の客を見送った香菜ちゃんが俺に話しかけてきた。

「頼むね」

ただ、それだけ言うと、香菜ちゃんは教室を出て行く。

「……」

今、思えばアレはこの事を指していたのだろうか？

だとするならば、やっぱり最初っから……。

「恭介さんしか頼れないのです！　お願いしますです！」

そう言つて、再び頭を下げる優希ちゃん。

その姿は必死さを感じさせる。

「わかったよ」

俺がそう言つと、優希ちゃんは頭を上げて、自然と出たであろう笑顔で「ありがとうございます」と再び頭を下げた。

「いいよ。屋上で誓ったからな。優希ちゃんを助けるって。香菜ちゃん関係しているなら、俺は関係者だ」

「恭介さん……」

「それに、優希ちゃんを他の奴と二人きりになんかささせたくないしな！」

半分は冗談だったのだが、この言葉を優希ちゃんは、顔を赤くして小さく「はいです」を呟いた。

Chapter 11 学祭 Maid cafe (後書き)

本人は普通だと思っていた

周りは異常だと思っていた

それに気付いているのって

幸せ？ それとも不幸？

Chapter 12 学祭 Comic dialog (前書き)

誰のせいで少女は落ちる

誰のせいで少女は墮ちる

ああ そうだった

僕のせいだった

Chapter 12 学祭 Comic dialog

「優希の……優希の相方になってください!」

これから体育館で行われる漫才の相方になってくれと優希ちゃんに頼まれた。

理由は、相方の香菜ちゃんが早退したから。

俺は優希ちゃんと漫才をする事にしたが、結果的には俺は優希ちゃんと香菜ちゃんを仲直りさせてないと言う事で……。

まあ、優希ちゃんと二人きりになれるとか、めっちゃ嬉しい出来事だけだね。

「じゃあ、ネタを教えて」

「はいです!」

優希ちゃんが、制服のポケットから香菜ちゃんがメモ帳を出して渡してくれる。

「ありがとう」

俺は優希ちゃんにお礼を言って、そのメモ帳を貰う。

「そんなんっ! お礼を言うのは優希の方ですから!」

と、優希ちゃんが慌てて頭を下げるので、上げさせてメモ帳を開く。

メモ帳には手書きで漫才のネタが書いてあった。

優希ちゃんが、香菜ちゃんが漫才のネタを作ってきてくれたと言っていたので、この手書きの文字は香菜ちゃんのだろう。

綺麗な文字で、漫才のネタが書かれている。

文字の下にうつすらと違う文字が見えるので、何回も書いては消して、書いては消して、を繰り返したみたいだ。

「……」

正直言つて、香菜ちゃんの書いた漫才のネタは、俺と理緒ちゃんがない頭と知恵をフルに使って考えた漫才のネタより面白かった。

あの時は、本当に学力は笑いには全く持って役に立たない事を思い知ったね。

頭が良くなると、どんどん頭が固くなって、柔軟な発想が出来なくなるとか聞くけど、本当にそれを体験したようなもんだからな。

「……どうですか？」

優希ちゃんが不安そうに聞いてくるので、素直に「面白い」と伝えた。

「えへへ。自慢のお姉ちゃんです」

香菜ちゃんの書いた漫才のネタが好評で嬉しいのか、優希ちゃんは

照れ臭そうにしている。

ま、あくまで俺が面白いと感じただけで、実際に受けるかどうかは別問題だけど。

テレビとは違って、面白くなくても笑い声を足したり出来ないし、見ている人が目の前に居るから、笑ってくれなきゃ地獄だよな。

「……ホントに香菜ちゃんのことを好きなんだね」

「はいです！ 自慢のお姉ちゃんです！」

「なら、絶対にまた一緒に話せるようにならないとね」

「もちろんですっ！ また一緒に……」

優希ちゃんは本当に香菜ちゃんが好きなんだな……姉妹ってみんなこんなモノなのかな？

よくよく考えると、双子って結構珍しいはず。

今までの記憶を辿っても、エロゲーとか二次元の中でしか、出会った事がない。

杏と涼とか、佳奈多と葉留佳とかね。

「そう言えば、恭介さんには兄弟とかいるんですか？」

「兄弟？ 残念ながら、兄も弟も居ないよ」

「じゃあ、一人っ子なんですか？ 少子化に貢献してませんね」

「それは親に言えよ！ ってか、人口を増やすんなら三人以上必要だから、優希ちゃんも貢献してないぜ」

「あ……気付きませんでした」

おいおい。

でも、最初の頃は全然話してくれなかったから……結愛ちゃんみたいに。

そう考えたなら、こうやってギャグを言い合える関係になったのは、優希ちゃん秘密を知ったのが始まりとはいえ、凄い事だね。

うん。

この関係を、この関係以上であつたはずの香菜ちゃんとも言えるようになれば……。

「でも、一人っ子って寂しくないですか？」

「うーん。考えたことないな。でも、一人のときは欲しいと思って、結局兄弟が出来たときには、やっぱり一人がよかったって聞くしね……どうなんだろう。あ、ごめんね。答えになってないや」

「別に構いませんです。でも、優希はお姉ちゃんが居て、本当によかったと思ってますです」

お姉ちゃんか……お兄ちゃんでもいいけど、もし居たら可愛いがつ

て貰えたのかな？

逆に、俺がお兄ちゃんだったなら、可愛いがったのかな？

「……何やってるんだ？」

そんな事を考えていたら、担任の智夜先生に話しかけられた。

「いえ、ちょっと兄弟が居たら、どうなっていたかなって、考えています」

「……兄弟、居ないのか？」

「はい。居ません」

「……上にも、下にもか？」

「？ はい。一人っ子です」

「……そうか。夏とはいえ、屋上は冷えるから中に入りなさい」

確かに、午後になった事もあって、少し肌寒いと感じていたところだ。

太陽も雲に隠れているしね。

優希ちゃんは眩しいくらいに輝いているけど。

優希ちゃんは教室に忘れ物したと言って、教室へ行ってしまったの

で、俺は体育館に一人で向かっていた。

「……………」

俺、廊下でよく結愛ちゃんと出会っよな。

「結愛ちゃんも体育館へ？」

「……………他にどこに？」

「え？ いやあ、まあ、そのお、テンプレみたいなもので……………深い意味はなくて……………」

「そうです。体育館です」

「なら、一緒に行くか？」

「どうしてですか？」

「え？ 友達だからじゃダメなのか？」

「友達！？ 私と？」

なんか、凄く驚かれた。

俺となんかと友達では嫌って事？

そんなのは涙目だよお。

「だ、だって、一緒にゲームを作る仲間じゃん！」

「……仲間って、友達って意味なの？」

「え？」

友達「仲間かって言われれば、それは分からない。」

言葉の意味的な事で言えば、仲間は一緒に何かをする者同士の事で、友達とは親しくしている人って事だから、そう言う意味で言うのなら、仲間は同じ仕事をしているみたいな事で、友達 仲間になるけど……。

「同じ意味だろ！ それこそ、友達と親友みたいに、言葉は違うけど、同じ意味みたいなもんだって！」

「……私の周りって、芸能界に入ると、沢山出来るんだ。でも、それは仕事だけ。プライベートになると周りは誰も居ないの。ねえ！ 友達っていくら払ったらなってくれる？」

物議を醸す発言をするね。

「……無料だよ。でも、無料で無量の数の友達は作れる。その中の一人に、俺はなれないかな？」

「……プライベートの友達？」

「もちろん！」

「……仕方ないわね！ 一人言の多い変態だけど、特別に友達になつてあげるわ！」

「ありがと。……俺って一人言多いの？」

「気付いていないんだー。まあ、自分じゃ気付かないことって沢山あるけどね。さあ、体育館行きましょ！……恭介君」

体育館に着くと、すでにほとんどの生徒が集まっていた。

『それでは、漫才大会を始めさせていただきます』

俺が席に着いた丁度に、アナウンスが漫才大会の開始を告げた。

『今回は、漫才のプロとして、『ダウンタウン』と『タカアンドトシ』の方々に来て頂きました』

体育館の左手にある先生たちの席の隣に、ダウンタウンの二人と、タカアンドトシの二人が座っている。

めっちゃ生で見れて、スゲー嬉しいけど、これから漫才を見られると考えると、めっちゃ辛いな。

芸人目指している奴なら、めっちゃ嬉しいだろうけど、この学園に芸人目指している奴なんて居ると思えないし、ただの緊張感を更に増すだけの存在だよ。

『では、一年生は準備を開始してください』

漫才は一年生から順番に行われる。

決まっているのは一年生からと言うだけで、あとは籤引きだ。

本来の相方、理緒ちゃんとの漫才は二十一番なので、二十一番目に漫才を行う。

理緒ちゃんに二十一番だと伝えた時は「ロリコンにはピッタリな番号ですね」と言われたが、恥ずかしい事に確かにロリ派の俺はぐうの音も出なかったぜ。

体育館の舞台の裏で、俺は周りと同じように漫才のネタを練習していた。

ただし、本来の相方ではなく、優希ちゃんと。

理由は番号にある。

なんと、優希ちゃんの番号は二十三番で、俺たちのすぐ後だと言う事が判明された為だ。

漫才のネタは、長くても五分程度……それでは練習など出来ない。

なので、理緒ちゃんに許可を貰い、優希ちゃんと練習しているのである。

理緒ちゃんとは、昨日何度かは行ったからね。

まあ、始まる前には理緒ちゃんとも練習しないといけないだろうけど。

『続いて、九番です』

舞台裏なので、嫌でも舞台上で漫才をやっている声が丸丸聞こえてくる。

だが、それを聞いている生徒の声は聞こえない……。

「大丈夫でしょうか」

優希ちゃんが自信なさげに聞いてくる。

「このネタを。お姉ちゃんを信じれないのか？」

「そんなことはないです！ お姉ちゃんはいつも優希を守ってくれましたです！！」

「なら、大丈夫だ、問題ない」

「はいです！」

俺たちは限りある短い時間で、必死に漫才の練習をした。

どんなに受けてない奴が居るからって、漫才のネタ帳を見ながら漫才をやっている奴は居ない。

まずは、覚えなないと。

『続いて、十四番です』

「お！ 練習してるな」

「拓夢か、十四番なのか？」

「ああ」

「恭ちゃん！ 見ててね！」

「いや、見れはしないけど、聞いてるよ」

「恭ちゃんのために頑張るよ！」

なんで俺の為？

なんて考えるていると、拓夢と桜花は舞台へと上がっていった。

「拓夢さんと桜花さん。笑いを取れるでしょうか？」

「さあな。聞いてみれば分かるさ」

そうは言ったが、俺も気になるので、何もしなくても聞こえてくる舞台へ耳を傾ける。

すると、拓夢と桜花の声が聞こえてきた。

『煙草吸ってもよろしいですか？』

いや、ダメだろ。

『どうぞ。ところで一日に何本くらいお吸いに？』

こら拓夢！

『ふた箱くらいですね』

桜花も吸ってんの！？

『喫煙年数はどれくらいですか？』

『三十年くらいですね』

なんだ、ネタの話か……そうだな。

隣に喫煙者がいるから信じてしまったぜ。

『なるほど。あそこにベンツが停まっていますね』

『停まっていますね』

『もしあなたが煙草を吸わなければ、あれくらい買えたんですよ』

『あれは私のベンツですけど』

『……………』

え！？

終わり！？

めっちゃくちゃ早いよ！

……でも、客の笑い声もちらは聞こえてくるし、まあ成功な方だろ。

ちよつと、俺も笑ってしまったしな。

「面白いですね」

優希ちゃんが舞台から帰ってきた拓夢と桜花に素直な感想を述べている。

「だろ？」

拓夢はなんか、誇らしげだ。

「どうだった？ 恭ちゃん？」

桜花は俺に感想を求めてくるので、素直に「面白かった」と伝えると、照れて舞台裏を出てしまった。

「仲良いね」

「からかうなよ」

「じゃあ、頑張れよ」

そう言つと、拓夢も舞台裏を出ていった。

『続いて十五番です』

アナウンスが入る。

「恭介！ 優希ちゃん！ 聞いてくれよな！ 俺たちの素晴らしい漫才を！」

そう俺の前に現れたのは自信満々のバカ、光輝。

そして、その隣に居るのは光輝の相方、結愛ちゃん。

「……また、会ってしまったわ」

「そりゃあ、出会っただろ」

俺が結愛ちゃんにツツコミを入れる隣で、光輝は熱弁している。

「恭介！ 大爆笑をその耳をかつぽじって聞いとけ！」

そう言い放った光輝とそれを冷めた目で見つめている結愛ちゃんが舞台上上がっていった。

「不安ですね」

ああ、俺もだ。

大爆笑じゃなく、大爆死にならない事を祈るぜ。

『突然ですが、結愛ちゃんに話があります』

『はい。なんですかあ？』

流石、トップアイドル！

さっきの冷めた表情が嘘のように、見事な笑顔を見せている。
魅せられるぜ。

『サッカー部って薄荷が好きなハッカーが多いんだよね』

『はっ？』

……。

『ネコが寝転ぶと、どう叫ぶか知ってる？』

『キャッ！ ト、でしょ』

……。

(´。°。°)・*∴∴∴、ブッ

「……お、面白かったです……」

優希ちゃんが舞台から帰ってきた光輝と結愛ちゃんに必死にお世辞を述べている。

「……素直につまらなかったって言うてくれた方がいいよ」

「スベリ倒しだったね」

「お前はもう少し傷付いた人に優しく出来ないのか！」

なんだよ、素直に感想を述べてやったのに。

「……予想内の結果だったわ」

そう言つて、結愛ちゃんは舞台裏から去つていった。

『二十番の方です』

ついに次になつてしまった。

「恭介、優希ちゃん。僕、頑張るよ!」

「頑張ってくださいです」

悠斗の隣に居る相方は、確か“中村遥香”と言う名前だったはずだ。

黒髪のショートで、見た目としては、アイマスの天海春香みたいな感じだ。

でも、性格は初期の千早のように無口で、可愛いのだが寡黙なので、俺も全然話した事はないな。

「じゃあ、行ってくるよ」

悠斗は俺と優希ちゃんに手を振つて、遥香ちゃんと一緒に舞台上がつていった。

「優希ちゃん。次、順番だから俺は理緒ちゃんのところに行ってるね」

「分かりましたです」

そう言うと、俺は理緒ちゃんのもとへと足を進めた。

「よ！ 理緒ちゃん。ごめんな」

俺は、俺の我が儘に付き合ってくれた理緒ちゃんに謝罪した。

本当なら理緒ちゃんと漫才の練習をしないといけないのに。

「なら、自殺してください」

「だが、断る」

理緒ちゃんには感謝しているが、だからと言って死ぬ訳にはいかない。

ってか、死にたくない。

そう言えば、淀川長治って人が「死は人間卒業、自殺は人間廃業です」と言う名言と言うか、格言を残したらしい。

俺は自殺を肯定するつもりはないが、止める義務はないと思っている。

何故なら、それがその人の人生の選択だからだ。

「……一人言、好きですね？」

「え？」

ヤベエ、口に出てた？

さつき結愛ちゃんにも言われたばかりだし、気よ付けないと。

『次、二十一番です』

あ、呼ばれた……。

「なんか、緊張するね」

「緊張を解く方法をお伝えしましょうか？」

「え？　じゃあ、お願い教えて」

俺がパツと思い付くのは、掌に入って漢字を三回書けて奴だな。

「舌嚙んでください」

「死ぬわ！」

「はい」

はいつて……。

「大丈夫ですよ、客すべて二次元のキャラだと思えば」

た、確かに……よく野菜だと思えとか言うしね。

「すべて幻想。そう思えば、変わるはずです」

「ああ！ そう思ったら気持ちも楽になったよ！ ありがとう！」

「どう致しまして」

「よし、行くぞ！」

「通報しました」

「犯罪なんか犯さねえよ！」

と、理緒ちゃんにツツコミながら、俺たちは舞台の上へとやって来た。

そして、舞台の真ん中に一つ置いてあるマイクを中心に、客から見
て俺はマイクから左側に、理緒ちゃんは右側に着く。

ううーやつぱ緊張するよお！

足が震えてきやがった。

みんなロリキャラロリキャラロリキャラロリキャラロリキャラ
キャラロリキャラロリキャラロリキャラロリキャラ

意を決して理緒ちゃんの方を見ると、いつも冷静沈着な理緒ちゃん
でさえ足が少し震えている事に気が付いた。

でも、必死に堪えようとしている姿を見て、ギャップ萌えと言うの

だろうか、いつもにまして可愛いらしく感じて少し緊張が和らいだ。
理緒ちゃんもこちらを見たので、アイコンタクトをして漫才を始める。

俺と理緒ちゃんが必死に搾り出した渾身のネタを。

「始まりは中学二年生のときだ。覚醒が始まったのは。それから、人間がゴミクズにしか見えなくなつて、今では人間が死んでも何も感じない。そう、蟻を踏み潰しても何も感じないように」

「……アナタのやったのはキセルです。どうしてキセルなんか、やったのですか？」

「右手が疼くからです」

「……恥ずかしくないんですか？」

「恥ずかしい？ 確かに初めは咎めた。だが、第三の目が開化する頃には何も感じなくなった。そう、蟻を踏み潰しても何も感じないように」

「……ダメだコイツ、早くなんとかしないと」

「いいですか、人間は三種類に分かれるんだ。神に選ばれた者、そうでない者。あと一つ何か分かるか？」

「いえ、分からないです」

「フツ……神に選ばれた者ですよ」

「……ソレ、二種類」

「ま、人間なんてそんなものですね」

「……ドコ行くんですか？」

「あっち」

「あっちってドコですか？ 行っちゃダメです」

「秋葉原……なんですか？ 一体、この僕をいつまで拘束するんだ
！」

「キセル、よくない。調書とる。名前は？」

「名前？ 名前だと？ フハハハハハ！ 愚かな質問だ。僕に名前
なんてあると思っているんですか？」

「思います」

「……」

「名前は？」

「ヨハン」

「……はい？」

「ヨハン・リーベルト」

「……名前は？」

「言っているじゃないですか。ヨハン・リーベルトだと」

「ナ・マ・エ・ハ？」

「恭介」

「名字は何ですか？」

「恭介リーベルト」

「名字は？」

「だから、恭介リーベルト」

「ミ・ヨ・ウ・ジ・ハ・？」

「高坂」

「高坂恭介さんですね。……ロリコンみたいな名前ですね」

「違う」

「仕事は何ですか？」

「世界の支配者」

「仕事は？」

「世界のし……」

「シ・ゴ・ト」

「カラオケ店員」

「最初から言ってください」

「完全なるカラオケ店員」

「イミフですが？」

「千葉の堕天使が舞い降りる」

「……とりあえずキセルはドコからしたのですか？」

「約束の地」

「それはドコですか？」

「血に染められた羽がある場所だ」

「赤羽ですね。……では、三倍の料金を頂きます。はい、もうしな
いくださいね」

「……」

「？ どうしました？」

「コスプレ代金、貸してください」

「……」

「あの……コスプレ……」

「……」

「ないと、払えない……この、肉の衣装……」

「……」
「ついいですか？」

「はい」

「恭介さん、はがないですね？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」
「／（＾ｏ＾）＼やっちゃまったあ！」

「オイ！」

「今のオチだぞ！」

笑いは？

ねえ！？

「恭介」

「なに……理緒ちゃん？」

「落ち込んですね」

「そりゃあ、笑い声一つ起きなかったからね」

はあ……滑った光輝を大笑いしたのに、とんだピエロだよ！

「でも、落ち込んでばかりもいられませんよ？」

あ……そうだ。

俺には、優希ちゃんとの漫才も残っているんだっとな。

でも、でも、それさえ越えれば

「忘れていますか？ 女装コンテストを」

「あ」

……。

「……」

「……………ぶっちゃけありえない！」

「はがない……………僕は友達が少ない’の略だって、分かる人はこの学園に多くは居ないと思います」

「そうだな……………それが敗因だな。ガリ勉バカにラノベとかイミフだよな……………。やっぱり、’いとこい’のネタをパクるべきだったな」

「はがない……………僕達は爆笑が少ない’の略になってしまいましたね」

誰が上手い事を言えと！

Chapter 12 学祭 Comic dialog (後書き)

暗い闇を照らす光に

もしも願いが届くなら

流れ星に祈りを捧げるよ

ごめんなさい

Chapter 13 学祭 Black history

「……」

まさか……まさか俺の力作ネタが失笑すらしらない無音で終わるなんて……。

そんなの嘘だッ！

「あの……」

「……」

「す、すごく面白かったですっ」

「……」

「わ、笑い過ぎて、笑い死にすると思いましたですっ！」

落ち込んでいる俺に、優希ちゃんは健気に優しい嘘をかけてくれる。

「……ありがとう。ホント優希ちゃんは優しいね」

そんな健気な優希ちゃんに俺は素直にお礼を言った。

「そ、そんなことないのですっ！　優しいと言ったら、恭介さんの方がずっと優しいですっ！」

謙遜なんかしなくても良いのに。でも、そういう所が優希ちゃんなんだよな。

「ありがとう」

だから素直に受け取っておく事にする。お互いに譲り合っていたら、終わらないだろうからね。

「さあ、最後にもう一回練習といくか」

「はいです」

優希ちゃんが笑顔で返事をしてくれる。

俺を選んでくれた優希ちゃんのためにも、必ず成功させてみせるぜ！

それに、二度も無音なんて、流石に今度こそ優希ちゃんの言葉も届かないほどに、心が壊れてしまう。

俺の心は何処かの王様と同じで豆腐メンタルだからな。

『次は二十三番です』

ついに俺たちの番号が呼ばれてしまった。

だが、大丈夫だ。今やった練習と同じようにやれば。

「き、緊張しますです」

「俺もだよ」

まあ、俺の場合は、緊張より恐怖の方が大きいんだけど。

「……恭介さん……」

優希ちゃんの身体が震えている。

「……行こう。成功させるために」

俺は震えている優希ちゃんの手を握る。

優希ちゃんが一度目を閉じて、そして何かを決心しかたのように

「はいっ」と力強い返事を聞かせてくれた。

そして、俺は二度目の、優希ちゃんは初めての舞台へと歩き出す。

舞台の袖から出てきた時、俺を見て誰かが笑った気がするが気の

せいだろう。目の前の客の一人から、金髪の生徒から発せられる

笑われるオーラなんて。……笑わせてあげるよ、お前の嘲笑い顔を、

本当の笑い顔にな。

そんな金髪の横には、素直に頑張っという気持ち伝わる少し

不安顔の桜花が応援してくれている。何処かの金髪とは違って。

理緒ちゃんはどうだろう？ 顔では想像もつかないが、応援して

くれているのかな？ 分かんないなら、ポジティブに応援してくれ

ていると考えておこう。

「……」

「……」

今回も俺は、客から見てマイクの右側に立っている。左側には優希ちゃん。

そう言えば、テキトーにさっきと同じ左側……俺からすれば右側

だが、ボケはこっち側、ツツコミはあっち側とかって決まっているのかな？ もし決まっているのなら、逆ならばプロの目線から見たら、それだけで減点？

うわー。漫才とかコントとか好きだからよく見るけど、どっちがボケでどっちがツツコミとかなんて一々見ないからなあ。

えーと、確かフットボールアワーは、岩尾望が左側で後藤輝基が右側だよな？ 後藤がツツコミなんだから、俺はボケの位置か？

オードリーの春日やタカアンドトシのタカもダウンタウンの松本人志も左側なんだから、正解だよな？ 俺はさっきも今回もボケ担当だし。

まあ、世代が世代だけにダウンタウンが漫才やっている姿は見た事ないけど。もう、司会者レベル行っちゃってたからね。

「……」

優希ちゃんが不安そうにこっちを見てる。

俺は大丈夫だよと目でコンタクトして、漫才を始めた。

うん、大丈夫。香菜ちゃんのネタは面白かった。つまりは、あとは俺と優希ちゃんの腕の問題。

でも、大丈夫。さっきの通りにやれば。

「はい、どうも」

「どうもです」

「まず、自己紹介をしましょうか」

「そうですね。凄くいいアイデアだと思いますです」

「でも普通に自己紹介をするのでは面白くないので、キャッチフレーズを付けて紹介するのはどう？」

「恭介さん！」

「あ、はい」

「凄くいいですね！」

「ありがとう。じゃあ、まずは俺からいくよ」

「はいです」

「二次元代表、緑川恭介です」

「……」

「……」

「……」

「……いや、ツツコンですよ。ここ三次元でしょ」

「いえ、恭介さんの顔のレベルは二画素レベルなので合っていると
思っていましたです」

「いやいや、ハイクオリティでしょ」

「ノンスタイル井上ですね。分かります」

「お願いだから分らないで」

「次は優希が自己紹介しますです」

「もう、名前言っちゃったけどね」

「引きこもり協会名誉会員の竹達優希です」

「嫌な協会だね！ しかも名誉会員なんだ！ 優希ちゃん！」

「はいです！ 名誉です！」

「そんな力強く言うことじゃないでしょ！ そんな引きこもって何
してるの？」

「放送禁止用語が飛び出てピーと音が鳴りますが、いいですか？」

「え？ 放送禁止用語って優希ちゃん何やってるの！？」

「優希は勇気を持って、のりピーのように白い快樂に溺れてますで
す」

「うん。なんか色々ツツコミところが多くて困るけど、上手いこと
言ってるし、確かにピー入ったけど、絶対違うところに必要だった
よねとか、てかやつちゃダメだよ！」

「……やってないよ」

「なんで一瞬黙るんだよ！」

「いや、もういいじゃん。放送禁止用語、ピーマンの話なんて」

「いやいや！ ピーマンの話なんてしてないから！」

「あ、引きこもり協会のことだったね、ゴメンです」

「話、戻すぎだよ！」

「コンコン、コンコン。いつまで引きこもってるんですかつ！」

「続けるの！ てか、俺が引きこもってるの！？ 逆じゃね？ あと俺、ツッコミになってるよね！？」

「緑川！ いつまで自宅警備員をしてるんですかっ！」

「名字で呼ぶの！？ 親なら名前で呼べよ」

「優希は先生です」

「あ、そうなんだ……」

「緑川！ いつまで自宅警備員をしてるんですかっ！」

「自宅から自室にレベルアップした！」

「早く開けなさいです！」

「うるせえよ！ 先公は帰れよ！」

「いつまでウサギ小屋に引きこもってるんですかっ！」

「え？ 俺、家じゃなくウサギ小屋に引きこもってるの！？」

「居心地ですか？ 居心地が良いのですか？」

「居心地の問題じゃねえよ！ そうじゃなくて家に来ている前提で頼むよ」

「それもありですね」

「それしかねえだろ、大概は」

「コンコン、コンコン。グリーンリバー出て来なさいです」

「何故英語！？ 嫌だよ、もう学校になんかに行きたくねえんだよ！」

「何で学校に行きたくないですか。理由を百個述べるです」

「そんなにはねえよ！ どれだけ俺は抱え込んでるんだよ。今は誰とも話したくないんだよ、帰ってくれよ」

「どうして誰とも話したくないんだ？」

「会うのが億劫だからだよ」

「どうして会うのが億劫なんですか？」

「気分が乗らないからだよ」

「どうして気分が乗らないんですか？」

「会話下手か！ 何でオウム返し of 言葉ばかりなんだよ」

「どうしてなんですか、理由だけでも教えてくださいです」

「……イジメられてるんだよ！」

「……それだけの理由で、ですか？」

「充分過ぎるだろ！ 同じクラスの奴にイジメられてるんだよ！」

「よく聞くのです。イジメと言うのは、イジメている人は楽しんです。イジメている人の楽しみを快樂とすれば……いいんじゃないですか？」

「最後尻つばみ過ぎるだろ！ てか可笑しいだろ！ 俺にMになれつてか！」

「とにかく学校に来てくださいです。頼むです！」

「嫌だね、行きたくねえ」

「お前が来ないと……先生の評判が下がるんだ」

「結局自分のためかよ！ もついいよ」

「「ありがとうございました」」

ネタが終わって舞台裏へと戻る。

『次は二十四番です』

アナウンス担当の生徒がそう放送し、二十四番の人たちが、ガチになりながら俺と優希ちゃんの横を通る。横目で睨まれた気がするが、それは仕方ないと思う。

「恭介さん！ ありがとうございます！」

優希ちゃんが満面の笑顔で、俺にお礼を言ってくる。

「俺だけの力じゃないよ。優希ちゃんの力があってこそだ。それに

……香菜ちゃんもね」

「……はいっ」

大爆笑。一言で語るのなら、この言葉が適切だろう。今日始まって以来の大爆笑。これを聞いてしまったら、次の人の足取りが重くなる事は仕方のない事だろう。

「人前で喋るのは、凄く凄く緊張して……怖かったけど、すべてすべて恭介さんのおかげですっ！」

優希ちゃんが再び、俺を言ってくる。今度はお辞儀も一緒に。

「あげてよ、さっきも言ったけど、俺じゃなくても」

「いえ！ 恭介さんだから頑張れたんですっ！」

え……て、照れるじゃないか。優希ちゃんにそんな事言われると。

「ふふ。恭介さん、顔赤いですよ？」

「え？」

マジ？……恥ずかしい。

「……でも、本当に本当にありがとうございました」

「もういいって」

でも、本当に大成功してよかった。光輝の悔しがる顔が面白かった。まあ、光輝もすぐに笑ってたけど。本当の意味で。

これで爆死なら優希ちゃんには申し訳ないし、もちろん理緒ちゃんにも。

「……」

結果的にはよかったけど、香菜ちゃんのネタ……多少はアレンジしたけど、まるで最初から俺が相方みたいに書いてあった。香菜ちゃんの台詞の一部は、男言葉になっていたし。

……やっぱり、最初から

「恭介さんのおかげで、あとのコンテストも頑張れそうです」

「え？」

「女装、楽しみにしてますね」

……。女装、コンテスト……………。

また、忘れていた……。まだ、黒歴史は終わってなかったあああああー！！

『それでは、一年A組によりますコンテストを開始します』

ついに、地獄の時間が訪れてしまった。

一生忘れる事の出来ない人生の一欠片になり、黒歴史と言うタイトルで一ページを飾るだろう。

「恭介、面白かった。……また滑れと思ってすまなかった」

光輝が謝りに来た。俺が感じていた事に気付いていたんだな。

「なら焼きそばパン買って来いよ、パン工場行って」

「すみません。購買で許してもらえませんか」

ふむ……。どう料理してくれるか？

「……そうだ。今度、手紙の相手紹介しろよ。どうせ女だろ」

「お前、超能力者か！」

「毎週、手紙受け取ってるんの知ってるんだぞ？ 彼女なのか？」

「……まあ、大切な子かな」

「リア充爆発しろ！」

羨ましいなあ……。光輝には彼女がいるのか……。リアルに充実しているのか……。爆発しろ！

まあ、俺には愛花ちゃんが、高嶺愛花ちゃんがいるからいいけどね！ 画面の中から出てきてくれないけど。

「早く、着替えるよ。袖から女子の男装と水着、見ようぜ」

そう提案してきたのは拓夢。すでに女装し終えている。前に見た事あるとはいえ、こんな姿を生徒に見せると考えると……。うう！

恥ずかしいよ！ 分かっていたつもりなのに！

「僕は着替え終わったよ」

悠斗も着替え終わって、こっちにやって来た。

……。着替えるか。

着替え終わって、舞台の袖で、俺と拓夢、光輝、悠斗の四名は今から反対の袖から登場する女の子を今か今かと待っていた。

智紀は残念ながら、いや正しい選択だが、下らないとか言って舞台裏の更衣室に残っている。紳士だね。

俺たちも紳士だけだね。変態と言う名の。

『では、準備が整いましたので、今から開始致します。ただしその前に報告があります。登場予定でした竹達香菜さんは欠場になりま

す」

香菜ちゃん……今頃はオーディション会場かな。

『では始めます。最初の生徒は、植田桜花さんです』

最初は桜花か。

俺たちは、女子がどんな姿なのかは知らないからな。初めてのこ
対面だぜ。

「……」

桜花の格好は、まさかの遊戯。遊戯王の主人公、武藤遊戯。

あの独特の三色の髪の毛を見事に表現している。

「腕にシルバー巻くとかさ」と桜花はいつもより低い声で遊戯の台
詞を言う。似てはいないけど。 当時は棒読みとか、まったく気
にしていなかったなあ。

『次は、竹達優希さんです』

次は優希さんちゃんか……ププッ！

笑ってしまったのは優希ちゃんに悪いけど、だって優希ちゃんに
は絶対に似合わないキャラなんだもん。

「カカロットー！」

優希ちゃんが、恥ずかしそうに、役の台詞……ドラゴンボールの
ベジータの台詞を叫ぶ。

『次は、堀江理緒さんです』

理緒ちゃんには、あとでもう一度謝らないとな。

「筋肉筋肉」

ぷはっ！ これは笑うって！ あの理緒ちゃんがリトルバスター
ズの井ノ原真人の台詞を！

普段、絶対言わないだろう言葉だけに……ぷはっ！

『ラストは釘宮結愛さんです』

結愛ちゃん……。そう言えばあとでゲーム一緒に作る事になった
ってみんなに言ってなかったな。明日にでもメールしとくか。

「海賊王に俺はなる！」

結愛ちゃんの格好は、原作漫画が超売れてるワンピースの主人公、

モンキー・D・ルフィ。声は似てないけど、流石アイドル。見事に自分のモノにしてる。

『では次は男性の方々です』

つ、ついにキター！ 暗黒の時間が！

『まずは、大野光輝さんです』

「俺かよ」と隣で呟いた光輝は、拳を握り締めて意を決したように舞台へ歩き出した。

「東中出身涼宮ハルヒ。ただの人間には興味ありません。この中で宇宙人、未来人、異世界人、超能力者が居たらあたしのところへ来なさい！ 以上！―」

痛い。痛すぎる。人気ラノベ、涼宮ハルヒの憂鬱のヒロイン、涼宮ハルヒの格好をして、声が太く棒読みで涼宮ハルヒの台詞を言った光輝。

勇気は認めるけど、声優の平野綾への冒瀆だよ、これは。

『次は、笠原悠斗さんです』

「ぼ、僕の番か……」

「頑張れ」

「うん」

恥ずかしそうに、悠斗は舞台へ歩き出す。Sの女とかは、こういうの見て、笑みを浮かべるのかな？

「うるさいうるさいうるさい！」

声優オタクならば、この台詞だけで誰の真似か分かるんだろうなあ。ニコニコ動画とかだったら、「くぎゅっうっうっ」ってコメントの弾幕が流れるだろう。

うん。でも実際、声は仕方ないとしても、光輝と違って、悠斗は元々女の子っぽいし、背も小さいからルイズのコスプレに違和感がない。素晴らしい。

『次は、黒羽拓夢さんです』

「来てしまったか……」

そう呟き、拓夢は舞台へ歩を進めた。

今、桜花たちは水着に着替えてるんだろうな。

「うんたん うんたん」

拓夢は、平沢唯の格好。やはり、アニメや漫画の実写化と言うのは、黒歴史にしかならないと思いきらされる。

『次は、陣内智紀さんです』

「ちっ……屈辱的だ」

まったくだ。秋葉原見たいに、周りにコスプレした人がいるならまだしも、一人きりのコスプレとか、拷問以外に何がある。

「マルマルモリモリ」

まさかの一人だけ二次元キャラじゃなく実在する人物！ 芦田愛菜のコスプレ！

小学生を高校生が演じる……キモい。その言葉以外の言葉が俺には見つからない。

『ラストは、緑川恭介さんです』

来たか……ええい！ もうどうにでもなれ！

舞台の真ん中まで歩いて来た俺は、見ている生徒たちに向かって台詞を叫ぶ。

「光の使者キュアブラック、光の使者キュアホワイト、二人はプリキュア！ 闇の力のしもべたちよ、とつととおうちに帰りなさい！」

初代のプリキュア！ 俺、プリキュアの衣装だよ！

秋葉原でさえ、プリキュアのコスプレしている奴なんて居ねえんじゃないね！

「……オワタ」

色々な意味で。

「まあ、よく頑張ったよ」

拓夢がそう言ってくれる。

「拓夢、一言いいか？」

「え？ なに？」

さっきの唯の感想を言つてやる。

分かる人には分かるだろう。拓夢が分かるかは知らないが。
「あんまり上手くないですね」

Chapter 14 学祭 Each tear

「いやああああ……」

中学生が高校生か、可愛い少女が少年たちに無理矢理連れてこさせられたのは、六畳程の小さい部屋であった。

「た、助けて……」

少女が弱々しく少年たちに向かって喋るが、そんな言葉が実る事はない。

部屋はコンクリート剥き出しで、長方形の形になっていて、天井には一般的な蛍光灯があるだけである。ただ、一点を除いては。

「ほら、服を脱げ」

少年の一人が、少女にそう命令する。

「いやああああ……助け……て……」

だが当然少女は脱ごうとはしない。その事にイライラしたのか、少年の一人は少女の顔の目の前に刃物を向けた。

「ひっ……や、やめて……殺さないで……」

「だったら、早く脱げ」

「ぐすっ……」

「死にてえのか!」

恐怖で涙を浮かべる少女に、少年は短気なのか怒りをぶつける。

「止めないか。怖がっているじゃないか。コイツはすぐに怒るんだ。気にしないでくれ」

「ハア!？」

自分をバカにされたと思ったのか、少女を慰める少年に短気な少年が食ってかかる。

「時間がないんだ。学祭は一週間後に迫っているんだ。お前は設備の方をやっておいてくれ」

「チッ……命拾いしたな」

短気な少年は少女にそれだけ言うと、部屋を出ていく。

「さあ、服を脱いでくれるかな？」

「……助けて……」

「うん。ゴメンねー。君は売られたんだよ？ 両親に。だから君を助けてくれる人はもう居ないんだ」

「……」

少女の両親は、事業が失敗して多額の借金を追ってしまった。その借金を返すのに普通の金ではどうしても足りない。ドラマとかならここでヤクザに金を借りるんだろうけど、今はヤクザに金を借りるリスクな事をする人はほとんどいない。

その代わり増えてきたのが、子供を売る事。もちろん合法ではなく違法ではあるが、ヤクザとは違い金を返す必要がない。何故なら代わりに子供を貰うから。金の返済が出来ずに利子で返済額だけ増えていって、毎日取り立てられるなんて事がないこの方法は、最近借金してしまった人の最後の道として、よく使われている。

子供を貰う方も奪うのではなくて、あくまでも金との交換なので両親に訴えられる事がなく、警察に捕まってしまう確率も低くなり十分なメリットがある。

そんな取引の犠牲の一人が、今泣きながらピンクのひらひらがついた可愛い服を脱いでいる少女だ。

「ひつく……」

「うん……じゃあ、あそこに座ってもらえるかな？」

そう言って少年が指さした場所は、何もないこの空間で唯一存在している物体が置かれている。

見た目的には椅子だが、ただの椅子ではない事が、見ただけでよく分かる。明らかに座った瞬間に、椅子に拘束されるであろうと思わせる手枷と足枷がついていた。しかも座る部分の真ん中が便器のように、穴が開いていた。

「……」

「大丈夫だよ、別に死んだりするわけじゃないんだから」

そう少年は言うが、少女は震えが止まらないらしく足がガクガク

揺れている。痺れを切らした他の少年が少女を椅子に座らす。

「きゃっ！」

その瞬間、予想通りに少女は手枷と足枷を椅子に固定させられた。少女もそれには予想していたが、それでも拘束され身動き取れなくなると、余計に恐怖を感じる。

「たす……ああっ！」

少女の身体が一瞬ビクンとなる。Bしかない胸では大きく揺れる事はなかったが。

「お、お尻が……」

少女がそう呟く。そう少女の身体が、一瞬ビクンとなったのは、お尻に何かが入ってきたからだ。

「浣腸って知ってる？ 意味はお尻に薬を入れることなんだけど、市販されている薬の効能は排便作用でしょ？ それと同じものだよ。君は商品なんだから綺麗にしないとね。中にはスカトロが好きな変態さんもいるけど、それはごく一部。売るにはスタンダードが一番なのさ」

そう語る少年の笑みは、短気な少年が怒鳴った時よりも、少女は畏怖した。

「あ……あああっ……」

少女が畏怖している間にも薬の効能が出始め、少女の身体は排便しようとする。が、少女は必死に我慢する。それはそうだ。男たちの前で排便を見られるなんて、恥ずかしいに決まっているから。

「我慢はよくないよ？ この程度で恥ずかしがってじゃ学祭じゃ死んじゃうよ？」

「……あ、あああっ」

排便という生理現象に耐えていた少女だったが、ついに耐えかねて音を出して排便が実行されていく。

「……うう」

裸姿で、さらに排便の姿まで見られた少女の双眸には、涙が溢れかえっていた。

排便が終わった後、少女は再び少年たちに連れられて裸姿で歩かされる。

廊下もコンクリートで固められていて、光は全て蛍光灯からで、外からの光は一切届いていない。目隠しされ連れてこさせられた少女は、恐らくここは地下なのだった。

「ここが目的地だよ」

そう少年が少女に告げると、他の少年が扉を開ける。

そこはさっきの六畳程の小さい部屋とは違い、学校の体育館くらいはある大広間だった。

「ああ……」

少女が小さく呟く。部屋に入った少女の目に飛び込んできたのは、数十人は居る拘束された他の少女たちだった。ここは少女たちを拘束している部屋なのだと、そして自分もここに拘束されるのだと、少女は思った。

「まあ、予想通りだとは思うが、一週間後の学祭までみんなと同じようにここで拘束されてもらう」

「……」

「大丈夫。君たちは大切な商品なんだ。傷なんかつけたら売れないもん。大切に、大切に、保管するから。裸でも寒くないように室内温度もバッチリさ」

そう少年が笑みを浮かべながら少女を他の少女の間へと歩かせる。少女たちは、縦一列に何列にもなつて拘束されている。

「じゃあ、拘束するから動かないでね。動くと痛い目みちゃうからね」

「うう……助け……て……」

「じゃあ、まずは口を開けてもらえるかな？」

「うう……」

少女は泣きながらも、少年の指示に従い口を開ける。少年の話を

信じるならば、従っておけば殺される事はないと考えたから。

「では、入れるからね」

少年はそう言っただけ少女の口に、ボールギャグを加えさせる。ずれないように頭上を縦にベルトを通してうえ、下側もしっかりと顎にかかるベルトが付いているから簡単に外れない本格使用だ。ボールギャグとはSMグッズなどでよく使われる穴の空いたボールである。それを加えさせる事によって、装着者はしゃべれなくなり、さらにずっと口を開けている状況になり、穴から唾液が滴り落ちてくる人気グッズである。

「次は目隠しするね」

目隠しは結構本格的なもので十分な大きさがあり、きつちりと目を覆って漆黒の暗闇を装着者に与えてくれる。これで少女は盲目になったも同義だ。

「……ああ……」

少女は喋ろうとするが、ボールギャグのせいで、唸るくらいしか出来ない。

「大丈夫大丈夫。次は足を拘束するからねえ。少し足を広げてくれるから」

少女が言われた通りに足を幅を少し広げると、少年は少女の足首に拘束棒の付いた足枷を装着する。これで少女は足の幅を変える事が出来ない。

「次は手を拘束するかな。手を後ろを出してくれる？」

最早、抵抗など出来るはずもない少女は言われた通りに両手を後ろへ回す。少年はその両手にアームバイندرを被せる。アームバイندرとは簡単に言えば、手の自由を奪う袋である。袋には手首、肘、袋の口の二の腕の分にそれぞれベルトが装備されて後ろ手に締め上げるようになっていて、肘のベルト部分から斜めにショルダーベルトが出ていて左右クロスする形で袋の口に繋がっていてこれを肩にかけて使う。袋の先にはリングが取り付けられていてチェーンなどを繋ぐことが出来る。実際、チェーンが繋がられている。こ

れで少女は腕を動かす事も出来なくなつた。

「大詰めだ」

少年が少女にボディハーネスを装着する。亀甲タイプの普通のハーネスで大きな特徴はないが、アソコに日本のバイブを装着できるダブルのバイブホルダーが取り付けられるようになっている。

「う……うう」

実際、二本のバイブが取り付けられており、少女の二つの穴へと入れられてしまった。

「あとは、オマケと」

少年が少女に革製で赤色の首輪をつける。

「最後にヘッドフォンつけるね。これつけたら何も聞こえないけど、何かある時にはヘッドフォンに放送かけるから」

そう言つて、少年が少女へヘッドフォンを装着させる。

「あ、食事の心配は要らないよ。鼻からチューブで栄養送るから」

「……」

「ああ、もう聞こえてなかったね」

そうだったそうだったと平手打ちして、少年は両隣の少女と鎖で繋いで、バイブのスイッチを入れた。

「開発、開発つと」

「ううううううう」

「泣くねえ。くくく」

目隠しされて見えない少女に、初めて少年が言葉にし難い歪な笑みを浮かべた。

学祭も終わり、静寂に包まれる葉鍵学園。

だが、その下ではまだ学祭は終わっていないかった。

「……どうしたの？」

無口な少女が、止まっただま動かない少年に話しかける。

「……ああ、悪い。学祭を思い返していた」

「……」
「さあ、宴は整っている。行こう。主催者が遅れては、客に失礼だからね」

「……」

今度こそ、少年は止まりもせず奥の部屋へと歩いていく。少女も少年の後を付いていく。

アイドルオークション

コンクリートの大部屋の正面に、看板が掲げられている。その下からの扉からは、少年と少女が出てきた。

左右には沢山の男子が、まるで野球観戦のように満員御礼で轟めき合っている。

真ん中は本当に野球場みたく、左右と正面によりかなり低くなっている。なので、真ん中の唯一の出入り口は後ろの扉しかないようになっていた。

「みなさん、お待たせ致しました。アイドルオークションの開催です」

司会者の少年の言葉に会場が盛り上がる。

「みなさん、今回は沢山の質のいいアイドルが揃っています。必ずや、みなさんに合ったIDOL……自分だけの人形が見付かるところでしょう」

「……ウオオオオ」

「IDOLたちによる様々なパフォーマンスもぶつつけ本番で見ものです。もちろんパフォーマンスには敗者が必要です。敗者には……」

「……死あるのみ」

「そうです。死というパフォーマンスをしてもらいましょう。死に方も様々。必ず楽しんで頂けると自負していますよ」

少年は指をパチンと鳴らすと、後ろの扉が開いて五人の少女が出てきた。だが扉から少し出た所で足を止める。いや、止めさせられ

たと言っていていいだろう。

五人の少女は、全員スクール水着姿で、小学生見たく前に大きくマジックで名前が書かれている。平仮名で。

客たちがみんな五人の姿に気付いた事を見図って司会者の少年が喋り出す。

「最初のパフォーマスは、王道中の王道、綱渡りです」

「……ウオオオオ」

よく見ると、少女たちの股の下にはピンと張ったロープが、正面の壁まで続いている。もちろんロープは股を擦る感じに設置されている。

「少女たちには、ビリには罰ゲームを与えています。これで命懸けのレースが見られるでしょう。どんな安全面が強化されてハラハラ感を感じないテレビなんかより凄い場面が沢山あると思いますよ」

少年の横に居る少女が、自分の役目なのか、五人の少女の名前を紹介している。

「気に入った子が居たなら、名前を忘れずに。では……スタート！」

少年の開始の合図の言葉にスクール水着姿の五人の少女が、ゴール目指して走り出す。……出そうとするが、アソコにロープが当たって走る事が出来ない。

「針金なら血が見れるんですが、残念ながら少女たちが傷付いてしましますからね」

少年がそんな事を言っている間にも、少女たちはビリにはならまいと、必死に前へと足を進める。

ゆっくりながらも、トップの少女が真ん中まで進んだ時だった。

「んあっ！」

小さい声で「あんっ」とか「んんっ」とかはみんな呟いているが、突然トップだった少女が大声で叫んだ。

「みなさん。真ん中からはロープに結び目を作っております。余計に歪む表情と声を聞くことが出来ると思います」

「『ウオオオオ』」

少年の言葉に会場のボルテージも一気に上がる。ここにはそれを止める人はいない。みんな欲望の限りに自分に合ったペットを探している。

「かはあ」「うぐぐ」「はあ……はあ……」

いろんな声が飛び交う綱渡りも、ついに終わりを迎えようとしていた。

「あつ……はあ」「くっはあつ」

五人中三人がゴールして、残り二人によるビリ対決となっている。互いにビリだけにはならまいと、必死に前へと前へと足を進める。

少しリードしているのが、金髪ツインテールで気の強そうな少女。少し遅れをとっているのが、金髪の少女。こっちも金髪だがこちらは、サイドテールで本来なら元気そうな少女だ。

「さて、そろそろビリが決定しますよ」

少年がそう言った時、リードしていたツインテールの少女が結び目にアソコが当たって一瞬足が止まる。その隙に遅れていたサイドテールの少女が抜き去りゴールを決めた。

「はあ……はあ……やつ……たあ……」

ゴールしたサイドテールの少女は安堵した瞬間に、意識が飛んで気絶してしまう。

「そ、そんな……!」

先にゴールされてしまつて呆然と立ち尽くす、ツインテールの少女。

「罰ゲームを受けるモノが決定致しました」

「や、やめろ! あたしに触るな!」

司会者の少年がそう言うと、ビリの少女を数人の少年が取り押さえる。そしてスタジアムの真ん中が開いて、奈落のようにそこからが透明な箱が現れる。

「今から行つ罰ゲームは、リッサの鉄柵です。ただし、今回は特別に中が見えるように透明になっています」

リッサの鉄柩とは名前の通りの柩で、犠牲者を中に入れた後にゆっくりと蓋をネジで押し下げていく。やがては犠牲者は押し潰されて死ぬ事となる。昔に本当に処刑道具として使われていた時には、圧死までに数日間かかるほどゆっくりと蓋は下げられた。当然その間は食料も水も与えられず、飢餓に苦しむ事になる。

箱自体の大きさも、身体を縮めてやっと入れるぐらいで、やはり手足を動かす余地はない。また、ネジ式であるためにある一定の負荷を維持する事が非常に容易であり、折り畳む形の拘束具とも似たような使いかたをする事も出来る。

「ふざけるんじゃないわよ！ 離なさいよ！」

ツインテールの少女は抵抗するが、少年の力には敵うはずもなく少女は箱に入れられてしまう。

「本来なら、数日間をかけてじっくりを圧死させるわけですが、残念ながらそんな時間はないので一気にいかせて頂きます。その代わりに箱の下に蛇口が付いているのが見えるでしょうか？ 少女から出た血が流れてる仕組みです。飲みたい方は一杯千円で販売します。量には限りがありますのでご注意ください」

司会者の少年がそう言つと、客から「買った」の声が響き渡る。

「やめなさいよね！ ふざけるんじゃないわ！ 今すぐ解放しなさい！」

棺桶見たく寝かされている少女の罵声が聞こえる。硝子は特別製の物で、外からは中が見えるが、中からは何も見えなくなっていた。「それでは開始します」

少年の言葉を合図に、蓋が下がっていく。あまり大きくない胸だが、それでも最初に当たるのは胸なので胸が圧迫されていく。

「や、やめなさい！」

少女の言葉などに聞く耳を持つものなど居るはずもなく、客に歪な笑みを浮かべさせるに過ぎない。

「や……やめて……あたしが悪かったから！」

もつ気の強そうな姿はなく、涙を浮かべている。それでも蓋はど

んどん下がっていき、ついに身体全体を潰しにかかる。

「う……うう……ああ……う」

箱の中から漏れてくる呻きは逆に、客は静かに箱の中の少女を覗いている。

「うう……うああ……ぐうううええ」

引きつった苦悶の声。その声が大きく高まった次の瞬間、骨の碎ける音が響いた。

「ぎい……ひい……ぎゃ……う……」

骨の碎ける音と、少女の断末魔の音が響く。箱の中に見えるのは、どろりとした赤い液体が溢れ出した搾り出された血に、砕かれた骨の欠片やら皮膚の断片、脳味噌などが混じり合ったものだ。

「……ウオオオオ」

少女の悲鳴が途絶えた瞬間、今度は客から盛大な喚声が響き渡る。「それでは、人形とワインの販売を開始します」

その後もパフォーマンスと罰ゲーム続いた。

頭蓋骨粉砕器、伸張拷問台、ガロット、ギロチン、拷問車輪、鉄の処女などで殺されていく少女。

運よく勝ち残っても、オークションで落札され、連れていかれていく。こんな闇オークションで貰われた少女たちが、普通に生活など出来るわけがない。死んだ方がマシだ、死にたいと思う生活が待っているだけである。

「残念なお知らせです。ついに最後のパフォーマンスとなってしまいました」

少年の言葉に客たちがブーイング。だが、そんな事は予想済みと少年はと言葉を続ける。

「最後ですが、もちろん一番盛り上がるのも最後なのです。よって、最も素材のいい五人が登場します。どうぞ」

後ろの扉から五人の少女が現れると、ブーイングは一気に大歓声

と変わった。

少女たちは手足を枷で拘束されていて、枷のせいで少女たちは四つん這いとなっている。首にはそれぞれ、黒、白、青、赤、ピンクの首輪を付けられている。

「最後の競技は、人間便器です。肉便器という言葉聞いたことはありませんか？ 抜きゲーのエロゲーなんかでよく登場する言葉ですね。文字通り人間を便器にしようといったものです。無理矢理に。ですが、今回は無理矢理ではなく自主的に飲んで貰おうと思います」

少女たちをスタジアムの真ん中で固定すると、少女たちの目の前に猫用の餌皿が置かれた。ただし、通常の餌皿より大きく、風呂桶くらいある。中には白い液体が入っていた。

「ルールはいたって簡単。最後まで残っていた人の負け、まああまり待たせても飽きてしまうので制限時間は一時間としましょう。では、スタート！」

確かに目の前に置かれた白い液体を飲む、飲まないは少女たちの自由だ。だが、それは飲まなければ罰ゲームが待っている。つまり強制されているのと同じだ。

「うう……」「うえっ」「マズッ」

少女たちは自分が死なないために、餌皿に注がれた白い液体……精液を嘔せながらも飲んでいく。

「そこまで。試合は決した」

「あっ……！」

少年の言葉に赤色の首輪を付けた少女が動揺して、周りを見渡す……自分以外の少女の餌皿に白い液体がもう残っていない事に気付いて青ざめている。

「最後の罰ゲームの少女が決まりました。そして最後の罰ゲームは、……これです！」

スタジアムの真ん中が開いて、出てきた処刑道具に客たちは「ついに来た」と喜び合っている。

出てきたのは、ファリスの雄牛。歴史上もつとも残酷な処刑道具と言われた代物。シチリアの君主ファリスが芸術家ペリロスに命じて考案させたという伝承から二人の名を冠して呼ばれている。そのためペリロスの雄牛とも呼ばれる。その拷問結果から吠える雄牛と呼ばれたりもする。

名称からも分かる通り、外見は巨大な金属製の雄牛である。内部には人が入れるぐらいの空洞があり、犠牲者は胴体に設けられた扉から内部へと閉じ込められる。その後、雄牛全体を炎で炙って内部にいる犠牲者を焼き殺すわけだが、その際に犠牲者があげる悲鳴が内部で反響し、まるで牛が吠えているように聞こえるのだ。

「や、やめて……」

もちろんそんな少女の言葉など認められず、少女は裸一貫で中に入れられてしまう。

火を付けられ、金属が熱くなりだす。

「オ……オオ……オオオオ……」

と、牛の鳴き声に似たくぐもった音が響き渡った。灼熱地獄となつた内部で、少女が叫んでいるのだ。

「ウオオ……オオオオ……」

どんどん音は大きくなる。

「……ウオオ……オオオオオオ……」

牛の鳴き声が部屋中に響き渡るが、暫くすると音がしなくなる。それを確認すると、火を消して、少女を中から取り出す。

少女の皮膚は全て剥がれ落ちて、肉も無惨に焼け爛れている。火刑と違って死体が直接火に炙られるのではなく、焼けた鉄板によって焼かれたせいで、きちんと全身のパーツの判別が付く。

「では、オークションに入らせて頂きます。少女たちと、その焼き物を」

「……気分転換に夜景でも見に行くかな」
そう思った俺は、パソコンの電源を切って部屋を出た。ずっとパソコンを使っていると、目に負担がかかるしね。

「……！」

俺は寮の屋上へ行くつもりだったが、知らない先輩が居たので、校舎の方の屋上へやって来た。……まあ知ってる先輩なんていないんだが。

だが、そのおかげで俺は今一番会いたい人に会う事が出来た。

「……」

向こうはこっちには気付いておらず、星空を見ている。

「……星屑、手を伸ばしても、決して届かない。……人の夢は儚い」

「……香菜ちゃん」

「……」

俺が話しかけた事で、こちらに気付いた香菜ちゃんは驚きの表情を一瞬したが、すぐいつもの表情へと戻った。

「なにかよう？」

「ああ、用がある。どうしてお前は優希ちゃんを避けるんだ！」

つい溜まっていた感情を思い切りぶつけてしまう。女の子に対してお前と言ってしまった。でも、そのくらい言いたかったんだ。

「……それは……あんたには関係ないでしょ！」

「関係なくない！」

「っ！」

「優希ちゃんは、引つ込み思案なのに、前にここで勇気を出して香菜ちゃんに思いをぶつけたんだぞ！　なのに、姉である香菜ちゃんが逃げてどうするんだよ！」

「……」

香菜ちゃんは黙っているが、俺は止まらない。心に仕舞い込んで

いた思いの丈を香菜ちゃんへとぶつけてる。

「香菜ちゃんが書いた漫才のネタ、面白かったよ。消した跡も沢山あった」

「……」

「優希ちゃんのために書いたんだろ！俺の所も最初は女言葉で書いてあった。本当は一緒にしたかったんだろ！そんなに……そんなに妹より声優の方が大事なのかよッ！」

「……ええ、ええそうよ！あたしには、あたしには優希より声優としての方がッ！方が……ッ！」

香菜ちゃんが言葉に詰まる。……それはやっぱり

「大事なんだろ？優希ちゃんのこと、なによりも。だから、恥を書かないように頑張って、頑張ってネタを書いたんだろ？だからあんなに面白いネタを書けたんだろ？」

「……ッそんだよ！好きだよ！ずっと一緒に居たいよッ！」

「なら……！」

「でもダメなの！あたしが優しくしちゃ！」

「どうして！」

「あたしは……もう優希とは一緒に居れないの！優希には黙っているけど、あたしは末期の癌なの！」

「え……」

「もう、この学園を卒業するまで生きれないのッ！」

……末期の癌……卒業まで生きれない……香菜ちゃんが……。

「なんで！どうして！」

「あたしに聞かないでよッ！あたしだって、あたしだって死にたくないわよッ！」

香菜ちゃんが死ぬ。優希ちゃんを残して？みんなと一緒に卒業出来ずに？

「そんな……」

「優希はあたしじゃ生きれない。だけど、そんなことはもう許されないの！だから優希は一人立ちしないといけないの！でも、

そんなことは出来ない。優希は一人じゃ生きていけない。なのに優希は自分から人に話しかけなくて友達なんか作れない。頑張って話しかけて、ようやく友達になりかけても腐女子だとバレたらイジメの対象となり、余計作れなくなる」

「……」

だから、本をなくした時、一生懸命探していたんだ。そして見せるのを躊躇ったんだ。また、イジメられると思って。

「だけど、あんたは違った。優希は珍しく人になついたの。どうやったかは知らないけど」

煙草を黙っていたからかな？

「だからお願い！ あたしの代わりになって！ あたしの代わりに優希を……優希を守って！」

「……」

あのいつも強気な香菜ちゃんが、俺に頭を下げる。言葉を失う俺に、香菜ちゃんは頭を下げ続ける。

「お姉ちゃん」

「優希ちゃん！」

「優希……」

後ろを振り向くと、階段のから、優希ちゃんが姿を現す。どうしてここに……？

「お姉ちゃん……」

「……」

香菜ちゃんが、身体を震わせている。その姿は驚きで言葉にならないといった様子だ。

「知らなかったです。優希は、優希はいつもお姉ちゃんに迷惑をかけて……」

「ち、違う……！ 迷惑なんて……！」

「優希……弱虫で、二次元のキャラにしか話しかけなくて……腐

女子とバレてイジメられて、上靴にゴミが入っていたり、教科書に死ねと書かれていたり、水をぶっかけられたときも、いつもいつもお姉ちゃんは自分を犠牲にしてまで、優希を……優希を守ってくれたです」

そんな事が……優希ちゃんの過去に……なんて酷い事をするんだ。優希ちゃんがどんな趣味を持っていたっていいじゃないか！ 少数派だからって、批判するなんて……批判する権利なんて誰にもないのに！

「……優希、いつもお姉ちゃんに守ってもらいました。だから今度は優希がお姉ちゃんを守る番ですっ」

「……優希……」

「だからッ！ だからッ！ 辛いときには泣いてくださいですっ！ 受け止めれるように強くなりますですからっ！」

「優希……ッ！」

香菜ちゃんが、優希ちゃんに寄りかかって鳴き始めた。それを優希ちゃんが慰めている。

「うっ……うっ……ゴメンね、ゴメンね優希……っ」

「お姉ちゃんは悪くないのです。悪いのは優希なのです。分かりましたから、もう強くななんていいんです」

その後も香菜ちゃんは泣き続けた。空では闇を綺麗な光が照らしている。その一つが流れたのはきつと、夢が叶ったからだよね。

数日後、俺たちはカラオケへとやって来た。俺と拓夢、光輝に悠斗。桜花に優希ちゃん……そして香菜ちゃんも。優希ちゃんの隣に座っている。

「夢、叶ったんだよな」

俺がそう呟くと、拓夢の入れた曲が流れ出した。……ん？

「この曲は……？」

そう俺が言う事を予想していたんだろう。拓夢が笑みを浮かべて

マイクを差し出してくる。

「リクエスト上位二百以内に入って曲がついに入っただよ」
「マジか」

「ああ、最初はお前にくれてやる。歌えよ」

「ああ、そうだな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2188v/>

Tales of Life

2011年12月31日18時07分発行